精神分析

〔東京精神分析學研究所・編輯〕

昭和八年八月

第四號

夢の研究

―特輯第一―

東京 不二出版社 日本橋

昭和八年七月七日第三種郵便物認可
昭和八年七月二十日印刷納本
昭和八年八月一日發行
毎月一回一日發行

夢の研究第一特輯

精神分析 目次

第一巻 第四號

研究

時評

夢に就いての三家の言葉

一、**フロイド**――夢は、禁壓された材料が常態的な人間に於いてさへも存在し、且つ精神的活動をなし得るものだとのことを我々に證明するものである。夢の解釋は精神生活に於ける無意識を知る鍵である。（『夢の註釋』邦譯二七六頁）

一、**ユング**――夢に就いては實に、『建築家の役に立たぬとて捨てた石が、主要な臺石となつたやうなものだ』と云ふことが出來る。夢が意識から匿されてゐる秘密を我々に如何に歷々と啓示するかは驚くほどである。（『分析心理學二論』英譯二〇頁）

一、**アードラー**――夢の中には我々の思想の同時的運動が起きる。その思想は我々の人格の特質や本性と同じ方向に流れ、またその表はれる言葉がなか〳〵むづかしいのでそれを了解した時でも、まだどこか判然しないところがある。

（『個人心理學』英譯二二一頁）

夢の新說

——,,Revision der Traumlehre," Prof. Dr. S. Freud.——

大槻憲二譯

私が始めて『夢の註釋』を公にし、夢に關する分析學的見解を樹立したのは一九〇〇年であつたが、それ以來今日まで既に三十餘年を經てゐる。また諸君のための『講義』に於いて夢の說を論じたのは今から十五年前で、その間、私の研究にも多少の變化と進展とを見たが、こゝに諸君に斯學の講義をなすに當つて、まづ夢の問題を捕へることは極めて自然でなければならない。夢の說は分析學史上に於いて特殊の位置を占め、また一つの轉向點をなしたものだからである。夢の說に依つて分析學は單なる心理療法から一歩を進めて、深部心理學としての確立を見るやうになつたのである。それ以來、夢の說はこの若き科學の最も特色的な、最も固有的なものとなり、これに匹敵するものは現代の他の如何なる科學にも見られぬものとなつたのである。民衆の信仰や神秘說から奪ひ來つた一つの新たな領域となつたのである。その主張するところが如何にも唐突であつたので、これを承認し得るものは精神分析の味方となり、これを承認し得ざるものは斯學に無緣の人と云ふことになつたのである。私にとつては、神經症者のわけの分らない

行動が自分のまだ未熟であつた判斷力を惱ましてゐた時に、この夢の說こそは唯一の賴りであつたのだ。私とても自分の認識の動搖のためにその正確さを疑ひ始めたこともあつたが、併し無意味に錯雜してゐる患者の夢を、本人の正確な、統一のある心理過程として飜譯することが出來た時には、やはり自分の進んでゐる道は本當なのだと勇氣百倍することになつたのである。

であるから、一方精神分析がこの三十餘年間に如何なる變化を閱したかを、他方、世界と人生の評價と理解とに如何なることをなしたかを、殊に夢の說に就いて追及して見ることは、私にとつて特別の興味あることなのだ。で、これ等二つの方面に就いて說明して行くであらう。

まづ一九一三年以來の『國際精神分析（醫）雜誌』の全卷を通覽して御覽なさい。主要な論文は大抵は夢の說に就いてなされてゐるのである。早期の諸卷に於いては、夢の說の種々な點に就いての論文が『夢の註釋論』と云ふ欄さへあつて、常に豐富に與へられてゐることを發見するであらう。併しながら、漸次年代の降るに從つてさう云ふ論文は少くなり、遂にさう云ふ欄さへなくなつてしまつてゐるのである。分析者たちは宛も夢に就いては何も云ふことがなくなり、夢の說は解決がついて了つたかの如き觀さへある。併し分析者以外の者等はどうであらうか。我々の臺所へ來て火を借りてお料理を作つて行つた（そのくせ我々の親切を別に有難いとも思つてゐない）精神病學者や心理療法家、常に斯學の驚くべき結果を利用してゐる所謂敎育家たち、文藝家や一般大衆はどうであらうかと顧望して見ると、誠になさけない有樣である。彼等の間には二三の定說が常識化してゐる。その定說の中には我々が嘗て唱へたこともない命題（例へば、一切の夢は性慾的性質を帶びたものであるとか云ふ如き）が含まれてゐるが、併し夢には顯在內容と潛在思想との根本的區別があると云つたやうな事や、不安の夢とても夢の願望充足的機能に矛盾するものでないと云ふ見解や、夢に附隨して生ずる聯想をとらなければ夢の解釋は下せるものでないと云ふことや、殊に、夢の

本質は夢の仕事の過程であると云ふことの認識の如き、總てこれ等重大な事柄はみな、一般人の意識には三十年前に於けると殆ど同樣、少しも分つてはゐないのである。私は敢へてさう云ふものである。何となれば、この三十年の間に無數の讀者から手紙を受取つたが、彼等は書中に夢を語り、その夢の意味を解き聞かせその性質を明かにしてくれと求めるのである。彼等は私の『夢の註釋』を讀むには讀んだが、到るところで私の夢の說に理解の出來ないところに遭遇すると云ふのである。併し私はそのために失望して、夢のまとまつた知識を人々に傳へることを控へるわけに行かない。實はこれまでにも、種々な場合に私はそれを試みては來たが……。

で、もしこゝに何人かゞ、例へば或る患者が、分析中に一つの夢を報告したとしよう。即ち彼は分析的處置を受けるに就いて當然彼が爲すの義務ある報告の一つをなしたのだと我々は考へるのである。報告とは云へ、報告としての躰をなさゞる報告である。何となれば、夢それ自身は何等社會的な——人が人に向つて與へる——表白でなく、理解せしむるための手段ではない。我々も實は、夢の本人がそれに依つて何を云はんとしたのかを理解しないのだ。彼自身とても我々と同樣、分つてはゐないのだ。今や我々は直ちに一つの決定に遭遇することになるのだ。——その夢は非分析者的醫師の主張するやうに、果して本人がよく眠らなかつたことの證據か、本人の腦髓のあらゆる部分が同樣に休息しなかつた證據か、或る個所が何か分らぬ刺戟に影響されて活働を續けようと思つたが、たゞ甚だ不完全にしか續け得なかつたことの證據か、もし夢がそんなものならば、我々は夜の煩ひのかゝる無價値な心理的所産に拘泥しない方が正當である。何となれば、そのやうなものを調べて見たところで我々の意圖には何等の役にも立ちさうにないからである。或はまた、——併し我々は前からそれとは違つた結論を得てゐることを氣付くのだ。我々は——實を云ふと全く肆意的にではあるが——このわけの分らぬ夢なるものが十分に妥當な、意味も價値も相當にある(從つて分析に於いて他の報告と同樣役立つ)心理的行爲でなければならないとの豫想を、要請を、樹てたのだ。我々が正し

いか否かは、たゞ試驗の結果が示してくれる。夢をそのやうな意味のある言葉として飜譯することが出來るやうになれば、即ち我々は明かに今までとは別の事を知り、今までは近付くことの出來なかつた如き種類の報告を持つことが出來る見込みが立つのである。併しながら今や我々は、自分等の問題の如何に困難であり、我々の主題の如何に謎に滿ちてゐるかを思ひ知るのである。夢をそのやうな常態的な報告に飜譯するには我々は如何にしたらよいのか、患者の表現のこの一部分が彼にも我々にも同樣に理解の出來ない形をとつたことを我々は如何に說明するか？

我々は只今の場合、歸納的な云ひ方をせずに演繹的な云ひ方をするから、そのつもりでゐて頂きたい。我々はまづ夢の問題に入るために二つの新しい概念を、名稱を確立しなければならない。人々の夢と呼ぶところのものを我々は夢の本文（テキスト）、又は顯在的の夢と呼び、夢の背後にあると我々が察知して求めるところのものを我々は夢の潛在的內容と呼ぶ。次に我々は當面の二つの問題をかう云ひ表はすことが出來る。――我々は顯在的の夢を潛在的の夢に飜譯し、夢の本人の精神生活に於いて如何にして後者が前者に換へられることになつたを明かにしなければならないと。前半は實踐的な問題で、つまり夢の解釋の事であり、技術を必要とする。後半は理論的な問題で、謂ふ所の夢の仕事を說明しなければならないが、併し一つの理論に過ぎない。夢の解釋の技法と、夢の仕事の理論と、この二つを新たに作り出さなくてはならない。

では、我々は何處から手をつけたらよいのか？　それは夢の解釋の技法からであると私は考へる。その方が話が具體的になるし、讀者にとつて一層印象的であらう。

さて、患者は一つの夢を我々に告げ、我々はそれを解釋すべき段取となる。我々はたゞ大人しく傾聽してゐるだけで、その間に自分の考へを働かせない。我々はまづ、何事をなすか。我々は患者から聞かされたもの、即ち顯在的の

夢には出來るだけ拘泥しないやうにする。勿論、この顯在的の夢にも我々の默過出來ないあらゆる特質が現れてゐる。顯在的の夢は聯絡があつて宛も詩のやうに見事に出來てゐることもあるし、またまるで妄想錯亂のやうにこんがらがつてゐる事もあるし、矛盾した要素を含んでゐることもあるし、機智や才氣ある結論を示してゐる事もある。夢は本人にとつて明瞭判然としてゐることもあるし、曖昧模糊としてゐることもある。その影像は十分な感覺的の强さを以て知覺されることもあるし、影のやうに、吐息のやうに判然せぬ場合もある。種々な特質が同じ夢の中に泯在することもあり得るし、種々の個所に配合されることもあり得る。更に、夢は本人に無關係なものゝ如く感ぜられることもあるし、最も强い喜びの感情、苦痛の感情を伴ふこともある。このやうに無限な多種多樣さを我々が無頓着に考へて居るものだと考へて貰つては困る。我々は後節に於いて再びこの無限なる多種多樣さを問題にし、それが解釋上非常に有用であることを知るであらう。併し始めには姑くそれを不問に附しておいて、まづ夢の解釋への主要道路を辿ることにするのだ。つまり、我々は夢の本人に、顯在的な夢の印象から姑く離れてくれと要求するのだ。彼の注意を夢全部から引離して夢の內容の個々の部分に向けてくれと要求するのだ。さうしてこれ等の個々の部分に就いて考へるときに聯想されることを云つて貰ふのだ。

から云ふのは、報告や懺悔を扱ふ方法としては、特殊な技法で、普通とは違つてゐるのではないか。併し諸君は慥に察してゐられるであらう、この方法の背後には豫想（假定）があつて、その豫想がまだ斷つてないのであらうと。併し我々はまづ論を進めて行かう。どう云ふ順序で、我々は、患者をしてその夢の各部を採上げて行かせるか。そこには幾多の道が開けてゐる。夢の話をさせた時に出て來た順序に、そのまゝ從つてもよい。それが、云はゞ最も嚴しい、古典的な方法である。それともまた、夢の本人をして、まづ夢の中に於ける晝間の殘物を取出させてもよい。何となれば、經驗の教ふるところに依ると、殆どあらゆる夢に於いて、夢の日の記憶の殘物、或はその日の一つ又は

それ以上の出來事への暗示が入込んでをり、さうしてその暗示の糸をたどつて行くと、一見かけ離れた夢の世界から患者の現實の生活への懸橋が、忽ちにして發見せられるからである。或は、患者が夢の內容に就いて、最も判然と、歷々と思ひ出せる要素から始めるやうにさせてもよい。聯想をとるにはこの方法が最も容易であると云ふことを我々は承知してゐる。これ等諸方法の何れに依つて聯想に近付いて行つても、別に區別はない。

このやうにして我々はやがて求むる聯想を患者から得る。聯想の中には種々雜多なものが出て來る。前日（夢の日）の記憶や、遙か以前の記憶、種々な考察、贊否さまざまの議論、信條、疑問などが出て來る。澤山の事が患者に於いて湧上つて來るが、彼は他人の前でそれを暫く停止する。大低の事は夢の一つの要素に對して判然たる關係を示す。それは、これ等の要素から出て來てゐるのだから敢へて不思議はない。併しその時、患者はきまつてから云ふものである――これは夢とは全く何の關係もないやうに思ひます、併し思ひ付いたから云ひます、と。

これ等種々な思ひ付きを聽いてゐると、やがてこれ等が夢の內容と、單に出發點より以上に多くの共通點を持つてゐる事を、我々は氣付くのである。これ等の思ひ付きに依つて、夢のあらゆる部分が驚くほど明かになつて來る。各部分間の空隙の、（宛も伏字のやうに）分らぬところが滿たされて行き、特殊な關係が理解されるやうになつて來る。遂に我々に、思ひ付きと夢の內容との關係が明かになつて來る。夢は諸々の聯想――まだどう云ふ法則に從つてゞあるか、その法則は明かには分らないが、とにかく何等かの法則に準據して生じた聯想、――の中からの拔粹のやうに見え、それの各要素は多數の中から擇び出した代表の如くに思はれる。かくして我々は獨特の技法に依つて、夢に代表せられてゐるものを、夢の心理的價値の存するそのものを、而もそこには夢としての怪しさ、不思議さ、荒唐無稽さを示さないところのものを、獲得したことは疑ふまでもない。

併し、誤解してはいけない！　夢に就いての聯想は、まだ夢の潛在思想ではないのだ。潛在思想は聯想の中に、宛

も母液の中に於けるが如くに、つかつてゐるのだ。併し全部そつくりつかつてゐるわけではない。聯想は、一方、我々が夢の潜在思想を摑み出すに必要なより以上に多くを提示するものである。つまり患者の知力が、夢の思想に近付く途上に於いて提供しなければならなかつた一切の細目、經由、結合を提示するのである。他方、聯想は本來の夢の思想の直前まで來ると急に立停つて了ふことが屢々で、たゞそれに近付き、それを暗示するに止まるのである。その時、我々は自働的に這入り込んで行くのである。暗示せられたものを補充して行き、否むべからざる結論を抽出し、患者が聯想に於いてたゞ僅かに觸れたに過ぎなかつたものを判然と口に出すのである。と云ふと、これは患者が我々に提供した材料を、我々が機智や氣まぐれを以て弄び、そこから抽出すことの出來ないものをそこにあるやうに附會するものゝ如くに聞こえる。それに、我々の方法の正しいことを抽象的な言葉で證明することは容易でない。併しまア諸君は自分で自分の夢を分析して御覽なさい。或は我々の文献中のよく分析説明せられた實例を精讀して御覽なさい。如何にそれ等の解釋の仕事が必然であり當然であるかを思ひ知られるであらう。

我々が夢の解釋に於いて一般に、また第一に、夢の本人の聯想に依憑するとしても、やはり我々は夢の內容の何等かの要素に對しては全然獨立的に振舞ふのである。何となれば、我々はとにかくさうするより外ないからであり、また或る要素に就いては全然聯想が起きて來ないからである。我々は夙に氣付いたことであるが、さう云ふ風に聯想が起きて來ないのは常に同じ內容であつて、それの數はあまり多くないのであつた。で、我々は經驗を重ねて行く內に、それ等は象徵として何等かの別のものゝ代理と考へて解釋すべきであることを知つた。夢の別の要素と比較して見て、それ等の要素には一つの確乎たる意義の存することを我々は認めざるを得ない。と云つても、その意義はたつた一つに限つたわけでなく、その意義の範圍は特別の、我々には通常でない規則に依つて定められてゐるのである。我々はこれ等の象徵を飜譯することを理解してゐるが、併し夢の本人は自分でそれを使つてをりながらそれを理解してゐな

いのであるから、我々が夢の本文を聽いただけでは夢の解釋のために隨分と骨を折るが、一つの夢の意義は直接的に明かになる。けれども、夢の本人はやはり謎の前に立つてゐるのである。併し、象徴に就いて、象徴に關する我々の知識に就いて、象徴が供する諸問題に就いて、既に私はこれまでの多くの講義に於いて相當澤山に話したから、今日はこれ等を繰返すには及ばない。

我々の夢の解釋法は、まづ以上の如くである。次に當然起つて來る疑問は、『我々はその方法であらゆる夢を解釋することが出來るか』と云ふことである。で、それに對する答としては『否、あらゆる夢とは行かぬが、大低の夢は解釋出來るのだから、この方法の妥當であり有用であることは確だ』と。併し、どうして總ての夢がいけないのか。それに答へるためには、我々は一つの或る重要なことを學んでゐなくてはならない。その重要なことを說くとすると既に夢の構成の心理的條件に論及して行くことになる。即ち『夢の解釋の仕事は一つの抵抗――その抵抗はあるかなきかのものから（少くとも現在の我々の力では）到底克服し難きものに至るまで種々ある――に逆つてなされねばならないから……。』かゝる抵抗の出現は、解釋の仕事の間に人々はこれを看過することは出來ない。多くの場合に於いて、聯想は滯りなく出て來て、最初の一二の思ひ付きに依つて說明はつく。然るにまた或る場合には患者は、聯想を語る前に遲疑逡巡し、やがて夢の理解に對して有用なものを獲得する前に長たらしい聯想のつながりを聞かされることも屢々である。聯想の鎖が長たらしく迂回的であればあるほど、抵抗は確に强いのだと、我々は當然、考へてゐる。また夢の忘却に於いても我々は同じ抵抗の力を認める。患者が如何に努力しても自分の夢を考へることが出來ないと云ふ場合が屢々ある。併しながら、患者が分析への關係を障害してゐる困難を我々が克服すると、忘れられた夢は忽ちにして現れて來る。また別の二つの觀察もこれに屬してゐる。一つの夢の中で或る部分が思ひ起せなくて、あとから想起されることがある。これはこの部分を忘れておかうとの一つの試みだと考へるべきである。經驗の示すと

ところに依ると、これが最も重要な部分である。そこで我々はかう假定する。この部分の報告に對してより以上に力強い抵抗が起こるのであると。更に我々は、夢を見た人が覺醒直後に夢を書き記すことに依つて、その夢の忘却に備へるのを見るのが屢々である。我々はその人に云ふことが出來る、それは無駄である、何となれば、貴君は抵抗に逆つて夢の本文を保持することが出來たけれども、抵抗はやがて聯想の上に現れて、顯在的の夢の解釋を不可能ならしめるであらうからと。かう云ふ次第であるから、その後にも抵抗が起つて聯想を押へ付け、從つて夢の解釋が駄目になつても、我々は敢へて不思議とするに當らないのである。

吾人は以上の總てからかう結論するのである、我々が夢の解釋の仕事に際して氣付くところの抵抗はまた、夢の成生に就いても參與するに相違ないと。我々は夢を、最も弱い抵抗力の下に現れるものと、最も強い抵抗力の下に現れるものと、二つに區別することが出來る。併しこの抵抗力は同じ夢の中に於いても、部分に依つて强弱がある。最も美事な夢に於いてもその聯絡を中斷してゐる空隙、不明な個所、錯亂した個所のあるのは、この抵抗力のせいである。

併しその時、抵抗は何に對して何をなすのであるか？　ところで抵抗はそこに葛藤があることの確かな證據である。そこには何物かを排斥しようとする力と、自らを表現しようとする或る力とが存在してゐる筈である。で、顯在的な夢として現出するものが、これ等一切の決定（二勢力のこの葛藤が凝縮して成るところの決定）をなすのかも知れない。夢の或る個所に於いては一方の力がその云はんと欲するところを十分に云ふ事が出來、或る他の個所に於いては反抗する力の方に、云はむと意圖せられた事を完全に解消せしめる（又は、意圖せられた事の痕跡をだに止めざる事柄を以て代償せしめる）事が出來るかも知れない。夢の構成の特質として最も屢々、最も數多く見られるのは、葛藤が妥協（互讓）となつて現れてゐる場合である。即ち、云はむと欲する力の方は云ひたい事を云つて除けてはゐるのだが、併しそれが本來云はむと欲したまゝの形ではなく、弱められ、歪められ、分らなくされてゞある。で、このや

うに、夢が夢の思想を忠實に傳へたものではなく、兩者間の空隙を橋渡しすべき解釋の仕事を必要とするならば、それは反抗し禁制し限定するところの力（我々が夢の解釋に際し抵抗の認められたことから結論したところの力）のせいである。我々が夢を孤立した現象として、夢と關係してゐる心理的構成から獨立した現象として、研究する限りは、吾人はこの力を夢の檢閲と名付けたのである。

諸君は既に前から御存知の通り、この檢閲なるものは夢にのみ特殊な事實ではない。心の二つの個所――それを吾人は不完全ながら、無意識的な抑壓されたものと、意識的なものと區別したが――の間の葛藤が抑々我々の精神生活を支配してゐるのだ。夢を解釋せむとする際に出て來る抵抗はつまり夢の檢閲のある證據で、これがまた抑壓的抵抗に外ならないのである。且つこの抑壓的抵抗に依つて二つの個所が相互に區分せられることになるのである。諸君はまたかう云ふ事を知つてゐられる、即ち一定の條件の下に於けるこれ等二つの力の葛藤からして夢以外の心理的構成が生じて來る事を、さうしてその構成は夢と同じく妥協の結果である事を……。從つて、諸君は、これが神經症學説への序説と如何なる點で關係があるかを再説して、そのやうな妥協構成に就いて吾人の知つてゐるところを披露して貰ひたいとは望まれないであらう。諸君は既に理解してゐられる通り、夢は病理的所產であり、ヒステリー症候や、强迫觀念や、妄想觀念などを包含する一聯の病理的所產の第一類であるが、併し夢だけはその所產が直ぐに消え去ることゝ、常態生活者の心理に於いて起きる點とで、他の病理的所產と異つてゐる。何となれば、夢の生活は、アリストテレースも云つてゐるやうに、我々の精神の睡眠中に於ける働き具合である。我々はそれを確言する。睡眠狀態は現實的外界からの離反であつて、從つて精神症的條件がそこに展開せられてゐる。重い精神症を細かく骨折つて調査して見ても、この病狀に一層固有と思はれる何等の特徴も見られない。併し精神症に於いては、現實からの離反は二様の遣り方で爲されてゐるのだ。即ち、抑壓されてゐる無意識的のものがあまり强くなり、そのために現實に依屬す

る意識が克服されることに依つてか、或は現實が堪え難いほど苦痛になつて來て、腰付の亂れた自我が自暴自棄的反抗に於いて無意識的本能に身を托することに依つてか、何れかだ。夢の精神症は無難であつて、これは意識的に意志して一時的に外界から身を引いてゐる結果であつて、かゝる精神症は眼覺めて再度外界との關係を締結するに及んで忽ち消失する。睡眠者が外界から孤立してゐる間に、また彼の心的エネルギーの配分にも變調を來たす。覺醒中には無意識を抑壓するために支出されてゐる部分のエネルギーは、睡眠に入ると共に剩餘になる。何となれば、このエネルギーは自分の多少の自由を利用せむとしても、言語動作へのはけ口は閉されてゐるので、幻想的な滿足への無難なはけ口を發見するに過ぎない。このやうにして今や、夢が出來上るのである。併しながら、夢の檢閲と云ふ事實があるところを見ると、睡眠中と雖もこの抑壓的抵抗は十分に存續してゐることが明かである。

こゝまで考へて來ると、夢にはやはり何か機能があるのか、夢も何か役に立つのかと云ふ質問があつたとしても、我々には答へるべき道が開けてゐる。睡眠は我々に邪魔のない安息を與へるものであるが、この休息は三方面からおびやかされる。多少とも遇然的なものとしては、睡眠中に外界から來る刺戟と、まだ消えやらぬ晝間の興味とであるが、必然的に來るものとしては滿足を得てゐない、抑壓されてゐる本能的亢奮にして外界への機會を待つてゐるものである。夜になつて抑壓力の低下する結果として、内外の刺戟が無意識的な本能源泉と結合するたびに、常に睡眠の安息が亂される危險がある。夢と云ふ過程は、そのやうに種々の力の働き合つて生じた結果を、無難な、幻覺的な體驗と化せしめ、かくて睡眠の持續を確保せしめる。睡眠者が時に不安の夢のために眼を醒ましたとしても、それはこの機能に對する予盾ではなく、寧ろそれは番人が事態を危險なりと認め、自分の手にはおへないと信じた證據なんである。であるから、我々は睡眠中にも、『なアに、これは夢なんだよ！』と云ふ保證を自分に與へて睡眠を持續させようとすることが稀ではない。

これだけの事を私は諸君に夢の解釋に就いてお話ししておきたかつたのだ。夢の解釋の本務は、夢の顯在內容から潛在思想を判知することにあるのだ。これを判知すると、實踐上の分析に於いては大低は夢に對する興味は解消する。我々は夢の形で受取つた報告を、患者の他の報告とつき合はせ、更に分析を進めて行く。我々は夢に就いては、もつと永く拘泥する興味を持つてゐる。我々は、潛在的な思想が變じて顯在的な夢となつたその過程を研究することに誘惑を感ずる。我々はその過程を夢の仕事と名付ける。私はこれまでにも夢の仕事に就いて隨分精しく論じた事であつたから、今日はほんのざつと話しておくだけで十分であらう。

右に述べて來たやうに、夢の仕事と云ふ過程は全然新奇なもので、これに類したものは、これまでには知られてゐなかつた。この夢の仕事に依つて我々は、無意識界の中に働く過程の何たるかを始めて洞察することが出來、またそれ等の過程は我々の意識思想に就いて我々の知つてゐるところとは全然別物であることが分り、また無意識過程は意識思想にとつて全く突飛な、出鱈目なものと思はれるに相違ないことを知つたのである。か〻る發見の重要さはやがて神經症的徵候の構成に際しても同じ機制——思想過程とは我々は云はない(つまり、潛在的な夢の思想から顯在的な夢に變化させるのと同じ機制)——の働いてゐることを知つて、愈々その大を加へたのである。

以下の文に於いて、私は多少紋切型の論じ方を避けることは出來ない。我々はまづかう云ふ假定を立て〻見よう、我々が或る夢の場合に就いてそれを完全に解釋して、顯在思想から一切の潛在的(多少とも感情のまつはつた)思想を觀破し得たと……。さうなるとそこに我々には一つの區別が立つわけで、この區別が我々を更に一歩進ませる。これ等の潛在思想の殆ど總ては、夢の本人に依つて認識され、承認される。彼はその夢の當時、又は嘗ての日、成程そのやうに考へた、又は考へたことがあつたに相違ないと、認める。然るに或る一つの潛在思想に對しては、彼はそんなことは考へたことがない、そんなことはけがらはしいから考へる筈がないと頑張る。多分、彼はそれを非常に亢奮

して拒否するであらう。そこで我々には分るのである、前の思想は彼の意識的（更に正しく云へば、前意識的）思想の部分であつて、これは彼の覺醒生活に於いても考へられるわけで、また恐らく日中にも考へられてゐたことであつた。然るに後の、拒否らせれた思想（もつと正しく云ふならば、感情又は亢奮）は、夜中の事である。これは夢の本人の無意識に屬してゐるので、それ故に彼はこれを拒否し、認知しないのである。かゝる思想を何等かの形で表現し得るためには、夜になつて抑壓力の緩むのを待たなければならない。常にこの表現は弱められ、歪められ、装はれてゐる。夢の解釋の勞作を用ゐなければ、それを發見することは出來ないであらう。この無意識の亢奮が變装して檢閲の關所を通過するの機會を持つのは、咎めを受けてゐない他の（夢の）思想と結付くお蔭である。他方に於いて、前意識的夢の思想が精神生活を睡眠中にも支配する力のあるのは、この同じ結付きのお蔭である。何となれば、我々にとつて何等疑ひの餘地ないことは、この無意識の亢奮が夢の本來の創造者であり、夢の構成に對する心的エネルギーを保持してゐると云ふことであるからだ。一切の他の本能亢奮と同様に、この無意識亢奮もそれ自身の滿足を求める以外には何の努力をも拂はない。さうして我々が夢の解釋に於いて得た經驗に依ると、これがまたあらゆる夢の意味であることが明かである。總ての夢に於いて、本能的願望が充足せられたものとして表現せられるわけである。睡眠に依つて精神生活が現實から遮斷せられ、從つてそれが原始的機制に退行するやうになるので、この願望せられたる本能滿足を幻覺的に現實對象として体驗することが出來るやうになる。この同じ退行の結果として、夢に於いては、觀念は視覺的影像に變形せられ、かくて夢の潜在思想は戯曲化せられ繪畫化せられる。

夢の仕事のこの部分からして我々は、夢の最も驚くべき、最も特殊なる性質を知るやうになる。夢の構成の順序をこゝに繰返し述べよう。端緒として、睡眠への願望、外界との故意的離隔がある。そのために心的装置に對して二つの結果が生ずる。第一に、より古き、より原始的な心の働き方（即ち退行）が復活して來る。第二に、無意識の重し

となつてゐた抑壓的抵抗力が降下するやうになる。この第二の變化の結果として、夢の構成が可能となり、この可能性を種々の力（亢奮してゐる内外の衝動）が利用することになる。このやうにして生じた夢は、既に一つの妥協構成である。そこに二重の機能がある。夢は一方に於いて、睡眠を妨げる刺戟を克服することに依つて睡眠願望に奉仕してゐる點では、自我の御免を被つたものであり、他方に於いて、夢は、抑壓せられてゐる本能的亢奮に、この事情の下に於いて可能なる滿足を、幻覺的願望滿足の形に於いて認許するものである。夢の構成の全過程は、併し、眠れる自我に容認せられるけれども、なほ多少は醒め殘つてゐる抑壓力の行使する檢閲に條件づけられる。これ以上簡單には、私は夢の構成の過程を述べることは出來ない。この過程はこんなに簡單なものではない。併し私はこれから、夢の仕事のどんなものであるかを說くであらう。

と、またぞろ我々は、夢の潛在思想の事に舞戻る！　潛在思想の最も力強い要素は抑壓せられたる本能亢奮であつて、この亢奮が偶然あり合はせの刺戟に依憑し、晝間の殘物に轉嫁せられて、多少弱められた、裝はれた表現を、潛在思想として作り出すのである。一切の本能亢奮と同樣に、この亢奮も亦行動に依る滿足の方へと押進んで行く。併し言動への道は睡眠狀態の生理的條件のために阻まれてゐる。この亢奮としては知覺の退行的方法をとつて、幻覺的充足に滿足するより外に途はないのである。このやうに夢の潛在思想は感覺的影像と視覺的場景とに轉換せられる。我々に非常に不思議でいぶかしく思はれるものが現れるのは、かう云ふ次第に依つてゞある。もつと微妙な思想關係は言語的手段に依つて表現せられるものであるが、それ等の手段たる接續詞、前置詞、名詞や動詞の變化などの一切は、そこに缺如してゐる。何となれば、潛在思想にとつてはそれ等の表現手段がないからである。文法のない原始語に於けるやうに、たゞ思想の素材のみが表現される。抽象的なものはその土臺になつてゐる具體的なものに還元される。このやうにして生じたものは結局、支離滅裂なものと思はれ易い。で、意識的思想には如何にも奇異に見える象

徵を盛んに用ふる事に依つて、或る種の對象や過程やを表現することは、心的裝置の古代的退行に符合するのみならず、また檢閱の要求にも協ふのである。併しそれよりも遙かに甚だしい別の變化が、夢の要素に對して加へられる。夢の諸要素の內で、相互に何等かの接觸點のあるものは、一つの新しい統一にまで凝縮される。思想が影像に轉變されるに際し、さう云ふ統合を、凝縮を許容する如きものが、まづ第一に好んでなされることは明かだ。宛も、材料を揃へて押し付ける力がそこに働いてゐるかの如くである。凝縮の結果として、顯在的な夢に於ける一つの要素は潛在的な夢の思想に於ける幾多の要素に符合し得ることになる。併しまたその逆に、夢の思想に於ける一要素が夢の顯在に於ける幾多の影像に依つて代表せられることもあり得る。

なほもつと著しい現象は轉位又は强調點移動と云ふ事で、これは意識的思想に於いてはたゞ考へ違ひとして、或は機智の手段として、知られてゐるだけである。夢の思想の個々の觀念は總て等價ではない。それ等はそれぞれにそれに纏綿されてゐる感情量に相違がある。從つてそれに應じて、これは價値が大であるとか小であるとか、興味を持つだけの事があるとかないとか云ふ風に判斷せられる。夢の仕事に於いてはこれ等の觀念とそれに纏綿してゐる感情とは切離される。感情はそれ自身に遊離し、他のものに轉位（移動）される事もあるし、そのまゝ存續してゐることもあるし、變化することもあるし、全然夢の中へ出て來ないこともある。感情の遊離して了つた觀念の重要さは、夢に於いては夢の影像の感覺的の强さとして復歸する。併しこのやうに强調が重要なものから重要ならぬものへ移動してゐるために、夢の思想に於いてはワキ役にしか過ぎないものが夢に於いてはシテ役として前面に乘出し、またその逆に潛在思想の本質的なものが夢に於いてはたゞ傍流的な、あまり重要ならぬ表現をなしてゐるに過ぎないことを、我々は氣付くのである。夢の仕事の內でこの轉位作用ほど甚だしく、夢を夢の本人にとつて奇異に、不可解にするものはない。轉位は、夢の思想が檢閱の前を通過するに就いてなさねばならない夢の歪みの主要手段である。

夢の思想に對してこれだけの干渉を加へると、夢はまづこれで殆ど出來上つてゐる。そこへなほやゝ常住的でない要素（所謂第二次的仕上げ）が附加はる。それは夢が知覺對象として意識の前に浮び上つた後にである。我々はその時、夢を、丁度我々が自分の知覺內容を取扱ひ慣はしてゐるやうに取扱ふ。さうして、分らぬところを何とか穴埋めをし、聯絡をつけやうとして、屢々甚だしい誤謬に陷るのである。併しこの云はゞ合理化的の活動は、夢にせいぐ尤らしい外見を與へるに過ぎず、實際內容には適しないものとすることになるが、この活動はやめて了ふか、或は最小限度に止めることは出來る。さうなるとやがて、夢はそれの總ての缺けたところ、跳ばしてあるところを明るみへ出すことになる。他方に於いて、忘るべからざることは、夢の仕事がまた、いつも同じやうに精力的でないと云ふことである。時にはたゞ夢の思想の或る部分に對してだけその仕事が限られ、他の部分は何等の變化を受けずに夢の中に現れることである。かう云ふと如何にも、人間は夢の中で最も微妙な、最も錯雜した、知的作業をなし、思辨し、機智し、結論し、問題を解くかの如くに聽こえるが、併し總てこれ等は我々の常態的な精神活動の結果である。それが夢の前日に起きようと、夜中に起きようと、夢の仕事には何の關係もなく、夢に對して特質的なものは何も現れてゐない。なほまた、夢の思想の內部に（無意識的本能亢奮と晝間の殘物との間にさへ）相違の存することをも一度强調しておくことは無駄ではない。晝間の殘物は我々の心理行爲の多種多様であることを示すが、夢の構成の本來の動力たるべき無意識的本能感情は常に必ず願望充足となつて終るのである。

以上の事は、私が既に十五年も前に確に話した事であるが、今や我々はその間にどれだけの變化と新しい見解とをとるやうになつたかを、纒めてお話したいと思ふ。

諸君はこの時代の文献に於いて多數の確論と細說とを發見せられるが、それ等に就いては私は諸君にたゞ證明を與へるだけを企てるものである。また私はその證明を與へるに就いて、既に以前に知られた二三のことを補ふことが出

來るに過ぎない。それは大低は夢の象徴、並びにそれ以外の夢の表現法に關係してゐる。ところで、極最近に聞いた話だが、アメリカの或る大學の醫者たちは、精神分析には科學としての特質を容認することは出來ないと云つてゐるさうである。その論據とするところは、精神分析では實驗的に證明することが出來ないと云ふにある。そんなことを云へば、天文學だつて同じである。天体に就いて實驗を試みると云ふことは甚だ困難である。やはりたゞ觀察に頼るより外はない。何れにもせよ、ヰインの研究者が我々の象徴を始めて實驗的に確證する試みをなした。シュレッター博士 Dr. Schrötter と云ふ人が、既に一九一二年に發見したところに依ると、深く催眠術に掛つた人間に性的なことを夢みよと命ずると、このやうにして生じた夢に於いては、性的材料は、我々のよく知つてゐる象徴に依つて代償せられる。例へば、或る婦人が女友達との性交を夢みよと命ぜられた。すると、彼女の夢にこの女友達は旅嚢を一つ持つて現れた。さうしてその嚢には『婦人專用』と貼紙がしてある。もつと印象的なのは、一九二四年にベートルハイム、Betlheim とハルトマン Hartmann とが、所謂コルサコフ式錯亂の患者に對して試みたものである。彼等は患者に露骨な性的内容を持つた話をして聞かせ、さうしてその話を患者に反覆させてそこに現れる歪みを注意してゐた。その時、出て來たのはやはり、性器や性交の象徴として我々に知られてゐるものであつた。就中梯子段の象徴が出て來たが、これは意識的に歪めようと思つて出來る事でないと彼等の云つてゐるのは正しい。

ジルベラー V. Silberer は種々面白い試驗を澤山にやつて見て、夢の仕事が抽象思想を視覺影像に轉換させつゝあるところを、云はゞその現物を、押へることが出來ることを明かにした。彼自身が疲れて眠むくなつてゐる時に、何か精神的な仕事を無理にしようと思ふと、その時思想は消失してその代りに幻像（それは明かにその思想の代償であるところの）が現れることが屢々だと云ふ。

それに對する簡單な實例としてから云ふのがある。——私が（とジルベラーは曰ふ）自分の論文中のこだ〳〵した

holprig（直譯すれば凸凹した）ところを直さうと云ふ計畫を考へる。すると、自分が木片を鉋で滑かにしてゐるところの幻を見る。かう云ふ試驗をしてゐる時に屢々現れたことは、變形（加工）を受くべき思想でなく、その時の彼の主觀狀態が（對象的なものでなく、內的なものが）幻想の內容となつたと云ふことである。これがつまり、ジルベラーの所謂『機能的現象』である。と云ふのはどう云ふ意味か、それは實例を擧げれば直ぐ分る。ジルベラーはある問題に關する二人の哲學者の見解を比較しようと骨折つてゐた。併し彼は眠氣を催してゐたので、その內の一人の方は又しても忘れるのであつた。さうして遂に彼は幻想を見た。即ち彼が機嫌の惡い秘書に何か聽いてゐるのである。ところが秘書は机の上にうつ伏せになつてゐて始めの程は頓着もしないが、やがて不精無性に彼の方を打仰ぐ。どうやらこれは研究の狀態から說明がつくらしいのである。即ちこのやうにして得られた幻想は甚だ屢々自己觀察の結果を表はしてゐるのである。

も少し象徵の事をお話しよう。象徵の內には、我々がそれを認識したとは信じてゐるが、如何にしてその象徵がさう云ふ意味をとるやうになつたのか、我々にはなほ明かでないものがあつた。さう云ふ場合には、言語學、民間傳承、神話、儀式など他方面からの確證を俟たねばならなかつた。この種の實例は外套の象徵であつた。我々は或る婦人の夢に於いて外套が男を意味してゐると云つたことがある。然るにテオドル・ライク Th. Reik は一九二〇年にかう報告してゐる。『アラビアのベドゥイネ族の非常に昔からの結婚式に於いて、花婿は花嫁にアバと呼ぶ特殊のマントを着せ「今日以後この外套を御身に着せるものは我以外にあるべからず」と云ふ式辭を告げる』（Robert Eisler: „Weltenmantel und Himmelszelt" に依る。）これを讀んで諸君は思ひ當る點があるであらう。我々はまた別の象徵を澤山に發見したが、それ等の內の少くとも二つだけを、こゝに報告しておくであらう。アブラハムの報告（一九二二年）に依れば、夢の中の蜘蛛は母の象徵であるが、併しそれは人々の恐れる男根所有の母であつて、蜘蛛に對する恐怖は母と

の近親姦への畏怖、女性器への畏懼を意味する。諸君も多分御存知の通り、ギリシア神話中のメドゥサの首は、同じく去勢恐怖の主題に歸せらるべきものである。今一つ諸君にお話しておきたい象徴は、橋のそれである。フェレンチーはそれを一九二一―一九二二年の間に證明してゐる。それは本來は兩親が性交時に相互を結合する男根を意味するものであるが、併し段々その意味が擴充せられて、最初のものから遊離するやうになつた。抑々人間が產水の中からこの世の中に出て來ることの出來たのは男根のお蔭であるのだから、その限りで橋は彼岸（未出產、母胎）から此岸（人生）へのかけ渡しとなる。また人間は死をも母胎（水中）への復歸と考へてゐるのであるから、橋はまた死への運搬者としての意義を持つやうになる。さうして最後に、更に一層最初の意味から離れて橋は一般に過程、經過、狀態の變化と云ふ事になつた。こゝまで考へて來て思ひ當るのは、男になりたいとの願望をまだ克服出來ない婦人が屢々、彼岸に達するには少しく短い橋の夢を見ることであつて、これは如何にも右の論述と一致する話である。

夢の潛在內容に於いて、實に屢々、童話、傳說、神話などの主題として知られてゐるものを聯想せしめる如き狀景や立場が現れる。さう云ふ夢を分析して見ると、これ等の主題を作り出した本來の興味の何たるかゞ、やがて分つて來る。併しその際、我々は勿論、時間の經過に伴うてそれ等の材料の蒙つた意義の變化を忘れてはならない。我々の解釋の仕事は、云はゞ素材を發見するものなんである。素材であるから屢々最廣義に於ける性的なものであるが、それが後に種々の變形（加工）を受けて性的と見えぬ種々なものとなつてゐるのである。そのやうに性的なものに還元して見るものであるから、分析に通曉してゐない人々から、宛も我々が後期の發達に即して樹立された一切の文明的なものを否定し又は輕視するものであるかの如くに、我々は叱られたのである。何と云つても、さう云ふ觀方は人々を教ふるところ多く、且つ興味があるのである。同じことはまた造形美術の主題を推論して來ることに就いてもあてはまるのである。例へば、アイスラー J. Eisler（1919）は彼の患者の夢に教へられて、プラクシテレースがヘルメス

として表現した『男兒を弄べる青年』を分析解釋した如きである。もう一言云つておくならば、併し私は云はずに居られないのだが、神話の主題は屢々夢の解釋に依つて說明がつくのである。だから、例へば、迷宮（ラビリンス）の傳說の如きは肛門出產の表現として認められるのである。くねくした道は腸管であり、アリアドネの案內の綱は臍の緒である。＊

註　アリアドネはミノースとパシファエとの娘で、その愛人テシウスが父の命に依りアテーネ人からの貢物をミノタウルに屆ける時、案內の綱を彼に與へ、それに依つてテシウスは迷宮からの出口を發見することが出來たとホーマーの物語に出づ。迷宮の傳說は西洋古代に七八種もあり、わが國の八幡の籔ぬけも勿論この類。分析學はかゝる空想を腸管出產說と呼ぶ。（譯者）

夢の仕事の表現法は非常に興味のある、その手に於いて殆ど盡くるところを知らざるものであるが、これは我々の深き硏究に依つて愈々明かになりつゝある。それに就いて私はなほ二三の證據を擧げておくであらう。例へば、夢は瀕繁の關係を、同種類のものを幾つもおくことに依つて表現する。或る若い娘の非常に特異な夢があるからお話しよう。――彼女は或る大きな部屋に這入つて行つた。するとそこに或る人間が腰かけてゐる。さうして七八度も反覆するが、そこにゐる人間はいつも彼女の父である。併しこれは、解釋の附帶事情に依つて、その部屋と云ふのが母胎であると分ると、容易に判斷のつく夢である。それは大低の娘が持つてゐることのよく分つてゐる空想と同價の夢である。即ち彼女等が既に胎內にある時、懷妊中の母に訪れ來る父に會ひたいとの空想である。夢の中では事情が逆になり、父の入來と云ふことが、父の身柄の存在と云ふことに轉位せられてゐるからとて迷ふには當らない。やはり、そこには特別の意味があるのだ。父の身柄がいくつもあると云ふことは、問題の出來事が幾度も繰返されて起つたと云ふことを意味してゐる。夢に於いて瀕繁（Häufigkeit）と云ふことが重複（Häufung）と云ふ事で表れてゐても、さう驚くこともないのである。それはたゞこの言葉の本來の意義を還元把握したに過ぎないのだ。瀕繁と云ふ語は今日では時間に於ける反覆を示してゐるけれども、併し本來、空間に於ける集積と云ふことから由來してゐるのだ。併し、

夢の仕事は時間的關係を空間的關係に轉換し、空間的のものとして表現するのである。例へば我々には夢の中で、人と人の間の場景が、まるでオペラグラスを逆様にして見た時のやうに極めて小さく、遠く見えることがある。小さいと云ふ事は空間的に遠いと云ふことと、この場合同じで、時間的に遠いことを意味してゐる。それは遥かの過去に起つた場景だと解すべきである。それから諸君はまた記憶してゐられるであらうが、私は諸君に既に以前の講義に於いて語り、且つ實例をも示しておいた、我々はまた顯在的な夢の純形式的特徴を解釋に適用し、かくして夢の潜在思想の内容に飜譯することを學んだ筈であつた。今や諸君は知られたであらう、一夜の夢は總て同じ關係に屬するものであることを……。併し、これ等の夢が夢の本人にとつて一連續と思はれるか、或は二三の部分に分れてゐるか、或はどれだけ多くの部分に分れてゐるかは、決して重要ならぬ事でない。これ等部分の數は、丁度それだけに分れてゐる(夢の潜在思想の構成上の)中心點、もしくは夢の本人の心理生活中の相克する流れに、符合することが屢々である。それ等中心點や流れは夢の各々の部分に於いてそれの主要な(専らそこだけでと云ふわけではないが)表現を得てゐるのである。短い前夢と長い本夢とは、相互に條件と完成との關係に立つ事が屢々である。それの最も判然した實例は私が前に擧げておいた。本人が如何樣な方法でか挿話的であると云ふ夢は、實際夢の思想の副的部分に相當する。フランツ・アレクザンダは對をなした夢に關する一研究(一九二五年)の中で、一夜の二夢に於いては夢の課題の實現が分れてゐて、それ等を一緒にして見ると各々一つだけでは實現し得ぬ一つの願望を二つの部署に於いて充足してゐることが稀でないことを明かにしてゐる。夢の願望が一定の人物に對する何か許されざる行爲を内容とするものである場合には、即ちこの人物は第一の夢に於いては露はに出てゐるが、併し行爲の方は臆病げに暗示されてゐるに過ぎない。第二の夢の方では全然違つてゐる。行爲の方が露はに分つてゐるが、併し人物の方は誰だか分らなくなつてゐるが、或はどちらでもいゝやうな人物で代償されてゐる。だが、これはいかにも狡猾い感じである。一對の夢の兩

方の部分の間の第二の、右のに類似した關係は、一方が懲罰を表はし、他方が罪悪的な願望充足を表はしてゐることである。これはつまり、俺は既に自分の悪に對して懲罰を受けてゐるのだから、その禁ぜられたものを敢へてしてもいゝわけだ、と云ふわけである。

私はもうこれ以上、このさゝやかな發見や、夢の解釋を分析操作に適用することの是非やに關する長談議で、諸君を退屈させるには忍びない。諸君は、夢の本質と意義とに關する見解に於いて、如何なる變化が起きたかを知りたくて、しびれを切らしてゐられるに相違ないと思ふ。諸君も御存知の通り、それに就いてはまだあまり報告がしてないのである。夢の說の全体に對する論議の中心は恐らく、一切の夢は願望充足なりと云ふ主張であつた。分析を知らざるものは不可避的に、またしても〳〵、だつて不安の夢も隨分あるぢやないかと抗言して來るが、それに對しては吾人は既にこれまでの講義に於いて十分に反駁しておいた筈である。願望の夢、不安の夢、懲罰の夢を概論するに依り、吾人は自說を確立しておいたのである。

懲罰の夢もまた願望充足ではあるが、併しそれは本能感情の願望充足ではなく、心理生活中の批判的、檢閲的、懲罰的局所の願望充足である。我々が純粹に懲罰の夢を見たとすると、即ち輕卒な思想行爲は我々に願望の夢を再び見ることを許すのである。その願望の夢に對して懲罰の夢は正當の返報であるのだ。さうして顯在的な夢に於いてはこの返報の方が代りに出てゐるのだ。諸君も御存知の通り、夢の研究は我々にとつて始めには、神經症の理解に資したのである。然るにまた後には、神經症に就いての我々の知識が逆に、夢に關する我々の考へ方に影響を及ぼして來たのである。やがてまたお話しするであらうが、我々は心理生活の中に特殊な、批判的、禁止的な廳（それを我々は超自我と名付ける）の存することを認めざるを得なくなつたのである。我々は今やまた夢の檢閲をこの超自我の所行と認めることに依り、夢の構成に於いて超自我のなす役割を一層仔細に注意するやうになつたのである。

夢の願望充足說に對しては、たゞ二つの大きな困難が生じたのみであるが、これをいろ〳〵に論じて見ても、結局まだ十分に滿足の行く解決はついてゐないのである。第一の困難は、何か打擊となつた體驗を、重大な心的外傷を受けた人間が（例へば、それは戰爭などの場合にあり勝ちだし、また外傷的ヒステリーの原因としても存する）、きまつたやうに夢に於いてさう云ふ外傷の反覆をするのである。かう云ふ非常に苦しい外傷的体驗をこのやうに反覆することに依つて、如何なる願望感情が滿足され得るのであらうか？　それは判定に困難である。第二の事實には、我々は分析操作に於いて殆ど每日のやうに遭遇してゐる。この方はまた、第一のほどには重大な抗議を意味しない。諸君も御存知の通り、精神分析の課題の一つは初期幼時を被うてゐる健忘の薄幕を取除くことである。さうしてその薄幕の中に包まれてゐる早期幼兒時代の性生活の表現を想起させ意識化させることである。然るに幼兒のこの最初の性的體驗は、不安、禁止、絕望、懲罰などの苦痛なる印象と結び付いてゐる。これ等の體驗が抑壓されてゐることは人々は理解してゐるが、それ等が夢の生活の中にあまねく出て來ること、甚だ多くの夢の空想の原型となつてゐること、夢はそれ等の幼兒的場景の再製やその場景への暗示に滿ちてゐることは、理解してゐない。それ等の體驗は不快であるのが特質となつてゐる事と、夢の仕事には願望充足の傾向のあることゝは、どうもあまりよく調和しないやうに見える。併し、この場合に我々は困難をあまり大袈裟に考へ過ぎてゐるやうである。その同じ體驗に、實は、消えやらぬ、充足されざる、あらゆる本能願望がまつはつてゐて、そこから本人の全生涯中に夢の構成へのエネルギーが供給せられるのだ。またそれ等の體驗にはそれだけの强い衝動力があるのだから苦痛に滿ちた外傷的材料を夢として表面に押出すことが出來る筈である。また他方に於いて、これ等の材料が再製せられるそのされ方に、夢の仕事の骨折りが歷々と見える。夢の仕事は不快を消すに歪みを以てし、絕望に代ふるに許容を以てせんとするものだ。外傷的神經症に於いてはさうでない。この場合には、夢は常に必ず不安となつて出て來る。と云ふ意味は、この場合に夢の機能が果

されなくなると云ふことを我々が認めるのを廻避しようと云ふわけではないのだ。例外を除けば原則は動かぬと云ふ命題に頼らうとするのでもないのだ。かう云ふ命題が果してどこまで正當か、私には疑はしく思はれる。併しこのやうな例外があつても、この原則は動かないだらう。我々が夢の如き特殊の心理的行爲を研究の目的として心理的衝動全般から取出して見るならば、それに依つて夢が特有の法則に從つてゐることを發見し得ることになるのだ。ところが心理的衝動全般の中に夢を再び置いて考へて見ると、折角發見した法則が怪しくなり、動搖してくるやうに思はれるが、その覺悟はしてゐなくてはならない。夢は願望の充足であると我々は云ふのであるが、それで突込まれる心配があるなら、夢は願望充足の試みであると云つておけばよい。でも、心理の動力性に透徹し得る人に對しては、さう云つたからとて別の事を云つたことにはならないのだ。或る事情の下では夢はその意圖をたゞ不十分にしか貫徹し得ないのだ。或はその意圖が全然駄目になるより外はないのだ。外傷への無意識定着は、夢の機能のこれ等の障害の內で、第一位に來るものであるやうだ。夜になつて抑壓が解除されるがために、外傷的定着が活動を始めて、睡眠者は自ら夢を見ることになるが、併し外傷的定着の記憶痕跡を願望充足に轉換させようとする夢の仕事の行ひは駄目になるわけである。このやうな事情からして人々は不眠となり、夢の機能が果されないことの不安のために睡眠を放棄することになるのである。外傷的神經症はそれの極端な場合であると我々は認めるが、併し人々は幼兒的體驗にもやはり外傷的特質を認めざるを得ない。であるから、外傷的神經症以外の條件の下に於いて、やはり、夢の働きが一寸ばかり障害されることがあつても、敢へて驚くには當らないのである。（完）

夢の象徵の意義

——„Die Bedeutung der Symbolik", Dr. W. Stekel——

岩倉具榮譯

夢判斷の術は最も古い時代から存在してゐた。最古の文書の中にも夢判斷に關する話が出て居る。夢は、超人間的な力と人類との間の媒介と考へられた。夢の中で語られるものは、大低は神の聲であつた。併し、惡魔や惡の力も亦夢を通じて人間と交通することが出來た。それは迷信の時代に屬するので、吾々には殆んど考へられないことである。ニイチェは云つて居る、『光と影と色合は、兎に角變つて了つた。吾々は古代の人類が、一番普通の日常生活の事實について——例へば晝間と眼醒めについて、——如何に感じて居たかは最早や正確には理解して居ないのである。古代人は夢を信じて居たのだから、彼等の眼醒めて居る間の生活も違つた色合を持つて居たのだ』と。併し學問のある人々とは反對に、單純な人間は夢を「泡」の樣なものに過ぎないとは決して考へなかつた。彼等はかゝる心的經驗が眞實であるとの考へを持つて居た。たゞその考へが、我々から見れば『物語的』と云はざるを得ない信念の上に頑強に依存して居た。彼等は、夢を通じて未來を判斷しようとしたのである。夢は誤つことのない豫言

と見做された。夢を判斷することが出來た者は誰でも、未來の謎を解くべき天稟を持つてゐるとされた。此の信念からはまた、夢を金儲けに應用しようとする考へが出て來た。夢の影像を數に解釋し換へることは、今日迄も熱心に行はれ、民衆の間で重要な役目を演じてゐる。「敎養のある」階級はこの樣な行動を傲然と笑ふことが彼等の義務であると心得てゐた。彼等は夢を、意識によつて支配されない幻想の無意味な遊びであると考へた。それにしても、一寸考へて見ても、よしんばゆがめられた形で出てゐるにもせよ、この中の心的素材が問題だといふことくらゐは分るに違ひないのである。一つ、その素材の中から何が出て來るかを調べて見よう。夢の謎を解いて見ようと敢へて試みた研究者も時々はあつた。併し、この樣な有望な試みも徒に牽强附會の說に終るのみであつた。

アナトール・フランスは『夢の力は、現實の力よりも大きいことを私は堅く信ずる』と云つてゐるが、實に尤である。夢は現實世界から超感覺世界へのかけ橋である。古代の人々は吾々よりもこの事をよく知つて居た。彼等は夢を信じ、且つ夢を通して彼等自身が神に一層近づくと考へた。

神は、永遠の中に投影せられた吾々自我の理想である。吾々が理想我についてかくあれかしと要求するものが、吾々には神の命令と思はれる。自我の凡ての現れは、常に崇高なる理想との關係に齎される。こゝよりして夢の起源に關する最初の原始的な考へ方——即ち、夢は神の賜物であるとの考へ方——が生ずるのである。神の聲は夢を通じて命令し、警告し、告知し、又は賞美する。古代の夢判斷者は、これ等の神秘な言葉を理解し、且つそれによつて未來を豫言することが出來る才能を誇りとした。

併し、理想自我が永遠の中に投影せられる許りではない。惡い自我も亦外方に投射せられて惡魔の力の誘惑とか影響とかとして考へられる。神ばかりでなく惡魔もやはり夢を利用して、我々の精神を支配し、惡い精神を注入する。

中世の素朴な考へによれば、夢には天國と地獄との爭、神と惡魔との戰が現れるのであつた。その戰鬪は常に、人の

空像中に力強く、いそがしく、現れた。ヨブやイエス以來、下つてファウストやパーシファルに至る迄、詩人の創作の如何に豊富なることよ！

この雄大なる象徴的影像（作品）となつて表現せられるものは、本能と禁制との、原始人と文化人との間の永遠の爭である。吾々の文化は吾々の本能を常に抑制することを要求する。文化人が共同生活の階段を高く上れば上る程、社會の倫理的束縛の課する法則は愈々きびしくなるのである。教養といふものは、おだやかに作用する禁壓を意味する。社會的自由が大きければ大きい程、即ち個人の社會的權利が強ければ強い程、その人の個人的自由の範圍は狹くなり、又個人が全体の利益の爲に自分自身に課さねばならない制限がきびしくなるのである。社會の進歩は、個人主義を沒却することの上に礎かれるのである。

夢は、意識に支配されることなく、或は意識の制限された支配の下に、我々に現れる空想である。夢は一つの幻覺である。意識は禁壓を加へるものである。倫理的の自我は最初に意識を支配し、それから漸次に深い無意識に滲透する。そのために、覺醒せる自我に見えるところと夢の幻覺との間に溝が生ずる。良心とは宗教的又は倫理的性質を帶びた全禁壓の總量である。既に『良心』„Gewissen“といふ言葉そのものからして、それが善と惡とに就いての知識„Wissen“であることを示して居る。原始人は此のやうな知識を持つて居ない。彼等はたゞ自分の本能の慾求と、願望の滿されないことから起る不快感と、願望の滿されることに伴ふ快感とを知つて居るのみである。吾々の中にある原始人は夢の中で再生するのである。

けれども、吾々の文明的自我の慾求と、吾々の原始的自我の慾求との間に生ずる甚大なる緊張は、遂には恐るべき狀態を釀成するに至る。文明的自我は、原始的自我を知らず、又知らうとは欲しない。文明的自我が夢の言葉を理解しようとしないのは、かくしてこの罪のない（？）無智を一層徹底させるためである。この理由の爲にも、夢は、神

秘な象徴的言葉としてその影像を現出するのである。これ等の言葉はまた同時に、原始人の言葉である。何となれば、原始民族は亦象徴的のやり方で自分自身を表現したのであつた。最初の文書は、象徴的の書き物である。劍は戰を、木は自然を、電光は神を、意味した如きである。夢判斷の術は、この象徴的言葉を日常の言葉に置きかへることに存するのである。

では、夢の働きは何であらうか。吾々は夢は單に種々な念慮を無意味に弄ぶものに過ぎないといふ古い考へ方を通り越して居る。吾々は同樣に、夢を超人間的な力と考へる古代人の假説をも放棄するのである。吾々は夢を願望充足と見做すフロイド説に直面する。

フロイドは夢に關する或る書物『入門』の中でから述べて居る。『吾々の外界に對する關係といふものは、時々はその關係を中斷するのでなければ堪えられない樣な事情がそこに伴うてゐる。それ故に吾々は時々、外界を知らなかつた狀態（つまり胎内生活）へと退却する。少くとも吾々はそれに非常に近似した狀態、つまり溫く、暗く、且つ刺激のない狀態を吾々自身のために作り出すのである。成人でも或る人々は睡眠中、身体をちゞめ、母の胎内に休んで居る幼兒の特徴に非常に近い位置を實際にとるものである。それは宛も吾々大人も全部的に世界に出て居らず、三分の二だけ出てゐて、あとの三分の一は未だ生れてゐないかの如くである。それゆえ毎朝の眼醒めは、新しい誕生の樣なものである。』と。

詩人ヘッベルは胎内空想に沈潜するといふ疑はしい考へには依賴せずして、同じ思想をもつと美しく云ひ現した。即ち『眠りは己れ自身に沈潜することである』と。私も同じ考へを自分の一論文『眠りへの意志』に於て次の如く表現した。『眠りは人が己れの過去を再經驗し、現在を忘却し、未來を豫想することである』と。

フロイドの最近の著作から引いたこの一例は、彼の夢に關する考へが如何に一面的であるかを十分に示して居る。

彼に取つて夢は、常に願望充足である。彼は凡ゆる夢を、この願望充足といふ規矩に押入れる。かくして彼は、この理論には適合しない精神感應の夢を全く無視して居る。彼は精神感應の夢を信じないのである。しかも彼は又、吾々が警告の夢、不安の夢、並びに啓示の夢として考へざるを得ないあらゆる別の夢は凡て看過する。不安は彼に取つて常に願望の抑壓されてゐるしるしである。けれども夢には、本能と禁制との間の永久戰、原始人と文明人との葛藤が表れるのであると考へるならば、即ち吾々は夢をその戰鬪の鏡と見做さねばならない。その鏡面に禁制と同様に本能も影像として映らなければならない。又その鏡面には、他の思想も精神感應的に現れる筈である。若しも人々が、本能のみを見れば、私自身も一時採用した誤つた考へ――即ち、夢は單に願望充足に過ぎないといふ考へ――に導かれ易くなる。何となれば、凡ゆる願望の背後には、常に一つの本能、即ち性本能、食本能、權力本能、向上本能などが存在するからである。併し若し吾々が禁制の方を研究すれば、吾々はそれ等の背後に亦文明の効果を見出す。即ち警告、未來に對する準備、豫言、宗教性又は凡ゆる種類の道德的抑制等である。

若しも私が、私の考へとフロイドの考へとを具體的の例に就いて比較すれば、多分私の考へはもつと明瞭になるであらう。上記の著作に於て、フロイドは特別の夢について語り、彼の解釋を附加へて居る。彼は次の様に云ふ。

『私の婦人患者の一人が、治療中その父を亡くした。その時以來彼女は、その父を再び夢の中で再生させる爲に凡ゆる機會を求める。彼女の夢の一つでその夢に關係のない父が現れ、そして云ふのである。『今は十一時十五分過、十一時半、十二時十五分前である』と。この奇妙な夢の解釋に對して患者は只、父がいつでも食事の時間に成人した子供達が一つに集まるのを喜んで見てゐたことを思出すのみであつた。それは疑ひもなく問題の夢の要素に何等かの關係を持つて居るが、これだけでは何故このやうな夢となつたかと云ふことに對しては何等の結論をも與へない。治療の最中に私が得たある觀察により、彼女はその愛し、尊敬してゐた父に對して或る批難的反抗心（それは注意深く抑壓されてゐたが）を抱いてゐたことが、この夢の成立に與つて力あつたのでないかとの疑ひが、その場合正當である樣に見えた。更に彼女の聯想を續けて行くと、いかにも夢からは離れたことのやうに、彼女は語り出した。その前日に、色々心理學の話があつて、一人の親類の者が『吾々の總てには原始人が生きてゐる』

と云つた。吾々は今や彼女を了解出來ると信ずる。それは彼女の亡父を生き返らせることの出來る立派な機會を與へるものだ。彼女は父を夢の中で晝食時に十五分間呼出すことによつて父を時計人 Uhrmensch（卽ち原始人 Urmensch）としたのである。』

Uhrmensch（時計人）と Urmensch（原始人）との洒落を無理だと思ふ向きもあらうが、才智あるこの大家は、かう云ふ機智が夢の本質にあるのだと敎へられるのである。夢の本人は父に會ひたいと思ひ、そしてその親切な夢は彼女の願望を滿してやる。それ故にフロイドによれば、典型的に明瞭な願望充足である。併し私はこの夢を警告と認め度い。彼女の父の死はこの患者に強い影響を及ぼし、彼女の思想は世間的のことから超世間的の題目に向つた。彼女は、死後の生命といふ問題に興味を持つて居る。この地上の生活は單に永遠の生命への準備でなければならない。それは宛も父が彼女に次の樣に叫んだものゝ如くである。「生命は短い！ 汝の日々をよく用ひよ！ 間もなく十二のベルが鳴るであらう（幽靈の時間）。間もなく汝の日は終るであらう！」と。

時の過ぎ易いことは時刻の漸進してゐることによつて非常に巧妙に示されて居る。卽ち「十一時十五分、十一時半、十二時十五分前」と。神經病は病苦といふ形で、本能と禁制との間の爭鬪を表現するものであるから、吾々はこの患者の病苦を了解することが出來る。一つの力が彼女を歡樂と享受とに引き寄せ、もう一つの力が、彼女を斷念と自制の方向に押遣る。父は權威（又は天にまします父なる神）の代表として現れる。そして彼女に警告する。「凡ての地上の喜びを棄て、神の取調べと永遠の生命とに對して準備せよ。審判の日は近い！」と。

これではこの夢は願望充足であらうか。若しも父が彼女の望みに應じて現れ、も一度會ひたいとの彼女の憧れを滿してやつたとするならば、彼はその子供に近づくためにも少し何とか別の言葉やもつとやさしい素振りがなかつたものであらうか。私はこの夢の中に單に良心の力のみを見る。私は苦しい不安を感じ、誤用され、失はれた生命に對する甲斐なき後悔を認め、不安の叫びを聞いて、具さに同情を覺えるのである。

この夢は一つの警告であり、又同時にそれは夢の本人の將來を我々に告げる。彼女は禁慾と諦觀との途上にさまよひ續けることになるであらう。彼女は敬虔となり、天國的な歡喜への希望が地上的な歡喜との離反の代償となるに違ひない。煌々たる焰の樣な言葉が、この娘の夢の天國を照らし、凡ゆる人間の定めなる最期を指示して居る。

然らば、この夢の本質は何か？　それは夢に貫流する力（本能か禁制かの）に從つて、願望でもあらうし、警告でもあらう。夢は解決出來ない問題の解決を求める。それは過去と現在との比較であり、又未來の建設である。その内容は無盡藏で一定の命題の狹い制限中に押込めらるべきではない。それは元來、人間と云ふ謎のやうに不可解なものだが、何等かの先入意見から出發しないならば、觀破出來るものである。眼醒めて居る時の人間の思想は單なる一命題に歸せられるであらうか。吾々は單に願望充足の事をのみ考へるであらうか。吾々が良心と云ふ事實を考へに入れて見れば、この事は問題にするまでもなくなる。夢は、測るべからざる深所から流れ出で良心といふ濾過器を通じて遂に高いところへ浮び上つて來る吾々の心の流れである。

總て眠りに陷ることは、常にその日の死である、眼醒めることは再生である。死に就いての念慮は、特別の影像となつて夢の中に潛入する。吾々は死といふ事實を日中は忘れ、又日々の生活の喧騷は良心の聲を聞こえなくするものとすれば、夢は吾々の心に不斷に「死の思ひ」を呼びかける！　吾々萬人は、「今は十二時十五分前である」との警告の聲を聞く。吾々の錯雜した願望を貫いて、吾々の凡ゆる穢れた慾の中に死の詩は鳴り亘る。かくして吾々は幾度も〳〵死し、偉大なる審判を何度も何度も體驗し、かくして吾々は恐怖と後悔の中に過去を敢へて批評的に顧望する。日毎の夜は吾々の思ひのためには淸めの淨火である。吾々の中には、天國と地獄とが橫たはり、吾々の中にはまた、罪人と判官とが同座する。それは宛も無限の中に投出した理想が夜になると吾々の內に復歸する道を見出すかの如くであり、宛も吾々を享樂から享樂へと誘ひ、吾々の童心に嫉妬や復讐心、悲慘な名譽慾や許されぬ慾望を滿す惡魔を、

毎夜打ち敗らうと試みて居る如くである。かくて凡ゆる夢はこの痛ましい戰の姿を示現するものであり、凡ゆる夢は人類が自らを超えて生長し、思ひも寄らぬ高所に至らんと欲することの一つの證據である。グリルパルツェルのいみじき戯曲『夢は生命』に於て吾々は、警告としての夢の働きが、本能と禁制との間の爭の姿としての夢の機能が、驚くほどよく書き表はされてゐるのを見るのである。この詩人は、この戯曲に於て、夢を了解する鍵を吾々に提供したのである。

けれどもフロイドが夢の國に入るべき道を吾々に示し、又夢を神秘にしてゐた被ひを先驅者の烱眼を以て最初に取除いたことに對しては、我々もフロイドに感謝せねばならぬ。今日では夢の解釋は、精神療法に於て缺く可らざる方法となつて居る。精神療法家たらむと欲する者は何人も、夢判斷の術に達せねばならない。

それはたやすく熟達せられる術ではない。それには特別の訓練と非常に多くの忍耐を要する。それは人々がこれまでに個人的に得た觀察と經驗とを良心的に檢覈し、遂に獨自の確信と信念とを得るに至ることが必要である。

夢の解釋に對する適當な訓練は、言葉に對する適切な新しい考へ方をすること、二重の意味を鋭くあとづけること、及び夢の象徴性と歪みと云ふ過程とに通曉することである。

人生に於ける象徴の役目は未だ十分に認められて居ない。フォイヒテルスレーベンは『凡ての藝術は象徴である。』と云つてゐる。またヘッベルは『自分の生命の一番重大な仕事は、自分の內生活の象徴化であると思ふ』と、云つてゐる。象徴主義は吾々の全存在に行き亘つて居る。言語、習慣、身振、動作及び思想は多少とも神秘な象徴である。象徴の知識なくしては、夢の解釋は不可能である。フロイド以前の近代の夢の研究者の大きな誤りは、彼等が象徴と云ふものに馴染まなかつたことである。その點に於いては古代人の方が我々よりも勝つてゐる。夢の象徴は聖書に於いて何と美事に語られてゐる事であらう！　またダルディスのアルテミドロス Artemidoros aus Daldis に於いて、夢

の象徴は何と完成されて見える事であらう！　彼の著『夢の象徴』は今日でも精神分析にとつて一讀の價値がある。フォヒテルスレーベン曰く「凡ての藝術は象徴主義に過ぎない」と。ヘッベルは宣言する「吾が生涯の最も重要な仕事は吾が內生活の象徴化であると思ふ」と。象徴主義は凡ゆる吾々の生活に滿ち亘る。言語、風俗、特性、思考――凡ては多かれ少かれ、隱れた象徴主義である。象徴主義の恐るべき重要さを示して吳れたのは、ルドルフ・クラインパウルであり、彼の種々の著作、特に「言葉なき言語」と、より以上の勞作「言語の生命」と稱するものによる夢判斷の術を述べ始める前に、吾々は暫く聖書の夢とギリシヤの解釋法とに注意を向けよう。夢の象徴といふ問題を概說するには之より以上適切な例を私は知らないのである。

人々の最もよく知つてゐるのは、モーゼの第一書に現れたヨセフの夢判斷である。ヨセフが高い地位に登つたのは、たゞ彼が主人の夢を適當に判斷する特別の才能を持つてゐたために外ならないのである。彼が兄弟たちに話した最初の夢は、次の如くであつた。

（一）『吾々は野原で束を結び、自分の束は眞直に立つた。そしてあなた達の束は私の束の前に頭を下げた。』

兄弟達はすぐに、ヨセフが自分達を追越することをその夢は意味すると解釋した。即ち『お前は吾々の王となつて、吾々を治めるのであらうか』と。我々近代人とてもこの夢はこれ以外に解釋しようがないと思ふ。只吾々は、その夢から本人が名譽心の強い男であると結論するのである。そして名譽心の強い人は、實行に必要な知識と不屈の精力に惠まれてゐる時には、實際それをやり通すので、青春時代にその樣な夢をよく見る人の未來を考へて好ましい前兆を推測するのは正當である。

ヨセフの第二番目の夢も、同じく名譽心の夢である。

（二）『私は太陽と月と十一の星が私の前に頭を下げたと思つた。』

この夢はやがて彼の破滅となつたが、同時に彼の奇蹟的な幸運の始まりともなつた。ヨセフのこの他の夢判斷も、同樣に驚くべきものである。

(三)『七匹の肥つた牛を食べ盡した七匹の醜い痩せた牛。』

彼は鋭くも、七年の豐年が七年の飢饉に次いで來ると判斷した。

之等の判斷は夢の象徵を美事に把握してゐることを示す。ギリシャに於いても、夢判斷の術は同樣な道程をとつて行はれた。その內、私はこゝに、アルテミドロスから二つの例を引いておく。

(四)『或る人が海神ポセイドンの柱に鎖でしばられる夢を見た。彼はポセイドンの一僧侶となつた。何となれば、僧侶になつてゐれば、彼はその聖所から離れないでゐなければならなかつたからだ。』

この未來に對する透視も正鵠を得てゐるが、アルテミドロスのその次の豫言も同じく妥當なものである。それはやがて私が利用する。始めから僧侶にならうと熱望してゐないものならば、それに强制されなければなるものではない。アルテミドロスの著作から引く第二の夢は、吾々が一層屢々出會す象徵を示してゐる。その夢の影像に於ては性が肉として表現される。さうして人間の肉感は動物の肉として表現される。

(五)『或る者が、自分の妻をたらし込み、犧牲にし、その肉をひさぎ賣り、それによつて大なる額をもうけた夢を見た。それから後に、彼は、その事を大變喜んで周圍の者の嫉みを避けるために、得た金を隱さうと試みたといふ夢を見た。』

「その男は、自分の妻を賣つて、恥づべき行爲によつて金を得た、その收入の途は大變利益があることが分つたが、彼はそのことを何人にも知らさないことが必要であると知つた。」

その男の場合に於ても亦、願望が行爲の父であつた。即ちその行爲よりも前に夢を見てゐる。彼はまづ、實行したくてまだ實行し兼ねてゐることを夢みた。彼は夢を神からの命令と見做すことが出來たので、彼はどうせ夢を見なく

てもやるにはやつたであらう行動をその夢のためにとることとなつた。多分それは夢の後、間もなくの事であつたらう。この夢は待ち兼ねた夢である。夢の本人は、妻を賣つて利益を得たくてたまらなかつたのである。

東洋の夢判斷の術からも、やはり澤山の實例を引くことが出來ると思ふ。私は Buadem（ブアデム）（「この男」の意）と云ふふざけた匿名者の記事だけをこゝに紹介することにするが、その匿名はミューレンドルフ博士に從へば、有名な道化詩人 Nassr-ed-din のために編者 Mehemed Tewfik がつけたものに過ぎないのである。このトルコのオイレンシュピーゲルとも云ふべき道化詩人は、十四世紀中榮えたと推定されて居る。

ブアデムがまだ、ほんの五六歳の頃に、彼は次の樣な夢を父に話した。

（六）『お父さん、昨夜私はお菓子の夢を見ました。』

『さうかい坊や、それはなか〳〵意味のある夢ぢや。（じようだんに）私に十パラ（コンスタンチノープルで行はれた最小の金錢單位）をお寄越し、さうすればその夢を判斷してやらう。』

『若しその十パラがあるのなら、私はお菓子の夢は見なかつたでせう。』と。

吾々は今や一足飛びに十六世紀に移つて、有名な醫者であり哲學者であり數學家であるカルダノスの夢に吾々の注意を向けよう。彼は『睡眠論』De Somniis といふ本の著者であるが、彼は夢の豫言力を確信してゐたので、夢の影像に從つて路傍の盗人の娘を妻に選んだほどであつた。その婦人のために、これまで眠つて居た彼の情熱が眼醒めると云ふことを豫言した。彼は、三十四歳に至る迄、不能であつた。不能症者が「愛の園」に入らんと渇望することは、何人にもたやすく了解されるであらう。カルダナスはこの話をから語つてゐる。

（七）『ある夜私は、花と果物とのある美しい園に居た。なごやかな空氣がそこに滿ち亘つて居て、畫家でも詩人でも、人間のどんな考へでも、これ以上に魅力のあるものを作り出すことは出來ないほどであつた。私はその花園の入口にゐた。門が開かれてゐて、私は白い衣物を着た少女を見た。私は彼女を抱いて接吻した。けれどもその最初の接吻で、園丁は門をかたく閉した。私は彼に門を開けたまゝにしておく樣に大變熱烈に頼んだ。私はそれを悲しみ、少女を戀しく思つてゐたので、閉め出された

様に思つた。』

愛の園が閉ざされてゐる時には、空想的な人はどんな夢を見るであらうか。この美事の實例は書間の欲望を、一部分だけおほはれた象徴として示して居る。けれども象徴は、この例に於るが如く常に見え透いてゐるとは限らない、屢々夢の全部が象徴的表現に用ゐられてゐることがある。いづれ後に考へねばならぬ一層複雜な問題もあるが、今のところ避けておかうと思ふ。私はたゞ、フロイドの「夢の解釋」から如何に夢が影像を通じて俗語を表現するかの例を引くに止めよう。或る婦人の夢――

（八）『召使の少女が窓掃除の用意をするらしく梯子を上つてゐて、チンパンヂーとゴリラ猫（後にアンゴラ猫と訂正された）を連れてゐる。彼女はそれ等の動物を夢の本人に投げる。チンパンジーはその婦人にすがりつくが、彼女はこれを大變嫌がる。』

「この夢は、最も簡單な方法でその目的を達してゐる。即ち、物の云ひ方を文字通りにとり、その言葉の音に依つて表現してゐる。『猿』といふ語は、殆ど凡ゆる動物の名と同じく、輕蔑の言葉である。で、この夢は慣用句の「輕蔑の言葉を吐き散らす』„mit Schimpfworten um sich werfen' を影像化してゐるものである。」

屢々吾々はこの様にして、夢に於ける立場や影像を慣用語に歸して見なければならなくなる。夢は話を文字通りにとる。吾々は夢の現象を影像として考へねばならぬ。それは特別の技術と獨特の習練とを要する。兩方とも獲得されねばならない。

私が今述べて來たことを說明する爲に、非常に特殊な内容を持つた一つの簡單な夢を記さう。不安に惱めるベータと云ふ紳士は、次の樣な夢を見る。

（九）『私は大きなキリストの木製肖像を自分の前に見る。私は或る一片をぬきとるのである。』

この夢も亦、象徴的に了解されるべきである。この夢を見た人は、心では强い信仰家なのであるが、外部的には熱

狂的な自由思想家なのである。その夢を見た時以前に、彼は「イエスの馬鹿」と稱する一書を讀んだのであつた。突然彼はその讀書を放棄せねばならなかつた。彼はその理由を述べることは出來ない。それは強迫的に來た行動であつた。即刻、讀書を止めよといふ命令が下つたかの樣であつた。この強迫的な行動の、より深い理由が、この夢の中に現れて居る。彼は神にそむいて何物かを取つたのである。

この夢に於る右以外の意義や、不安と願望との間の關係については、私はこの際取上げない。私はたゞ、夢の象徴の根本を大体示さうと試みたのみである。象徴を理解することは、夢判斷の基礎である。吾々はフロイド以前にさへ、人生に於いて象徴がどんな役目を果すかについて、多少知るところがあつたのである。例へばシューベルトとクラインパウルとは、全體としての人生を象徴的に考へることを暗示してゐる。之等の研究者等は亦、臆するところなく性的象徴に人々の注意を招いた。ドイツ語がその名詞を性によつて區別するのは驚くべきではないか。

吾々が夢の分析をやつて見ると、吾々の內に象徴的思考、特に性的象徴的思考が、根深く入つてゐるのを氣付くのである。夢の中では總て長いものはペニスを現し、總て圓いものは膣を代表する。併しそれは、夢に於る場合のみで、あらうか。クラインパウルがそのことについて、既述の「言語の生命」と稱する著作、特に「民衆の性心理」といふ章に於て、如何に說明してゐるかを聞いて御覽なさい。彼は言語は全体として性化され、象徴化されてゐることを指示してゐる。言語は性的象徴に滿ちてゐる。

クラインパウルは云ふ「實に人類は愛慾の痴者である。どちらを向いて見ても吾々は人類の性的空想を見せられて、始めにはむか〳〵し、馬鹿々々しくなるが、遂に閉口する。人類は理性を失つてゐるかの如く見える！男性的と女性的とは四六時中彼等の頭から離れず、棒を見ても穴を見てもその事に考へ及ぼさずには居られぬと云ふ誠に困つた

ものである。で「囚はれた人が何處かの塔の中で、死んで行つたとすると、すなはちその塔は『還元宿』と呼ばれるのだ。」と。

『瞳は何等少女に似てゐるといふ理由がないのに「眼の少女」と呼ばれる。が、虹そのものは少女である。何となれば虹は眞中に穴を持つてゐるからだ。それに對しては別に解剖學は必要ではない。眼の眞中の黑點は穴の樣に見えるのである。穴は凡ての言語に於て、女に對する名稱であり、創世紀（一、二七）に於ても亦さう呼ばれてゐる。そして眼は小さいから、それは小さい少女と見做された。」

「足が靴に入り又はナイフが鞘に入る樣に、何でも穴に入る樣な場合、物が一組となつて一方が片方に入り込む場合には、特に考察とか思想がこの樣なエロティッシュな傾きを取る。凡てこの樣な一組のものは性的存在、性的結合を聯想させるに好都合である。ガンヂス地方に於いてはリンガムと呼ばれるものもこれである。」

「多數の技術上の用語は古いアダムとイブの題目の反射としてのみ說明され得る。種々の職業に於ける母、尼、鑄型などに關係した名稱のあるのは同じ起源を持つてゐる。」

「雌ネヂに對して一方雄ネヂがあり、こゝでは單に主要な部分を代表してゐるのみである。僧とか尼とかいふ言葉の中には深い意味がある。屢々男性の半分が特に合理的名前を持つ場合もある。スタンプとか紡錘の如く。そして典型的に女性的の部分は詩的におほはれてゐるのである。ネヂは夫婦關係を含む樣に見える。（紡錘と母）」と。

實際、多くの夢を正しく解釋するためには言語の眞精神を把握することが必要である。或る有名な藝術家で婦人にもてはやされる非常に人氣のあるドン・ジュアンを父とする、十六歳の少年が、次の如き夢を私に語つてゐる。

（十一）『父は部屋の中で色々な穴を見付ける。彼は一人でそれをふさがうとするので私は困る。』

何故君はそれを困るのかを訊くと、彼はから答へた。「何故なら、お父さんはそんな仕事を全部一人でしました。私は助力することが出來たのです。それはあの様な偉大な藝術家にとつては適當した仕事ではありません」と。彼は自分の夢を「合理化」してゐる――ジョーンズの適切な表現を用ふれば。併し吾々はむしろその夢を文字通りにとる。その若者は、父フィリップが征服すべき國土を殘さないであらうことを嘆じた若きアレキサンダー大王の如きものである。家中の婦人が凡て父を崇拜する。即ち母も伯母もフランス語の先生も、秘書も。彼は父の關係を非常に性的に考へる。多分はよき理性を以て。壁の穴はクラインパウルの解した意味に取らるべきである。

私はこゝにフロイドのもう一人の先驅者、有名な夢の研究者シェルネルを紹介しよう。彼は多くの近世の研究者と同樣、凡ての夢は肉体的刺戟によつて起るといふ假定を立てた。この說は全く維持し難いことを證明された。さうして個々の夢を說明し得るに過ぎなかつた。けれどもその說の建設者にも象徵は無視するわけに行かなくなつた。性的象徵についてシェルネルはから書いてゐる。

「性的興奮は、興奮せる機關そのものに依つて象徵化されるか、或ひは性的滿足へと憧憬してゐる影像や空想の行動によつて象徵化される。併しこゝにも亦、吾々は想像といふ繪畫的能力に依つて被はれて保たれてゐる創造物に會する。例へば人が或る場所に偶々行くとその街上でクラリネットの上部、その側にタバコのパイプの同じ部分、更にまたその側に毛皮の一片を見出す。（クラリネットの上部やパイプは誤りなく男性機關の形を代表し、それ等の物の筒狀形は、男性機關に相應してゐる。併しそれ等のものは常に二つの意味を持つてゐる、それは一對のものとして興味をひくのである。最後に問題の毛皮は恥毛の印しとなる。ブラシが眉毛やまつ毛の印しとなると丁度同じ樣に、象徵的にはブラシが一層適切なるに拘らず。三つの影像を一緒にして見ると、それ等を通して代表される物の連接を意味

する。）人々は膀胱の刺戟と、縮んだ短い煙管とを結びつけるが、それは全男性外部器關の象徵である。排尿の刺戟に次いで性的緊張の生ずることを示すことの象徵は一層明かに現れるが、それは强い刺戟に對して强い亢奮の生ずることゝ一致してゐる。」（夢ノ生活、一九七頁）

次の夢は、未婚の卅歳の婦人の夢である。

（十二）『お父さんは、部屋の塑像の前なる葉片をきりきざんで歩き廻る。私はそれを怒つて妨げようとする、私は父が氣が狂つて了つたのかと思ふ。』

その娘は父が常に恐ろしく嫉妬深かつたことを、吾々に告げて居る。父は娘が他家の男と握手することをさへも許さなかつた、若い男は決してその家を訪ねなかつた。彼女はダンスをすることも出來なかつた。それがために彼女は未婚のまゝで今日に至つた。

この夢も亦吾々は文字通りの意味に取る。父は片端から取拂うて彼女が男と近づく機會を妨げるのである。夢の中で彼女は、實際生活では父に殘念ながら敢て云はなかつたことを語る勇氣を持つてゐる。彼女は從順な型の娘であつた。彼女の心にはいつもの無花果の葉で前を隱した像が浮ぶ。夢の思想がとるところの逆路を我々は注意する。何故その隱蔽をなすのか。無花果の葉は若しもその端が切り取られたら、何の役に立つであらうか？　彼女は父の行動が如何に無意味であつたかを氣付く。彼女は父の行動の病的な（狂的な）のを認める。

吾々はかくて、二つの異つた夢に於いて「穴」と「端」とが如何に考へられてゐるかを見た。夢の言葉は、吾々日常生活の言葉を創造したのと同じ隱れた力を利用して出る。

かゝる象徵は夢のみに見られるのではない。それは等しく物語、神話、民間傳承並びに頓智の中にも見られる。

象徴の殆ど無盡藏の材料は有名な民間傳承學者クラウス Dr. F. S. Krauss とその協力者によつて集められ Anthropophyteia といふ名稱の下に公刊された蒐集の中に見出される。その中に集められた素晴らしい材料は夢の象徴となつて組織的に出て來る筈である。私は民衆の言語と夢の象徴との間の類似を時々指摘するであらう。

私は右に於いて性的象徴の意味を現す二三の單純な例のみを擧げて來たのである。我々は性の背景に觸れることなくして夢の分析をなすことは不可能である。實際、性的でない夢は稀少である。

性的本能の力は非常に大きいものであるから、寸刻と雖も多分吾々はそれから離れることは出來ないであらう。吾々が假睡、眠りの影像（眠りに陥る前、或は全然眼醒める丁度前の夢に現れる影像）を考へて見ると、性的なものが一時吾々の心を捕へる用意をしてゐることを知るであらう。夢の象徴は主に性的である。夢の生活に於いて、恐るべき役を演ずるもう一つの決定素がある、即ち犯罪的傾向である。

本能と社會、自己と他人との間の古い永遠の爭（オットー・グロース）は夢の中でも止まない。フロイドによつて假定された願望充足は亦道德的自我の願望充足でもあり得る。

「併し吾々はたとへ「良心の夢」を道德其ものゝ願望と認めるにしても、願望充足の範圍にあてはまらない多くの夢がある。就中精神感應の夢が存在する。客觀的の研究家はもはや、さう云ふ夢の存在を疑ふ事は出來ないのである。

ベルグソンの夢の研究

長谷川誠也

ベルグソンの哲學が、わが國に紹介されたのは、既に十數年前のことであり、その頃、夢の研究もまた傳へられ、その後、『夢』の翻譯も出たくらゐだから、今さら彼の夢の説を顧みる必要もないやうなものだが、一つには、夢の研究をなす場合には、彼の説を記載しないわけにもゆかず、二つには、彼の所説が、依然として心理學研究の刺激となるから、こゝにその要領だけを記述して置かう。

フロイドの『夢の解釋』の出版が、一九〇〇年であり、ベルグソンが『夢』といふ題で、フランスの心理學會において講演したのが、一九〇一年三月である。だから、フロイドは、後者の説を知つてゐた筈はなく、その大著の夢研究の文献目錄中にも、ベルグソンの著が掲げてない。ベルグソンの方は、フロイドの著を知つてゐたから、講演中に、フロイド説に賛成する所があると言つてゐる。しかし、彼は精神分析の影響を受けて、この説を發表したのではない。一八九六年に出版された彼の『物質と記憶』を見れば、後の夢の説を、明らかに豫期することができる。その著のうちに言つてある。「過去を形象の姿で喚び起さすためには、現在の活動から引退し得なければならず、無用のものを評價する能力を持たなければならず、夢見る意志をもたなければならぬ」と。（註 イギリス譯『物質と記憶』九四ページ。）

僅かなこの引用文に據つて見ても、彼の夢の研究が、フロイドとは何んの關係もなく進められた事が明らかである。全くその通りで、これを進めると、何處まで手が延びてゆくか、豫想もつかないくらゐである。いや、どうかすると、夢と覺醒時との世界の境界線が、何處にあるのか、全く分からなくなつてしまふやうなこともあらう。ベルグソンの夢の研究も、その言の通りに、一面は生理學的であり、一面は心理學的であり、一面は形而上學的であつて、讀者としてのわれ〳〵は、幾多の問題を與へられると共に、夢と現實との間を往復するやうな感を起こすのである。

ベルグソンは、先づ夢の心理は、外界と沒交渉のものではない、その世界は決して獨自な奇異のものではないことを證明するために、視、聽、觸等の感官の受ける刺激が、夢を構造することを述べてゐる。なほ、消化不良、呼吸困難、血液循環の不調等が、何等かの象徴を借りて夢に顯出することを說き、或醫家は、夢の分析を診斷上に利用することをも紹介してゐる。かやうな生理學的方面の研究の要旨は、フロイドの著中にも紹介してあるから、特志家は、それを見られるが宜しい。さうして、ベルグソンの研究は、この方面において、特に記述しなければならぬほどのものもなく、且、これは別の機會に紹介する方が宜しいと思ふから、こゝにはこれを省略する。われ〳〵にとつて、特に興味あるのは、その心理學的解說である。

最初に、夢の內容の性質を考へて見よう。言ひ換へれば、夢の內容には、斬新と稱すべきものがあるだらうか。一見したところでは、夢には新奇なものが多いやうに考へられるが、仔細に考へて見ると、夢は何物をも創造しない。夢の構成分子は、過去の復活に外ならないものである。世には、藝術上または學術上の創造が、夢想中において行はれた、と言ふ話が傳はつてゐる。その有名なのは、タルティニ（一六九二―一七七〇）の『惡魔のソナタ』である。この曲は、

作者の睡眠中、惡魔が現れ、ヴァイオリンを取つて奏したもので、作者は覺めて、これを記錄したのであると言ひ傳へられてゐる。しかし、これだけの話をもつて、夢想中の創造を主張することはできない。夢見る者は、覺醒時に、その夢を補修することがあるから、夢想中の作と稱されるものも、實は覺醒時の心理作用の所產であることが多い。また、小說家スティヴンスンは、その作品、殊に獨創的なもの丶多くは、夢のうちに作られた――少くともその梗概だけは作られた、と言つてゐる。しかし、彼のこの記述を詳細に讀んで見ると、彼のいふ心理狀態は、睡眠中のものか、あるひは覺醒時のものか、甚しく曖昧であると言はなければならぬ。なほ、學術上の創見が、夢の中に成された、と言ふやうな話も、どこまで信じてよいか分からない。いや、それを確かに證明するだけの材料が缺けてゐる。おもふに、夢の中に行はれる創造的心理作用といふものは、實は夢の心理でなく、どちらかと言へば、覺醒時の心理と見るべきものであらう。言ひ換へれば、創造する人は、眠つてゐるやうでも、實は眠つてゐないのであらう。

（餘談）イヌルといふ漢字には　寢、寐、眠、睡などの別がある。寢はネドコをこしらへてねる意味、寐はネイルこと、眠は目を合はせてトロ〳〵とねつくこと、睡は牛ネムリの義である。夢の研究の場合、これらの字を使ひわければ、至極便利のやうにも考へられるが、それでは却つて思想の混亂を生ずる恐れがないでもないから、今は『眠』または『睡』だけを用ゐ、兩字の間には區別のないことにして置く。

夢の內容は、いかにも奇異嶄新のやうであるが、一つとして過去の記憶でないものはない。われ〳〵の記憶は、實に豐富なもので、そのうちには、容易に回想し得るもの丶外に、なほ回想し得ない過去の經驗無數がある。われ〳〵の經驗は、能動的であると、全く受動的、無關心的であるとを問はず、悉く記憶として保存され、また、どんな記憶でも、必ず回想され得るはずである。然し、われ〳〵の日常生活においては、目前の事態と、それを基とする行動とによつて、心理作用が制限されるから、どんな記憶でも、必ず回想されるといふわけにはゆかぬ。さうして、回想される記憶といふものは、記憶の倉庫全躰から見れば、極めて少量である。この倉庫を物に譬へれば、ピラミドであらう。

その頂點に近い處の小部分が、覺醒時における記憶回想、即ち事態と行動とのために回想される記憶であつて、その部の以下、底に至るまで、非常に大量な記憶、しかも、その大部分には、この持主すら意識してゐないものが潜在してゐるのだ。ベルグソンは、ピラミドを例として用ゐたが、私は、扇を用ゐる方が、一そう能く記憶倉庫の有様を傳へ得ると思ふ。いや、こればかりではなく、心全躰を譬喩で説明する場合には、ピラミドや、氷山などよりも、扇の方が更に適切であらう。扇のかなめを境として、廣い部分が、無意識または潜伏する記憶であり、極めて小さな部分が、意識または回想される記憶であるとすれば、心の狀態を一そう能く知り得るだらう。

過去の經驗の復活といふことについては、ベルグソンが區別した二種の記憶を、念頭に置かなければならぬ。彼の記憶説は、なか／＼複雜で、數ページ内に紹介し盡くされるものではないが、今の場合は、次ぎのことだけを心得ておけば十分であらう。記憶には、全く獨自な、時日の刻印あるものと、抽象化され、組織化されて、特殊な時日との關係を喪失したもの、言はゞ實用的とも稱すべきもの、この二つの種類がある。この區別は、記憶の鮮明、曖昧などゝいふ程度上の差ではなく、全く質の上の違ひである。例へば、有名な詩、

綠樹の重陰四隣を蓋ふ、
青苔日に厚うして自から塵無し、
科頭に箕踞す長松の下、
白眼にして看他世上の人。

これを暗記するために、二三日の間、數回、繰返へして讀むとする。この場合、文字や、音韻の聯絡が、稽古の時の場處または時刻から離れて獨立に記憶され、この記憶は、必要に應じて幾度でも繰返されるのである。一般には、かやうに數回の稽古によつて作り上げられた記憶しか無いものと思はれるのだが、實はその外に、極めて特殊な記憶があるのだ。それは、この詩を讀むたびごとの場處と時刻と結び附いてゐるもので、それはわれ／＼自分の生命の特殊

な瞬間と結合してゐる。「綠樹の重陰四隣を蓋ふ」といふ文字や、音韻の關係だけの記憶は、何時でも意識上に繰返すことはできても、この一句を讀み習ふた場合の具躰的記憶は、生涯を通じて、たゞ一つだけで、われ〳〵は、これを想像し得ても、繰返へすことはできない。この獨自な記憶と組織化されたもの、即ち實用的記憶（この語は私が假りに用ゐるもので、ベルグソンの語でない）とは、互に入り混つてゐるけれども、記憶を研究する場合には、截然區別して見なければならぬ。

われ〳〵の日常生活における行動に役立つものは、實用的記憶である。われ〳〵は目前の事態に應じて、有効な記憶を回想する。例へば、會合の席上、興を添へる場合に、「綠樹の重陰……看他世上の人」と詩吟をする時には、この詩を暗記する時の個々の場合の記憶が回想されるのではなく、數回に亘つて讀んだ後に作られた組織的、實用的記憶が役立つのである。さうして個々の具躰的な、獨自な記憶は、識閾以下に在るのだ。ところで、この識閾以下に在る記憶の量といふものは、前記のやうに、非常に多大であつて、現在の生命に關する興味が弛緩するか、あるひは消滅する場合には、それらの下積みの記憶が「撥ね上げ戸」（イギリス譯には trap-door とある）を押開いて、意識上に出て來る。白日夢を見る時に、意外な記憶の回想されるのは、其の例である。さうして、睡眠によつて、現在の事態とそれに發應する行動とから解放された心理は、「撥ね上げ戸」を押開いて跳ねだす種々の記憶を材料として、夢を構成するのである。この「撥ね上げ戸」といふ譬喩は、フロイドのいふ「檢閲職」と頗る好く似てゐるもので、たしかシルレルにも同樣な考方があるやうに記憶してゐる。（扇の例では、かなめの處が、これにあたる。）ベルグソンは、これについて、特別に説明してもゐないが、その意味が、功利的もしくは倫理的、あるひはプラグマティクのものであることは、推測するに難くない。

無數、全く無盡藏と言つても差支ない位の記憶は、睡眠中において、「撥ね上げ戸」から跳ね出さうとするが、すべてが意識的となる譯にはゆかぬ。その進出には、首尾よくこの戸をパスするものと、及第し得ないものとの別があるのだ。それならば、どういふ記憶がパスして夢となるのか。睡眠中における感覺と相應する記憶が、互に結合して夢となるのである。睡眠中でも、外部からの刺激、または躰內の諸器管の具合から、種々の感覺が起きる。その感覺と適合する樣な記憶が容易に結び付くのだ。例へば、燈火の刺激のある時には、火事の夢を見るやうな事だ。『大智度論』に「熱氣多ければ火を見、冷氣多ければ水を見る云々」と夢を說明してゐるのは、まさにベルグソン說そのまゝである。

ところで、何故に感覺と記憶とが、かやうに結合するか。ベルグソンは、古への哲學者プロティナス（紀元後二〇四—二七〇）の說を借りて說明する。古哲の說によれば、靈魂は思想の世界、時空を超越した處に在るもの、活動不能のものである。これに反して肉躰は、形あつても未熟不完全のものである。そこで、相似寄つた靈魂と肉躰とが合致して、こゝに初めて生命が起こるのだと。この遊離してゐる靈魂が記憶であり、不完全な肉躰が感覺に類するものである。感覺は生々してゐるもの、色彩あるもの、顫動するものだが、混沌空漠としてゐる。記憶の方は、明晰であるが、實質を缺き、生命の無いものである。感覺には、その固形化が必要であり、記憶には、生動的實質が入用である。だから、相似寄つた記憶と感覺とが結合して、兩者共にその希望を滿たすのである。つまり、幽靈のやうな記憶が、感覺中に、それ自身を具躰化する時に、夢想があるのだ。

覺醒時と夢中との知覺機能には、何等の差別もない。共に、器管の受ける刺激に基づく心理と記憶との結合に外ならない。世には、夢は外界と絕緣してゐるものと言ふ見方もあるが、それは全く誤謬で、夢想と外界とは、覺醒時におけると同樣、密接な關係を保つてゐるものだ。また、夢には推理がない、と言ふ說もあるが、これも間違ひである。夢想中においても、論理作用は決して消滅しない。むしろ、推理し過ぎるくらゐに、論理を用ゐるのが夢だ。不想應

な形象を、無理に結合させるほどに、理論を進めるのが夢の心理である。こゝで憶ひ出すのは、チェスタトンの語だ。狂人には、推理の力だけが残つてゐると。夢もその通りで、一見すれば、それは甚しく非論理的のやうであるが、實は論理の法則を嚴重に守つてゐるものだ。

それならば、覺醒時の心理作用と夢想とは、どんな點において異なるのか。覺醒時の生活は努力であり、意志遂行であり、統制であり、集中である。即ち實生活における眼前の事態に應じて行動する、といふ意志によつて、あらゆる心理現象が統制される緊張の態度、これが覺醒時の心理作用である。ところで、睡眠中の心理作用は、生に對する注意の弛緩狀態である。實生活から遠く離れ、萬事を無記と見、何等の努力も、統制をも行はないのが、これである。だから、夢といふものは、集中といふ努力を控除した全心理生活であると言ひ得る。覺醒時においては、わが境遇と自我とを適應させる努力があるから、心理過程、殊に記憶の間に選擇が行はれる。さうして、夢においては、その態度が弛緩するから、心理機能は、覺醒時と同一であつても、心理過程の有樣は、甚しく異なつたものと成る。こゝには、客觀的條件が無いのだから、主觀本位の心理過程が、自由自在に意識的となり、非常に奇異な光景が浮び出すのである。

夢想には、何等の統制もないから、あらゆる記憶が、機會あるごとに跳ね出して來る。だから、夢想の事物は不安定であり、急轉し、意外な聯想となり、詰らないもの、奇異なものなどが、パノラマ式に展開する。しかし、それらは一として記憶でないものはない。全然新らしいものが、夢のうちに現れるやうに思はれるのは、曾て覺醒時において、それに注意してゐなかつたから、さう思はれるだけのことで、無意識から言へば、たしかに記憶であるのだ。日の下には新らしい物があるか、どうか分らないが、夢の中には、確かに新らしい物は無いのである。

熟睡中の夢を研究するならば、さらに深い處に押しこめられてゐる記憶が出て來るであらうが、熟睡中の夢を記憶

することが困難であるから、この仕事は容易でない。かやうな夢の研究は、無意識の構造と機能とを知る上に、大いに役立つものであり、且、所謂心靈現象の研究に効果あるものであらう。ベルグソンは言つてゐる。心理學は幼稚な狀態にある、若し近世史初期の大學者等が、理化學の代りに、心理を研究の對象したならば、今日、心理の研究は、大いに進歩してゐたらうが、何分、新らしい學問であるだけに、理化學と比較すれば、進歩がおくれてゐる、しかし、それだけに前途多望である、特殊な方法をもつて、無意識を探檢し、心の下壤に努力することは、今世紀における心理學の重要事であらねばならぬと。

以上は、ベルグソンの夢の研究の大要であつて、これとフロイドの夢の解釋とを比較するならば、ベルグソンは、夢研究の大方針を示しただけで、夢の分析までには進んでゐない。フロイドの研究の出發點は、ベルグソンのものと似てゐる、さうして彼は「心の下壤」に大努力を用ゐて「心理學の重要事」に貢献することが多大であるのだ。たゞし、夢研究にあたつては、ベルグソンが「物質と記憶」のイギリス譯の序文中に述べたことを、常に念頭に置く必要があらう。心理學と形而上學とは、おの〳〵特殊な問題を研究してゐるやうに思はれるが、二つの學問の眞の性質を理解して、兩者を接近させるならば、おの〳〵の特殊な問題といふものを、一層好く解釋することができるだらう。われ〳〵が常に心得て置くべき二つの原則がある。第一は、心理學的分析にあたつて、われ〳〵の心理機能の功利的性質（これは主として行動に轉向するものだ）を失念してはならぬ。第二に、行動によつて作られる習慣は、思索に移つて、虛構的問題を造るものだ。さうして、この人爲の陰暗を消散させる所に、形而上學が始まらなければならぬと。心理學が、空漠たる形而上學から離れることは、望ましいけれども、離緣した後に、虛構の問題を揑造するならば、その進歩は遲々たるものとならう。（完）

夢の願望充足性と夢魘

矢部八重吉

一、閻魔廳の扉は睡眠中に開かれる

嘗て顯意識又はその後列（前意識）に控へて居つた經驗（即ち記憶）が、意識界を逸してしまふと云ふ事は、どうして起るのであらうか。併し逸してしまつたもの丶全部が決して心の裡から消えたのでない。それ等のあるものは無意識裡に沈下したのみである。不快な經驗、苦痛な記憶は現に意識層を占有して居る心の働きと衝突爭鬪の結果、無意識裡に壓迫驅逐せられる事がある。此れ忘れられてしまう所以である。が、斯く扱はれた心の働はその儘無意識裡に蟄伏し、累を他日に及ぼす事となるのである。

斯くして我々は善し惡しに拘はらず、殆ど汎ゆる我々の經驗、記憶を無意識裡に貯藏し、これが我々の日常活動の動因をなすのである。尚、我々は我々個人の生涯のもののみならず、我々累代の先祖の經驗、即ち本能的、種屬的記憶、及びその功罪を傳承し、それに自らのものを加へて、更に子孫に繼承せしむるのである。我々の蒔いた善根、惡業は漏れなく容赦なく、無意識裡の閻魔帳に記錄せられる。そして我々は何時かそれ相當な應報を受けねばならぬ。

人は棺を蓋うて論始めて定まると云はれ、地獄極樂は冥土で約束されて居るが、我々は棺を蓋ふに至らずとも、また冥土に旅立たずとも、裁斷の廷に立たねばならぬ。我々の罪過を決すべき閻魔廳の扉は睡眠中に開かれ、そしてその裁斷の道程がとりもなほさず夢である。

二、酷薄なる閻魔廷の裁斷

夢は睡眠時に、無意識裡の働きが、意識層に出たものである。現に意識層を占有してゐる働は外界（現實）の刺戟に應じて示されるものである。此の應答の杜絶が睡眠である。そして意識層の働は、一たびそれから壓迫し驅逐したものを飽くまでも無意識裡に閉鎖して置かうとするのであるから、其の働が鈍るのでなければ、無意識の働は意識層に「浮ぶ」事が出來ない。併し、睡眠中でも意識層の働は全く停止することはないから、無意識の働は意識の警戒監視を免れむ爲め假裝して現れる。この假裝の象徵は夢を無難のものゝ如くに見せかけ、以て我々の睡眠を保護する。併し、睡眠を保護する筈である假裝（象徵）は往々その作用にくるひを生じ、目的を果し損ふ事がある。此れは、身神の異狀、例へば疾病、過度の疲勞、その他一般の衰弱から生ずる精神の變調のために生ずるのである。假裝（象徵）の作用が狂ふと、夢は無難でなくなる。不快、苦痛の容狀を帶びた（無意識裡に驅逐せられた）經驗、記憶がその儘の姿で現れる。此れ夢魘である。閻魔廷の裁斷は酷薄である、弱者虐めである。疾患者、抵抗力に乏しいものを選んで奈落に陷すのである。此れに反し、身神の健全者、强者は薦められて極樂淨土に送られるのである。假裝（象徵）の濃き夢は阿彌陀如來の蓮座を賜はり、無限佛の慈悲に浴するのである。慈悲は歡樂、隨喜である。願ひの協ふことである。願望の充足である。健全（即ち精神的常態）を保つ樣な夢は、その手段でなければならぬのである。

三、慾求は意識せられ、願望は多くは意識されぬ

願望とは何か。此れ無意識裡にある（行動）への傾向で、その充足が防げられてゐるものである。我々が現實に處してゐる間に或程度の努力を惜まなければ、此れが成就可能であると云ふ信念を有するに至る時は、願望は慾求と呼ばれ、さなき時は單に希望として無意識裡に殘り、折々意識層に「浮ぶ」のみである。願望は「かくあれかし」と願ふ心であるが、同時に「斯くあるべからず」と云ふ信念に伴はれる心の働である。「斯くあるべからず」と云ふ信念は、外的若くは德的の禁制に因してゐる。前者は、「不可能である」と云ふ考、例へば物理的原則を破つて自由に大空を飛翔するとか、又は生理的原理に悖つて死者を甦らせ、木石に生命を賦與するとか云つた様な超自然的觀念、後者は「勿れ」と云ふ命令、戒律に基く考である。

慾求は實現可能の信念に伴はれて居る。そして信念は意識層に現れた働であるから、欲求が實現される過程は多くの場合意識せられてゐる。が、願望はこの信念に伴はれない。のみならず、意識層の發達である外的及び德的の禁制を受けつつあるのであるから、此の働の存する間は、意識される事がなく、無意識裡の働として留るのである。然らば如何なる時に、願望は意識層に「浮び」出るのであらうか。此の意識層の潮流の低められた時の空想、半醒半眠の折の幻、睡眠中の夢としてゞある。

四、願望は夢中に滿される

意識層で働く禁制作用の中、物的のものは自然の環境、德的のものは社會の環境に基いて居る。自然及社會の環境よりの刺戟は間斷なく覺醒中の我々の願望を抑壓して、意識層に現れる事、即ち心に思ふ事、念頭に留める事をさへ

も禁止して居る。で、我々は覺醒中、意識が旺盛に働いて居る間に、空中樓閣を書く事などは「馬鹿々々しい考」として退けてしまひ、不倫な考が起る時には「思ふだに穢はしい」として排してしまう。が、斯く退けられ、斯く排せられるに至つた願望は決して消滅してはゐない。その儘無意識裡に逃避して、意識層の働が鈍つた時、即ち環境の刺戟に對する受容性が弱められた時に、空想となり、幻となり、夢となつて、意識層に「浮ぶ」のである。

我々文化人の有する願望の多くは、恐らく非物的であると云はれるのであらう。物的願望は非物的願望の滿足を以て代ふる譯にゆかない。例へば、空腹は夢で滿たされない。性行爲は夢で常態に遂げられない。が、物的のものは環境（即ち現實）に適應する事に依り滿される。現實に適應する事はそれぐ＼相當の方法を盡す事、努力する事である。換言すれば、物的願望は滿足が可能であると云ふ信念に伴はれるのであるから、之は慾求である。慾求に屬さない希望、此れ願望である。して見ると、願望は悉く非物的であるとも云へるであらう。非物的願望は肉體的行動を要さない。唯精神的慰藉を以て滿たし得る。精神的慰藉は願望を意識層の働として現すのみにて足る。即ち、願望は夢に於て滿される。

五、夢は離魂病である

非物的願望を滿たすに恰好な夢はその方法手順に於て眞に巧妙を極めてゐる。此は心的作用の分裂と呼ばれる現象に於て窺はれる。分裂が起ると所謂、二格人格、即ち神かゝり、狐憑きなど、即ち昔から離魂病と稱せられてゐるものを生ずるのである。離魂病の症狀として顯著なものは、過去の經驗、記憶が一切消失して、全く新しき「自我意識」が生れたかの樣な感を症患者に與へることである。此れ記憶の連續が中斷されるからである。「自我意識」は瞬時々々の意識層の經驗、刹那々々の心の記憶、即ち思ふ事、感ずる事、信ずる事、決する事等が積分せられて出來た總和

に基くものと見られるであらう。積分とは無限に小さき量、即ち數學的微分量の積分算法に依り求められる無限の和である。積分算法により求められた和は一つの線により表象せられ、そしてこの線は一つあれば他にある事の出來ぬ獨特な分割不能性を有するのである。此れを切斷する時は各斷片はそれ〴〵同樣な分割不能性を示すに至るのである。意識層に起る心的作用の分裂は、「自我」の感の切斷に於て恰も之と同樣の結果を齎すのである。

六、夢は心裡の繪畫、『自我』の斷片

前揭の說明は余り抽象的であり、難解かも知れぬ。玆に更に通俗な解釋を試みよう。此れは比喩に據るのが最適であらう。

常態にある「自我」、即ち覺醒中の心を自然その儘の風景に喩ふると、切斷された「自我」は廣大なる自然の原野の一小部分を圍んで造つた庭園、又は之を畫紙に寫した繪畫に當るであらう。一たび庭園となり、繪畫となつた風景は、その母躰であつた自然と絕緣して各獨特な分割不可能性を獲得するに至り、單獨な單位としての存在が續けられる。換言すれば、庭園が造られ、繪畫が畫かれた後起つた自然の風景の變化からして毫もその影響を受くる事がない。心の働が分裂して、その主体にあらざる部分の斷片が一時意識層を占有するに至ると、恰度「自我」の感に於て、庭園が造られ、繪畫が畫かれた如き觀がするのである。

前記の比喩を更に明瞭に會得しようとするならば、自然から取つた庭園又は繪畫と、分裂によつて生じた「自我」の斷片との間の相異を認めねばならない。此の相異の著しき點は、前者は空間に於て際限せられ、後者は時間に於て限定せられると云ふ事にあらう。庭園又は繪畫は大自然の一局部を撰擇し、殘余の部分を悉く限界より排除したものである。そして「自我」の斷片は總ての意識の流れを斷つた事、即ち過去の記憶を一切放棄したものである。汎ゆる

善行惡業、享樂苦悶、喜悦懊惱、得意失意、歡樂哀愁を意識層から一掃し去り、純白に淨化せられた心の書紙に書き出される過去の經驗、記憶の一光景、此れ分裂した「自我」の斷片である。總ての罪業は消滅して靈魂は新たに生れ更つたかの様な容狀を示すのである。

七、夢の繪師の細工

尙、「自我」の分裂から生ずる斷片、即ち夢の園丁、繪師はその技術に於て驚くべきものを持つてゐる。夢の庭園、繪畫は實寫でない。創作である。實物から遠ざかつた理想の表現である。と云ふのは、夢そのものの目的が出來得るだけ遥か環境、即ち現實世界から逸脫しようとするにあるからである。勿論、その資材は、自然の園丁、繪師のものと同様に、實際の世界、現實の經驗から取つてはをるが、その加工の程度及び巧妙さに於て自然の庭園、繪畫の到底及ぶ處でない。夢の細工の主なる物の中より二三の例を擧ぐれば(一)凝縮、(二)置換、(三)轉移等であらう。象徴は之等の方法に基いて生ずる。勿論、總ての夢の發生にはこれ等三つの方法が必ず參加するものと定まつては居らない。假裝象徴の濃度は之等の働振りの完全、不完全により決するのである。

八、自分の葬式を夢見るのは何故か

凝縮とは色々な人物又は物躰が集つて一個人又は一自体をつくる機制を云ふ。その適例は一家族又は一集團の表象的肖像寫眞を得ん爲め、一枚の感光板を數回暴露して數人重なり合うた撮影を爲す時であらう。夢に現れる人物で、自分の父ともつかず、教師ともつかず、また主人ともつかない様なものは、此の三者の凝縮と見られる。犬と見えて

猫に似た動物、他人の家へ入つたかと思ふとそれが自分の家であつたり、鐵瓶の蓋が土瓶の蓋となつてゐたりするは、二物の凝縮と解せられる。尙、凝縮の仲間として夢見る人自らが參加する事も妨げられない。自分であるかの樣に思はれる人物に出會したり、自分の葬式に列したりする事も出來る。凝縮の密度は絕えず變つて來る。また全然これがなくなつて分離してしまう事がある。自分の妻と思つて居たものが、何時の間にか他人の妻となり、婦人が男子と早變りし、人の殺されるのを見てゐたかと思へば、自分が殺された人である事を發見する樣な場合がある。

凝縮の動因は何であるか。此れ潜在してゐる感情である。舊來の心理學者は聯合作用、即ち聯想を說明するに、連續に因るもの、類似によるもの、及び不同(若くは反對)に因るものと區別して、之を說明しようと試みたが、これでは說明になつてをらない。何故ならば、これは單に事實を記述したに止まり、その動因を明かにして居らぬからである。夢の奇妙なる結合、不可思議、神秘的容狀、荒唐無稽さはこのやうな說明では永久に駄目である。

九、夢の場面の急轉は凝縮力の消盡から

凝縮は二つ以上の心的作用(即ち觀念)の結合である。勿論これ等は意識層にある働と無意識裡にあるものとの區別は問はない。同一若くは類似の感情で彩られてをる心の働は、常に互に結び付かうとする。換言すれば、聯想は同樣の感情が背景を作つた時に起るのである。そして結付の强い弱いは之を齎した感情の激度に因つて定まるのである。感情が强ければ凝縮は堅固であり、弱ければ此れが跪い。

感情は動的勢力である。意識層の働としてこれが現れる時は、その力は漸次消費せられるのである。斯くして夢が繼續せらるるに從ひ凝縮は段々その固着力を失ひ、その構成分子が遊離するのである。夢の場面の急轉、早變りの生ずるのはそのためである。尙、此れより生ずる當然の結果として、その假裝象徵も緩和されることゝなる。

十、置換は惡夢の安泰化を目的とす

無意識裡の資材を扱ふて細工する夢の園丁、繪師は、その企てた目的に適はせん爲め色々な遣繰をする。例へば、中央の地位にあつた喬木を隅に移植し、山蔭にあつた沼池を前景に持つて來、窪地に丘を造り、日光のあたる箇所を線蔭と爲すのである。此れ置換の方法である。置換は夢の中心を轉位するのである。主客を轉倒し、重要なものを背後に退け、些細なものを前に持つて來る。此れ假裝の本分を好適に示してをる。勸進帳の義經は安宅の關で富樫の目を晦ましたのは、此の手段に依つたのであつた。

置換はどうして遂げられるか。それは無意識裡の願望が意識層に浮び出る時には、意識層に留まつてゐる經驗、記憶を常にその路伴とすることに依つてゞある。そして此の路伴の袖下に隱れて、意識の見張りを逃れようとする事によつてである。之を爲すには主客の地位を轉倒せねばならない。例へば、外出中不圖舊友に會ふ。挨拶を交して歸宅したその夕、其の友人の訪問を受ける夢を見る。友人は辭去に際し「お父樣に宜しく」と云ひ遺して行く。目覺めて見ると、父は數年前世を去り、此の事は友人も知つて居る筈である。此の夢の主要分子は舊友の來訪にある樣に見えて、實は父が主となつて居る。父の記憶は潜在してをつて、その亡き姿を慕ひ、此れに再び接したいと云ふ願望が滿たされたのである。夢に現れた舊友とは父の存命中親しんで居た關係から、彼に出會した新しき經驗、記憶が路伴となつて無意識裡の願望が誘ひ出されたのである。何故に直接父の姿に接する夢を見なかつたか、と云ふに、亡き父が姿を現はすのは惡夢の性質を帶びるからだと云はれるであらう。惡夢は假裝が薄い時に生ずるのである。

十一、些細な事が夢魘として現はれるのは？

轉移は一つの心的作用を構成してをる要素が他の心的作用に移行する事から生ずるのである。心的作用は認識、感情、及び其の達すべき目標との三要素で出來てをる。この中一つが他に移されるとそこに空缺が出來る。空缺は不具を來たす。一脚を失ふた鼎は立つて居れぬ。無意識裡に陥された心の働は認識の一脚を奪はれたものと看做される。此れが意識層に出ようとするのは、奪はれた一脚を取戻さうとするのだとも云はれるであらう。

心的作用を構成して居る要素は、その具體を離れる時は獨立の存續が出來ない。それ故に其の分離と同時に他の心的作用を求めて、之に附着し以つて寄生的存續を爲すのである。要素の中、殊に分離し易いものは感情である。夢中の經驗にて烈しき感情に伴はるべき筈である行爲又は場合、例へば殺人とか、最愛の子女に死別する時とか、その他殘虐を極めた蠻行が行はれる時とかに、之を頗る冷靜に、且平氣で見て居る事が出來るのは、感情が他に轉移し空虚となつてゐるからだと云はれるであらう。又、左程強い感情を惹起すべき場合でない處に激しい恐怖に伴はれる事がある。我々成熟者、殊に神經症者の經驗する惡夢は、覺醒中又は常態にある場合には何らの恐怖をも感じない些細な肉體の不自由、不快(例へば足が蒲團に絡んでその働が自由に取れぬとか、胸に手を當てゝをつた爲め僅かの重壓を覺えるとか)の場合に於いてゞあつて、その激しい恐ろしさのために全身に冷汗を浴びて目覺める事さへある。此れ感情の轉移を受け、それに寄生させ宿を貸すからである。(完)

J・A・シモンヅのひそかなる情熱（三）

江戸川亂歩

『ギリシヤ神話と古代ギリシヤ史とは、友愛の物語に滿ちてゐる。我々の聖書ではダビデとヨナタンの物語（『サムエル前書』に現はれたる男性愛の典型）のみが漸くそれに匹敵し得る。ギリシヤ男性愛について、直ちに我々の心に浮ぶ名前は、ヘラクラスとヒュラース、テセウスとペイリトオス、アポロンとヒュアキントス、オレステスとピュラーデス等の神話的傳說であるが、更らに古代ギリシヤ史上の氣高き愛國者達、暴君達、立法者達、命知らずの勇士達の間に、我々は到る所に、特種の名聲を輝かしてゐるかくの如き友愛關係の一對の名前を見出すことが出來る。アテナイの暴君ヒッパルコスを暗殺した勇士ハルモディオスとアリストゲイトンの一對、テバイの立法者ディオクレスとフィロラオスの一對、シチリアの僭主ファラリスに反抗したカリトンとメラニッポスの一對、アテナイの市が熱病に襲はれた時、神々の怒りをなだめる爲に身命を賭したクラティノスとアリストデーモスの一對、などの男性愛は、愛情によつて互に固く結びつき、友愛によつて高貴なる情熱の最高峰にまで高揚せられた、ギリシヤ史的傳說中の、愛すべき使徒達の一例に過ぎない。一口に云へば、ヘラスの騎士道の原動力は、中世のそれとは異り、婦人に對する愛情ではなくて、かくの如き男性愛にあつたのだ。孰れの騎士道に於ても、その原動力となるものは、勇壯な、魂を高

揚する犧牲的な情熱であつた。男性愛がギリシヤ人の間に齎らせた果實は、危險に面してのゆるぎなき勇氣であつた。名譽の爲には命を惜まぬ精神であつた。愛國の熱情であつた。自由の尊重であつた。そして、戰場に於ける鐵の如き鬪爭心であつた。プラトンが云つてゐる。「暴君達も男性愛の使徒には畏怖する」と。』

又『騎士道の古代型（即ち男性愛慕の）に於ても、中世型（婦人崇拜の）に於ても、戀愛と武道とがつきものである。古代ギリシヤの英雄も、中世の騎士も共に戀する人であり且つ武道の勇士であつた。プラトンが「パイドロス」に於て Mania（狂熱）と呼んだ所の、そして又中世プロヴンス地方のトルバドウル達の間に Joie（歡喜）といふ名で通つてゐた所の、あの特種なる情熱は、ギリシヤの勇士には愛する男性によつて、中世の騎士には彼等の婦人達によつて、かき立てられたのである。』

又『騎士道は戰と戀の外に第三の情熱を持つ。ギリシヤ勇士の場合は、それは愛國心であり、中世騎士の場合は、それは宗教上の信仰であつた。即ちギリシヤ騎士道では、武道と男性戀愛と愛國心とが一つになつて、かの風習的情熱を形造り、中世騎士道では、武道と婦人崇拜とキリスト教とが一つになつて、同じ情熱を釀成した、と云ふことが出來る。』

又『ホメロスは（「イリアス」に於て）恐らく、ヘクトル（トロヤ王の子にして、パトロクロスを殺したアキレウスの仇敵）とアキレウスとによつて、ドメスティックな戀愛と、男性愛とを對照せしめんとしたのだと考へることが出來る。アキレウスの烈しい男性愛にひき比べて、ヘクトルがその女性の戀人アンドロマケーに示した優しき愛情は、中世紀に於て、アキレウスよりも寧ろヘクトルの方が人氣者となつた所の、少くとも一部の原因であつた樣に思はれる。アキレウスは同時代のギリシヤ人の心を支配したが、ヘクトルはずつと後の中世騎士道によつて初めて認められ、騎士道の代表的人物の列に加はる事が出來た。男性戀愛はギリシヤ的のものであり、靈化された女性愛はローマ的の

ものである。詩聖ホメロスは人間のこの二つの情熱を共に理解してゐた。そして、その一つをアキレウスに於て、併し彼を女性化することなく、描き、他の一つをヘクトルに於て、併し彼を病的感傷に陥らしむることなく、描いたのである。」

以上は凡て「ギリシヤ詩人の研究」第三章、アキレウスの章から、騎士道に關する部分を私の興味に隨つて拔萃したのであるが、これらの論調は、前述の「ダンテとプラトーとの愛の理想」よりも遙か以前に書かれたもの丈けに、純である代りには卒直であつて、彼の考への骨組みを理解するに便利であると思ふ。それにしても、古來ギリシヤ文學史の著書にして、かくも明確に、同性戀愛を辯護した者が外にあつたであらうか。我々はこれらの記事の表面よりは、その行間に、ギリシヤ的男性愛に對するシモンヅの情熱が、チロ〳〵と燃えてゐるのを見逃してはならないと思ふ。

又、シモンヅは同じ章で、ギリシヤ三大劇詩人の內の二人、アイスキュロスとソフォクレスとの、今は散佚して見る由もない劇詩に言及し、これらの大詩人さへもが、アキレウスとパトロクロスとの同性戀愛に取材して、劇詩を創作した事實を指摘してゐる。アイスキュロスのは「ミュルミドネス」と題するものであるが、アリストファネスが「蛙」その他の喜劇に引用してゐる同劇詩中の詩句と覺しきものによつて想像するに、「ミュルミドネス」には、アキレウスがパトロクロスの戰死の報告に驚き、やがてその死体を前にして慟哭する、男性愛の激情的場面を含んでゐたらしいのだが、アイスキュロスの天才が、我々後世人には想像も及ばぬこの特殊の激情について、如何に巧みに、美はしく描き出してゐたことであらうと、シモンヅはその散佚を歎いてゐる。

ソフォクレスのは「アキレウス、エラスタイ」（アキレウスを愛した人々）と題する劇詩であつて、その內に同性戀愛を少年の手にせるギラ〳〵と輝く星の一片になぞらへた詩句を含んでゐたことが分つてゐる外には、全く內容不明のものであるが、題名が、美しき勇士アキレウスをパイディカの立場に置き、彼のエラステース達といふ意味にな

つてゐるのを見ても、ギリシヤ愛を歌つたものと考へて、決して見當違ひではないであらう。アキレウスとパトロクロスの場合、人は彼等の孰れがパイディカで、孰れがエラステースであつたかといふ疑問を抱くかも知れない。（現存の陶器繪などに、パトロクロスの方が有髭年長に描かれてゐるのを見ると、一層この疑ひを強くするのだが）シモンヅもそれについて無關心ではなかつたと見えて、同章に左の一文がある。『プラトンは「シンポジオン」に於て、アイスキュロスの「ミュルミドネス」を論じて、「この悲劇詩人はアキレウスの方がパトロクロスを愛した様に書いてゐるが、それは誤りである。なぜと云ふに、二人の中ではパトロクロスの方が年長であつたし、アキレウスはギリシヤ軍中最も若く美しき青年であつたから。」と云つてゐるが、併しホメロス自身は、この愛するもの愛される者の關係について、我々に別段の疑ひを起させはしない。アキレウスとパトロクロスとはカムレードであつたからだ。彼等の愛情關係は同等であつたからだ。』

次にシモンヅは、アキレウスの物語「イリアス」を、軍事の携帯用寶庫なりとして、遠征中も常にその座右を離さず、アキレウスを唯一無二の師表と仰いだアレクサンデル大帝に論及し、物語中のアキレウスと現實のアレクサンデルの生涯との異樣なる相似について、例へば、アキレウスのパトロクロスに於けるが如く、アレクサンデル大王はヘファイスティオンを同じ激情を以て寵愛したことなどを詳敍し、大帝こそは、詩人の夢、國民的神話の理想を、その男性愛の情熱さへをも、身を以て實行した人物であると論評してゐる。

第三章の拔萃は以上に止めて、私は更らに他の各章の內から、ほんの二三の、最も際立つて見える記事を拾ひ出して見ようと思ふ。その一つは、第八章に記されたエレゲイア詩人テオグニス（前六世紀中葉）の頃である。「人間にとつては、全然生れて來なかつたのが最もよい。若し生れたなら、出來る丈け早くこの世を去つて休養につくことである。」と云つたこの厭世詩人は、併し、千四百行近くの作品を現代にまで殘して行つた。それらの詩の大部分はキュ

ルノスといふ彼の友であり弟子であつた年下の男性に呼びかけて書かれたものであるが、このキュルノスこそ彼の同性の愛人であつた。シモンヅは、テオグニスのエレゲイア第八七行から一〇〇行までの詩は、彼が愛人キュルノスの眞實の情愛を求めて歌つたもの、第一二五九行から一二七〇行までは、キュルノスの變り易き心を歎き、彼を移り氣の馬に譬へた詩、又第二三七行から二五四行までは、彼の愛する青年に翼を與へて、ヘラスの島々を飛廻らせることを空想して歌つたものである旨を記し、その最後の詩の全譯を掲げてゐる。私は直接テオグニスのテキストを知らないけれど、別書によれば、彼の現存詩集の終りの百五十行は、全くギリシヤ的男性愛を、殊にキュルノスに對する愛情を歌つたものであるといふ。キュルノスがポリピアスといふ者の子で、高貴な美しい青年であつたことも分つてゐる。テオグニスはこの青年にあらゆる智識を授け、眞の貴族に育て上げようとした。隨つてこの青年に捧げられた彼の詩集は、教訓的な價値を多分に持つてゐたので、當時學校の教科書に使はれた事さへあるといふ。それらの詩には、一方甚だセンジュアルな同性戀愛の言葉をも、多分に含んでゐたのだけれど。(Hans Licht, "Sexual life in ancient Greece")

シモンヅは、後世の史家によつて、このことが、詩人テオグニスの悖德であるかの如く考へられ勝ちなのは、彼がドーリア人であつたことを閑却した誤解であると爲し、その辯明の爲に次の事情を記してゐる。

『有史以前よりドーリス(ギリシヤの南端地方)の住民は、戰時は勿論、平時にも國家的制度として、男子は各々一人づゝの少年をカムレードとして選び、その少年達は彼等の教へ子であり且つ扈從となるといふ風習を持つてゐた。同地方のクレタ島では、この少年選擇の行事には、異樣に嚴肅なる儀式が伴つたものであるし、又同地方の都市スパルタでは、これらの一對の男性に、年長者にはエイプネーレス(靈感を吹き込む者の意)少年にはアイテース(傾聽する者の意)といふ一定の名稱が與へられてゐた。(プラトン風に云へば、前者はエラステース、後者はパイディカ

に當る）この一對は常に起居を共にし、年長者は少年に凡ての智識を授け、その代償として服從と情愛とを要求する。少年が成人しても彼等は離れることがなく、戰場では肩を並べて戰ひ、諸種の宴會には腕を組んで出席する。そして、この一對は、世間からは、相互にあらゆる權利義務を代表し合ふものとして、認められる。かくして、後世の武術と戀愛との騎士道に似た一種の騎士道が構成されてゐた。この騎士道的男性愛が一定の限度を守つてゐた間は、氣高き行ひと優美なる友情以外の何ものもなかつたけれど、それが後にいまはしき關係にまで墮落するに及んで、世人にヘラスに對する非難の口實を與へたのである。併し、テオグニスとキュルノスとは、ドーリス的騎士道の最も純潔なる間柄であつたと信ずべき多くの理由がある。云々』（だが、純潔であつたと信ずべき多くの理由については、シモンヅは一言もしてゐない）

かくの如き詳細なるギリシヤ愛ギリシヤ愛風習の說明は、何が爲に書かれたのであるか。テオグニスを辯明する爲にか。それとも、シモンヅ自身のギリシヤ愛に對する興味からか。私はこゝにも亦、彼の情熱の一つの閃きを見た樣に思ふのだが。

第十章には、レスボス島の女流詩人サッフォー（前六―七世紀）の事が記されてゐる。彼女は、アリストテレスによつてホメロスと同格の詩聖と讃へられ、プラトンによつて十人の詩神の一人に數へられ、或は女神アフロディテとエロス神との娘、アポロン神の友とさへ崇められたこの大詩人は、一方に於て、女性同性戀愛の始祖として知られてゐる。レスビアンといふ稱呼は彼女の故鄕レスボス島より起り、サッフィズムといふ名稱は彼女自身の名から採られたことは人の知る所である。

シモンヅはこの章ではそれらの點に觸れず、僅かにサッフォーの二人の女性愛人の名を上げてゐるに過ぎないけれど、併しその代りには、卷末の附錄に、首尾完きものとしては現存せる唯一の彼女の抒情詩を、彼自から全譯して揭げてゐる。この詩は女神アフロディテに捧げて、戀の悶への救ひを求めた意味のもので、ディオニュシオスによれば、

サッフォーの詩の最高峰を示す傑作であつて、その實物の如き全文が現在まで保存されてゐたのは、偶然の僥倖であつたと云はねばならぬ。シモンヅはこの抒情詩について別段の説明を加へてゐないけれど、それは、彼女を慕ひ寄つた女性の弟子の一人に對する悶々の戀情を歌つたものに相違なく、様々の事情から想像するに、その女弟子の一人よいふのは、コロフォン（リヂアの一邑）生れのゴンギュラといふ娘ではなかつたかと云はれてゐる。このゴンギュラに對するザッフォーの戀歌は外にも二三の斷片が殘つてゐる。この様に當の愛人が何人であつたかに惑ふのは、サッフォーの女性愛人が、現に知られてゐる丈けでも、決して一人や二人ではなかつたからである。（A. Weigall, "Sappho of Lesbos." による）

シモンヅが「ギリシヤ詩人の研究」の卷末附錄に、殊更らこの様なサッフォーの同性戀愛に關する抒情詩の飜譯を選んだのには、意識してか無意識にか、何かの意味がなかつたであらうか。更らに云へば、その卷末附錄といふのは三編からなつてゐるのだが、殘る二編の一つが又、サッフォーのものよりは數等露骨に男性愛を歌つた田園詩人テオクリトスの譯詩である。ある意味では甚だ人目につき易い卷末附錄の、三つの内の二つまでが、かゝる傾向のものによつて占められてゐるのには、少しも意味がないと云へるであらうか。

そのテオクリトスについては第二十一章に記されてゐるのだが、テオクリトス（前三世紀初め）は高名なエイデュルリオン（田園詩）の詩人であつて、三十編の作品が現存してゐるが、その八編は全く男性愛に捧げられ、其他の詩に於ても屢々それに觸れてゐる。その傾向の代表作としては、或は「タ・パイディカ」と題するものを採るべきではないかと思はれる。それは少年の老い易きを歎き、少年よ束の間の盛りの花をあだに過さざれと歌つたもので、少し突飛な比較に見えるかも知れないが、徳川初期の隨筆「犬つれづれ」のある文章と非常に似た心持の、美しい詩である。シモンヅは、併し、それには觸れず、第十三詩編の、ヘラクレスとヒュラースとの愛情を歌つたものゝ梗概をや

ゝ詳しく記し、それに關聯して、又しても彼の所謂ギリシャ騎士道について數十行を費してゐる。

先に述べた卷末附錄に收められたテオクリトスの譯詩は、その第二十九詩編であつて、こゝに歌はれてゐる對手の少年が何人であつたかは不明であるが、

「君がほゝゑむ時、陽は神の榮光の如く私の上に輝き、君の眉ひそむ時、私のまはりは暗闇にとざされる。君の愛人をこんなにまで惱ませてよいのだらうか。」

といふ樣な調子で、少年の美を讃へ、少年が彼の言葉を守つて外に心を移さぬことを願ひ、こゝにも亦少年の老い易きを述べて彼の移り氣を誡め、しかし、少年は翼に乘つて飛翔するので、私の足では到底捉へ難いと、愛情の報いられぬを歎き、綿々たる戀慕の心を歌つたものである。詩中に「アキレウス的友情」といふ言葉が使はれてゐる事も注意すべきであらう。シモンヅが、かくの如き戀愛詩の全譯を試み、しかもそれを卷末附錄に收めた心持を、我々は如何に解すべきであらうか。

第二十二章は「ギリシャ佳句集」の詩人達の研究である。あの夥しい詩句の中には、云ふまでもなく多くのギリシャ愛讃美の歌が含まれてゐるのだが、シモンヅがこの章で取扱つた作者の內、最も際立つて見えるのはストラトーン(前二世紀)である。彼は文中に、この詩人の作品を三編まで英譯して掲げてゐるが、それらは皆同性戀愛の甚だ露骨なる戀歌である。シモンヅはギリシャ、ラテンの詩を飜譯する事を好んで、生涯には夥しい數に上つてゐるが、その譯筆は正確よりも情熱に於て優れてゐるらしく、隨つて正確を重んずる人々からはシモンズ流の飜譯として非難され勝ちなのではないかと思はれる。「ギリシャ詩人の研究」の中にも、このシモンズの好みがはつきりと現はれてゐて、附錄を初め書中到る所にギリシャ詩の英譯を見るのであるが、ストラトーンの譯詩もその一つであつて、「花環編み」と題する一編の如きは、原作を知らずとも、如何にも情熱に富んだ奔放な譯筆らしく感じられる。シモンヅで

なくては、この様な詩に、この様な情熱を、どうして持つことが出來やう。では、シモンヅでなくては情熱を感じ得ぬ詩、シモンヅの著書にこそふさはしい譯詩といふのは如何なるものであるか。ストラトーンの「花環編み」はその最も適切な一例らしく思はれるので、拙い散文譯にして左に掲げる。

今日、朝まだき、私は花環を編む店の前を通りかゝり、そこに一人の少年を見た。その少年の美しさは、例へば秋の夜の流星の樣に、閃く火箭となつて、あたりの薄闇をひき裂き、私に榮光を投げかけた。

少年は薔薇の花冠を編んでゐたが、編む人の頬と唇こそ、その薇薔の花であつた。彼の指先の薔薇色の下では、本物の花は色あせて見えた。ふと驚いて、少年は無言にこなたを眺めたが、私の注視に合ふと、薔薇の花の樣に顏赤らめた。

私は少年に言葉をかけた『オヽ、花を編む花よ。氣高い純白のマートルの花と、淫蕩なサイプラス島の紅の花びらとを一つにした、世にも愛らしき花冠よ。お前の手になつた花環を、その胸に結ぶものは、どこの仕合せな神様なのか、それとも勇士なのか、教へてくれ。

若しや、その仕合せな人が私であつたなら、私は喜んでお前の奴僕となるだらう。命さへ惜みはしない。嘆願と涙との價で、お前の薔薇の色あせぬ内に、私に賣つてはくれまいかしら。』すると、少年はほゝゑんで、一層赤くなりながら、唇に指を當てゝ答へた。

『静かに。でないと、お父さんに聞えます。』さう云つて、少年は花冠から一輪の花を抜取り、その薫を、雪の花冠と見まがふ彼の胸に咲き出でた、二輪の石竹の花に押しつけて、それから口づけをして、承諾の匂やかなしるしとして、その花を私にくれた。

私は、はにかみながら、婚禮の式場を飾るのだと僞つて、多くの薔薇や花環を注文した。そして、とゞろく胸の思ひを押し隱しつゝ、少年に、それらの花を運んで、私の部屋を飾りに來てくれないかと賴んだ。そして、花と一緒に、もつと嬉しいものをも運んで來よかしと。

だが私は私の小論の豫定の規模に比して、余りに長く「ギリシヤ詩人の研究」のみにかゝづらひ過ぎた樣である。それと云ふのも、シモンヅのひそかなる情熱は彼が若くして着手したこの著述に、最も多く潜んでゐるからである。又一つには、古代ギリシヤの風習そのものが、甚だしく特異であつて、隨つてその文學を語るに當つては、シモンヅならずとも、この風習を無視することが出來ない程、豐かな材料に惠まれてゐるからである。その意味では、右の私の記述は決して長過ぎはしない。謂はゞ「ギリシヤ詩人の研究」に含まれたる同性戀愛の一瞥でしかないのだ。併し一瞥にもせよ、私の小論にとつてはどうやら目的を達した樣に思はれる。といふ意味は、シモンヅが最初の大著述として、かくの如き世界を選んだこと、又それを研究するに當つては、何等の態とらしさもなく當然の如くに同性戀愛に觸れることが出來る爲に、シモンヅは他の場合に比べて遙かに大膽にそれを取扱つてゐること、この外からと內からとの觀察によつて、冒頭に述べた彼の夢、彼の「生得の憬れ」と、彼の生涯の事業の第一着手とを結びつけてゐる微妙な關係について、やゝ明らかにすることが出來たと考へるからである。

時評

三原山問題その他の世相分析

――露示慾のあらはれ――

木村廉吉

ニユウデイスト迫害

流石にフアシストの國

眞裸体になれ、而して心行くまで太陽の光線に浴せよ！　といふニユウデイズムの運動はイタリーでも流行してカシノ地方ではさながら裸体王國を現出してゐる。ところがこれ等衛生上の急進主義者を苦々しく思つてゐた昔氣質の山羊守達は俄然迫害の態度に出で、折角いゝ氣持で野原で陽光を浴びてゐた男女が着物をまとふ暇もなく追ひ出してしまつた。ひどいのは百姓のお主婦さん達で憤慨の余り裸体の婦人達に投石の暴行ざたに及び、負傷さしたとは流石フアシストの國らしい。

（昭和六年八月三十一日　東京朝日新聞より）

I

自分の裸体を示さんとする露示慾（或は曝露慾）及び人の裸体を見んとする窃視慾は本來甚だ強い本能的慾望の一つである。そして現今の文明の社會制度の下では、かやうな慾望が公然満足される機會は非常に限定されてゐる。しかし慾望はその爲に決して消滅せず、かへつて表面から押へられるだけに無意識的に一層強い力を持してゐる。膚をあらはす事が極度に嚴禁されてゐる西洋の上流社會の夜會服の型の甚しく露出的に定められてゐる事、レビユウ其他類似の興業が斷然盛である事、その他吾人の經驗するところでも平素謹嚴な人が酔つて裸をどりをする事、精神病者が裸体になるのを好む事などはこの間の消息をあらはしてゐる。

海水浴場の情景などからも、泳ぎはさておいて自分の

裸体を見せやうとし或はそれを見やうとする傾向の方がはるかに強く看取される。水着のデザインなども、如何にして一見体よく、しかもなるべく多くの部分を露出せしむべきかに極度の苦心を凝らしてゐる。

ニユウデイズム（裸体讃美）の運動はジヤン・ジヤツク・ルソーなどによつて疾に唱導されたもので、現今獨逸、佛蘭西その他の國で盛に行はれ、裸体で日光浴をしたりダンスをしてゐる寫眞なども時々見られる。この運動は無論人爲的な習俗を逃れて本來の自然の生活形態にあこがれる反動のあらはれだらうが、又一方に人間の本能をそのまゝ滿足させる様な行動は必然、お互ひにその本能發揮を牽制し合ふ事によつて成立する社會そのものゝ憎しみや厭迫を受ける樣になる。前記の場合昔氣質の山羊守や百姓のお主婦さん達が、エロレビユウを取締るこはい小父さんの役を買つて出て檢閲者の抑壓作用を司つてゐるのは誠に御苦勞な次第である。

露示慾（曝露本能）Exhibitionismus はその最も原始的な場合は自分の裸体をあらはし、或は特に身体の或る一部分を人に示さうとする形をとるが、もつと複雑になると今度は自分そのものを表示しやうとする傾向をとる樣になる。これが善き意味の名譽心を伴ひ、高い水準にまで美化されると、國家の爲に名を顯はし或は學問の上の業績や立派な藝術品を殘して社會を裨益する事になる。しかし露示慾の傾向の強い人はただ變つた事或は社會道德の上からは惡とされる事によつてすらも自己をあらはさうとしてゐる事實は所謂義賊其他の犯罪人の行狀の中によく見られる。

又生前何も顯著な事の出來なかつた人がせめてその死に方によつて自分を目立たせやうとするやうな、露示慾の發揮も必ずしもあり得べからざる事ではなく、その爲に自殺の立會人などゝいふ奇抜にして笑へぬ役割が必要になるのである。

今年流行の三原山御神火自殺の中には、被暗示性の強い爲にフラ〳〵と出かけるのも多いだらうが、又有名な

流行地をえらんで露示慾を發揮しやうとしてゐるのも相當にある様に思はれる。

御神火自殺の新記録

きのふ六青年を呑む

〔大島元村特電〕 銀鼠色の噴煙たなびく大島三原山火口に自ら死を求めるものは依然としてつきない、七日も午後四時までに投身者六名、大島署で保護中のものカルモチン自殺未遂者一人と、火口附近で番人に發見された投身未遂者四名といふレコード破りの多數に達し、折柄日曜を利用して觀光に來島登山した二千人近い人々を驚かした、この傾向は初夏にかけて益々濃厚となつて行く模様で人のこゝろを暗くするニユウスではないか

その一 午前八時ころ火口で大勢の見物客の中から丈五尺一すぐらゐ、黒詰襟服鼠色のズボンを穿き、右の手に繃帶した廿一歳ぐらゐの青年が『一、二、三!』の號令と共に飛び出し投身自殺した。遺留品には澁谷區△△△△△△△△〇〇〇とある、云々

その二 赤坂市福吉町洋服商〇〇〇等と登山口から同行した紺詰襟服を着た廿三歳ぐらゐの青年が午前八時ごろ突然無言のまゝ火口に投身自殺した。遺留してきたバーバリーコートのポケツトの中にあつた省線定期乗車券その他により死者は澁谷區△△△△△△△△〇〇〇と判明。

（中略）

その六 午後四時廿分ごろ三原内輪火口降り口で元村松永寫眞館の高澤靜馬が客待ちしてゐると廿歳ぐらゐ、脊形五尺二、三寸靑がゝつた背廣服のモダン青年が火口の傍らにうづくまり何か書いてゐるので怪しんで六、七間のところで『飛び込むなら待て』と呼ぶと『俺を苦しめるな死ぬのだ』といつて不思議にも自分の服裝を一々說明してゐたが、高澤が三間位近づくとその青年は突然持つてゐた風呂敷包を先きに火口に投げ込んでから自分もそのまゝ飛び込み自殺した、現場にキング六月號が遺留してありその口繪に『さようなら〳〵』『伯父さんお世話になりました△△さんによろしく、〇〇〇』

（昭和八年五月八日夕刊　讀賣新聞より）

次のニュウスからも露示慾のにほひが濃厚に感ぜられる。

おけさ節入りの
暢氣な『自殺報告書』

カルの効き目を一分毎に記す

十四日午後六時ごろ王子區上十條一三三五先の雜木林の中に一人の青年が昏倒してゐるのを附近の子供が遊戲中發見王子署員が取調べると年齡廿三四歳綿セルの羽織に袷を着て桐の駒下駄をはき一見職人風で生命危篤、カルモチンを嚥下自殺を企てたもので蟇口には金二錢があり、便箋に遺書風の『カルモチン自殺經過報告書』が認めてあつた。

『俺は散々女に金を使つて心殘りもなく太く短く世を暮した』

二分、なんともない、口の中に土を入れた感じがした

三分、パット一服、ゲップが出る

四分、なんともない、ラムネをのんだ氣持がする

五分、盛んに煙草をのむ

六分、自分の書いたものを見る

七分、飲んだカルモチンの利き目なし

八分、これではなんにもならぬ、三原山の方がいゝ

十分、なんともない、おけさでも一つ唄はうか

十二分、なんともない

『雪の新潟吹雪で暮れる、佐渡は………新潟縣△△△△△△△　○○』

とあつて『佐渡は……』でカルモチンが利いたものらしい、暢氣な自殺者で、同署では身許不明で行路病者として區吏に引渡した。

（昭和八年五月十五日夕刊　讀賣新聞より）

これには三原山は神火育ちいさゝか顏負である。カルモチンの分量が書いてあれば更に參考になるだらう。

III

次に又一寸變つたところを拾つて見る。

首相官邸前で腹切りの男

遺書に死なしてくれ

二十四日午前十時三十五分頃麴町區永田町の首相官邸では森書記官長の歸りを荒木守衛が見送つて玄關の大とびらをしめやうとした瞬間、風色外たら、こん背廣の男が玄關前の石段に片足ふみかけ『切腹だ』と叫ぶなり折かばんを放り出しズボンを押下げ黑鞘九寸五分を拔いて左下腹部につきたてた、驚いた荒木守衛はとびかゝつて短刀をもぎとり巡査と協力して押へつけ自動車にかつぎこんだが『犬養にあはせろ』とわめく

のを赤坂傳馬町の前田病院につれこんだ、この男は福岡市△△△△△△△　〇〇〇（三二）と稱し名刺には同町崎戸鑛業所工夫募集事務所と書いてあつた、傷は幅三センチ深さ三センチ治療二週間位のもの、なほ遺書は犬養首相と父親留次郎あてのもので

『官邸を汚してすまないが死なして下さい、自分は何をやつても失敗して生きてゐる空はない』

といふ意味、父親あてには

『滿洲巡査を志願したがそれも駄目になつたから首相官邸前で死ぬ不孝を許して』

とあつた。

（昭和七年二月二十四日夕刊　東京朝日新聞より）

今年になつても又似た様なのがある。

また陸相官邸で割腹
自殺を圖る
大臣に面會を求めた青年

十九日午前九時十分ごろ麹町永田町陸相官邸へ、中折帽子に背廣姿の一人の青年が訪れて陸相へ面會を求めたので前田秘書官が階下應接室に待たして置くと件の男は洋服のボタンをはづしたうへポケットから小刀を取り出して腹部に突きさしたので直に應急處置を加へた上麹町憲兵分隊へ引渡した、取調べの結果この男は荒川區△△△△△△△　〇〇〇（二二）といふ者で懷中に『五・一五事件及び愛國運動者を即時釋放せよ、軍民一体となつて皇道維新を斷行せよ、死をもつて嘆願仕り候』と記した陸相宛の奉書紙を所持してゐた、傷は臍のうへ四インチの長さに淺くかすつただけのものである。

（昭和八年五月十九日夕刊　讀賣新聞より）

また陸相官邸でとあるところを見ると他にもまだあつたのかも知れぬが、兎に角この二つとも死に場所の堂々としてゐる割に傷の淺い點が共通であつて、大舞臺をかりての露示慾演出と見ても余り誤りなからう。まだ陸相官邸の方は兎も角遺書にスローガンをならべて自殺の理由に辻褄を合せてゐるが、前の方は犬養首相を引き合ひに出した點とその自殺の動機とが唐突でその間に何の聯絡もうかゞう事が出來ぬ。そして今にして回顧すればそれから間もなく、舞臺を貸した犬養首相はあの大悲劇によつてゆくりなくもその名を不朽に止めたのであるが。

その他、近頃は三原山の人氣に壓されてや丶振はぬが一時一寸流行つたデパート飛び下り自殺などもこのお仲間らしい。いくら尖端的なデパートでも天國行きの旅行用具一切取揃への賣出しもしてゐないから、露示慾の仕業と考へぬ限り官邸自殺よりも一層聯絡不明瞭である。そしてこの場合は結局、露示慾病者がデパートの名を露はすマネキンを勤めてやる樣な事になるのである。

*

古いところでは、死骸をそのまゝ火葬する樣に遺言して懐中に忍ばせた煙火を爆發させて立會人を驚かせ、死後までもその本領を示す事を忘れなかつた十返舍一九や押し入つた家毎にサインを殘して引き上げた盗賊自來也（實說は支那の我來也といふ）などは露示慾發揮の先覺者として何れも一家を成すものである。

（昭和八年六月稿）

『O・F氏のトランク』を評す

伊東豐夫

フィルム「O・F氏のトランク」（原名,,Dreizehn Koffer“）を諷刺文學に餓えた人々に推奬する。作者、グラノフスキーについて私は何の知識も持つてゐない。彼はサヴェートの優秀な演出家だと云ふが、其の眞僞も余り確かではない。併しそんな事は私に取つてはどうでもよい事だ。供せられた料理を食ふ前に料理人の名を知らないと、食事を始められない其の道の通と稱する人種に、私は何の關係もない。藝術、思想を取り上げるのに第一に署名を吟味しないと一言も批評出來ない人々や、血統や、階級のみを思想の中に探索するペダントとは區別されるのを光榮とする。私の此處に云ふ血統の探索と

は、思想的近親關係から凡てを評價して行く爲にオリヂナリティを殺すアカデミックな、紋切型的方法を云ふので、階級的レッテルから魔術的暗示を受けることも、或る意味でこれと同類である。

フィルム「O・F・氏のトランク」から私が感受する快い陶醉は、人間的なもの、生活的なもの、本能的なものを通じて作用して來たのであつて、此のフィルムの中に盛られた諷刺が左翼的な世界觀を根底としてゐる爲の思想的共鳴からではない。

日本の文學も諷刺文學に關する限りでは、今迄是と言つて取り立てゝ論ずべきものを持たなかつた。それらしいものと云つては（恐らく）芥川龍之介氏の「河童」が唯一の收穫だつたかも知れないのである。諷刺の成長する苗床がヒウマニティにある以上、之は當然の事だ。ヒウマニティを殺すのが特權的道德の中心であつた。そして此の矛盾した形態が、吾々日本人の最も奥床かしい長所の代表的なものとされてゐる家族制度に於て曝露してゐる。歌舞伎劇は何年經つても、主君の爲に吾子を殺したり、切腹したり、一生を復讐に費したりする武士の名譽、義理人情にほだされて身を賣る娘の犧牲的精神、恰るで老聖者のやうに物言ひ、振舞ふ子供のマゾヒスティシュな忍耐心を反覆して見せ、これを悲愴な淨瑠璃や何かの伴奏で物語りながら、觀客を感動させ、教育して來たのだ。現代的な藝術形式を誇るフィルムにした所が、それが日本のものである限り、筋は悲劇的な諦めを其の結末としてゐるのが大部分で、それが又大衆には最も受けるのである。つまり吾々は、自我や生活力を努めて殺すやうに說教され教育された。そして殘念ながら此の教育法は略々其の目的を貫徹して了つたかのやうである。此のやうにして、同胞は悲劇を好み、悲劇を演じ、生活力から締め出され、諦めの宗教が自殺へと逃避し、知識階級は內的生活を豐富にすべき思想を把み得ず、自我の貧窮を倦怠として感じるだけである。痛烈な諷刺文學を產むには最も適當した現代にありながら、それらしいものは一向に見當らない。あるのは、拙劣低級な、赤新聞的暴露であつて、此の暴露に終始する連中は、辛辣と無

遠慮とを混同してゐる人々である。諷刺は疑ひもなく、フモールの親族であつて、彼は少しばかり政治的な意企を抱くに過ぎぬ。彼は葛藤(コンフリクト)を豫想しない限りは登場しない。諷刺の苗床としての人間の內的葛藤こそは、又ヒウマニティを文明へと導く推進力を作すのだ。而もこれこそはまた、諷刺を產み得ず、諷刺を解し得なかつた吾々の同胞が精神分析學に對して甚だ冷淡であつた共通の原因なのである。

＊

地圖の上に其の名を見出すにも困難な、小さな田舍町の或るホテルに十三のトランクが運び込まれた。トランクにはO・F・と頭文字が記されてゐるだけで、其の所有主の身分や、人柄を想像させるものは恰で見當らない。唯、トランクの橫腹に貼られた無數のラベルから、此の人物が世界中に足跡を印してゐる活動家である事が想像されるだけだ。此の十三個のトランクは、軈て此の小さな町の住氏等の話題の中心になり、好奇心は次第に此のO・F・氏の人物についての大袈裟な臆側となつて街中に擴がる。拔目のない新聞記者は、仲間の建築技師と語らつて此の町中の煮え立つて來る昂奮を利用する。つまりO・F・氏は百萬長者で、此の町で何か一仕事を起す爲にやつて來るのだと云ひ觸らす。そしてホテルの亭主にキャヴァレットを開かせたり、ジャズバンドを都會から招聘させたりするが、町中も此の感化を受けて急に活潑になり出す。床屋は看板をフランス語に更め、飾窓の人形に入念に手入れをする。小學校では歡迎の合唱歌を練習し始める。町長は尨大な都市計畫を立て、前記の建築技師に之を一任する。町は都會へと成長して行き、企業が起り、市場は沸騰する。更に著しい事は、町の女等がキャヴァレットの女藝人の影響を受け始める。彼女等は極度にお洒落になり、紅白粉、香水が、パリ、ロンドン、ベルリンあたりから何萬噸と云ふ巨船、急行列車、航空機等に依つて運び込まれる。朝から晩まで彼女等は流行について語つてゐる。所が肝腎のO・F・氏は一向姿を現はさない。町中の住民の執拗な質問から、今は市長となつた町長も大いに弱り果てる。新聞記者の機轉でO・F・

氏の替玉が遥か高いホテルのバルコンから民衆に挨拶をする。尨大な都會に成り上つた町は愈々繁榮し、又多くの幸福な戀人等が結婚式に彼等の人生を謳歌する。遂には此處で世界經濟會議さえ開かれる。新聞記者と技師は遂に來ないO・F・氏を持て余まし、O・F・氏を災難(カタストロフ)に依つて葬る事に決心する。が、其の時分には、人々は既にO・F・氏が何者だつたかすつかり忘れてしまつてゐるのだ。

所で此のやうな驚くべき繁榮を此の町にもたらしたものは、元はと云へばオステンドとオステンデの一字の違ひから、或る女優の十三のトランクが誤つて此の町へ運び込まれた爲であつた、と云ふのである。最後に、作者は、不景氣が此のやうに簡單に克服されゝば容易い話だが、と付加へて、置くのを忘れない。

之が大人の爲のお伽噺(メエルヒエン)として吾々に差し出された物語だ。勿論、此の梗概を讀むでお分りの如く、之は今日の資本主義經濟組織を以てしては、不景氣を何とも出來兼ねると云ふ事のパラドックスである。諷刺された一時的のインフレ景氣が此のフィルムの始めから終りまで、叮嚀にカリケーチュアライズされてゐる。皮肉られてゐるのは又文明である。何故なら、とぼけた田舎町を斯く迄大都會に仕上げたものは、オステンドとオステンデとの一字の讀み違ひから起つた事だからだ。では、一体O・F・氏は何者であるか？最後になつて見ればそれは哀れにも生活の爲に世界中流浪してゐる女優に過ぎぬが、其れに依つて象徴せられるものは、未だ何か別にある筈である。O・F・氏について此のフィルムの語る言葉を捜して見る中にそれが判明する。世界中旅行してゐるが、遂に姿を現はさないO・F・氏は、民衆を納得させる爲に遠いバルコンから其の替玉の姿を瞬間的に現しただけで彼等を愈々熱狂させ、百種の憧憬の的であり、O・F・氏歡迎の爲に招ばれたキャヴァレットの女は警官から擧手の禮を拂はれる種の威力を持つてゐる。そして又小學生等は歡迎歌を合唱し花環を捧げ、市長は祝辭を述べる。恐るべき寓意でないか。つまりO・F・氏は必らず來ると約束されて遂に來なかつた景氣であり、此のオステンド

と云ふ町は田舍臭い風景に圍まれてはゐるもの丶、實は國家其のものである。市長は政府であり、警官は法律であり、多くの結婚とそれに續く小さなものだちの誕生とは、利潤をいやが上にも生み續ける企業であり、新聞記者と技師とは、政治の策謀性そのものであると見るのが至當である。さて、私は作者グラノフスキーの意企が奈邊に存するか一通り紹介した。次いで此の意識的な皮肉の裏に秘む無意識的背景を分析する順序である。

痛烈な諷刺を産み、またこれを愛する人が常にさうである如く、グラノフスキーも亦懷疑的な男であるのを免れぬ。そして此の懷疑はニヒリスムスに迄通じて居り、其處にパラノイアックな性格が現はれる。と云ふのは、文明も、此の文明をもたらした經濟的繁榮も、一つの偶然的な迷ひから由來したと作者が言つてゐる所を私が指摘してゐるのだ。此處ではそれが諷刺の最も重要な骨組みとはなつてゐるもの丶、實はそこに作者自身の性格の裏づけが存してない事には、此のやうに見事なイデエの發展を見る事は出來ないのだ。諷刺にした所で、事物の或る意味を局部的に擴大する點は、妄想的な性向を自我に依つて自由に統制し、驅使する事の出來る人々にのみ許された特權的機能である。此の物語を心理的に觀察する時には、もつと奇妙な思ひがけぬ事も出て來るが、これも矢張り神經症的な形を取つてゐる事は同樣である。つまり、眠つてゐる田舍町は、憂鬱狀態にある心理の投出であり、此の憂鬱は、諷刺的には不景氣（デプレシオン）を暗示する。此の退屈な重々しい雰圍氣は、又總ての文明的享樂から隔てられてゐる點で作者の懶い幼兒期への回顧である。其處で、文明も、繁榮も甚だしい色情化（Erotisierung）の形をとつて全面的に押し寄せて來る。憂鬱は燥狂へと移る。極度に文明化した町の風俗は、全部が感能的な方向を辿る點でアメリカ的であると云へる。現代美人の典型を誇張したやうな、ジラフのやうに頸の長い女が犬を連れて散歩すると、町中の男等は窓と云ふ窓から首を伸ばして彼女を驚異と讃歎の眼差しで見送る。此の驚かされた素朴な町の男等は、如何に透明に、性的事物への幼兒的好奇心を示してゐる事か。つまり、文明は幼兒期に

空想された性の世界への突入として把握されてゐる。策動する新聞記者と技師とは、此のやうな幼児的好奇心と空想性の象徴であり代表であるが、町へジャズを輸入するやうにし向けたのも彼等である。燥狂に陥つた町は、市場の沸騰として現はれて來るが、心理的には極點に達した豐富なリビドォの集中を意味してゐる。結婚式の氾濫も同様である。

此の邊で私は打ち切らう。これは幾ら分析して行つても限りがないからだ。又何の場面を取り上げて見ても、それは有り余る諷刺を含む立派な漫畫であるからだ。唯、最後に私は總てを總括して次のやうに云つておから――作者グラノフスキーが此のフィルムに於いての最も眞劍な意企は、世界的な經濟恐慌にも關はらず、盛上つて來る強烈な生活力から之を反撥し、論理を超越して實現に突進する人間の不撓なエネルギイを聲高く、讃ふ事であつて、從つて又生本能は又性本能であり、之が又一切の文明の生物學的なエネルギイの源泉である事を直截に示すことこの物語に勝るものは少い。リビドー拒否と自己否定に終始する吾國のフィルムの不健康さに比較して、之は又何と云ふ莊嚴雄大な生活力であらう。經濟恐慌に對し憂鬱症的な心理作用を以て反應した作者は、此處から自我の心理葛藤、無意識界へと潛入して行つて、さて再び意識界に復歸した時には、あくまで強い生活力を奮ひ立させながら、耐へ難い現實の厭迫に反抗し、彼自身と人類とを防禦せんとするものゝ如くである。(完)

乘馬咎めの心理

大槻憲二

中山太郎氏が本誌前號に書かれた『乘馬咎めの神佛』は、種々の意味で興味の深い論文であつた。氏は、神社佛閣にしてその前を乘馬のまゝに通り過ぎる事を許され

ぬもの丶實例を多く擧げ、それに對する心理學的解釋を添へておかれた。私は氏の與へられた實例を再檢討して氏の論の批評ともし、又その努力への敬意ともしたい。私の批評は氏の結論への多少の補說ともなり修正ともなるかも知れないと思ふ。まづ

第一に、乘馬咎めをする主体の類別を試みよう。一、神社。二、佛閣。三、御陵。

この三種があるとすると、凡そ神聖にして畏怖せられる一切のものが乘馬咎めをするのだと云ふ結論を下してもよさゝうである。

第二に、考究すべきことは、咎められる事柄の種類である。中山氏の擧げられた實例を見ると、(一)乘馬、のみならず、(二)乘船、も(三)駕籠乘り、もいけないとなつてゐる。總括して、何物にでも乘つて通ることがいけないと云ふ事になる。極端なのになると、前を不淨物を運んでもいけない、神社佛閣を見てもいけないといふのがあつたが、これは少し別の契機が這入つてゐると見られる。

第三に、考へねばならないことは、乘馬咎めを避ける方法である。それには積極的と消極的とがある。前者には、九州の菊地寂阿の櫛田神社に於けるやうに、(一)神殿の扉に矢を放つのがあるかと思ふと、讚州の松平氏が「讚岐の金比羅か金比羅の讚岐か」(つまり、お前は高が一神社の主であるが、俺は神社の存在を包含する國土の領主だ)と云ふことに依つて、要するに(二)自分の方が偉いのだぞと明言するのがある。一言で被へば、神に負けてをらぬぞと云ふ氣慨を見せることに依つて、乘馬咎めを避ける方法である。次に、消極的の方法としては(一)神社を低地に移すこと、(二)神躰を後ろ向き(北向き)にすること、(三)神體を右の唐櫃に入れること、(四)神社を森を以て圍むやうにすること、(五)神體の兩眼に漆を塗つて見えぬやうにすること。これ等五つの方法があるが、これ等は要するに神佛に見られないやうにすると云ふ根本の動機に於いては同じやうである。更にも一段消極的な、併しそれだけに一層徹底的な避難法は、(一)始めから下馬すること、(二)下馬して鞍を捧げるこ

と、(三)船ならば帆を下す（帆禮）こと、などである。

さて、私はこの問題を以上三つの觀點からいさゝか系統的に、組織的に考へて來たが、も一度各々に就いて、私自身の獨自の考察を進めたい。

第一に、咎めの主体であるが、これは特に或る種の神佛に限らず、一切の神佛（神聖なもの）が、その前に人々の出た時には乘物から下りることを要求するやうである。神佛前には常に必ず『下乘』の制札が立つてゐる。さう云へば、さう云ふ超人間的なものでなくとも、生きた神聖な者、尊崇せられる者は、人々がその前に出た時乘物から下りることを要求するものである。我々が先生や上長に路上で會つた時、乘物の上から見下して挨拶することは、只今でも禮儀に外れたことゝなつてゐる。即ち乘馬咎めは、我々の考察に於いては、我々の尊敬しなければならない人間にも擴充せられて來たことを注意せねばならない。

第二の、咎められる事柄も、(一)乘物に乘ることばかりでなく、(二)帽子を被つてゐること、(三)腕まくり、臂まくり、素足でゐること、(四)丸腰（無袴）でゐることなどである。その前に不淨物を運ぶことに就いては、尊敬せられる人間に對しても同じことで、師父の前で咳唾を吐いたり、下がゝつた話をしたりすることはいけないとなつてゐる。神社佛閣を見てはいけないと云ふ事もやはり人間間に於いても妥當する。偉い人の顏をまじ〱眺めたりするのは無禮であるとされてゐる。對談する時も、眼は先方の胸の邊に注ぐのが禮儀となつてゐる。

第三の、咎めを避ける方法としては、殊にその積極的方法としては神を征服したり、上手に出たりするのであるが、これは人間間の禮儀に於いては許されない事となつてゐる。併し、門下や子弟でも偉くなつてしまへば師と對等に振舞つても人々はさう無禮とは云はぬし、また時には大學教授が先生でも現在大臣の元弟子に敬禮しなければならないやうな事實さへも實際にある。併しその場合には偉くなつた元弟子に別に人々の批難は來ない。消極的の方法として、神佛の眼に見えぬやうにすると云ふ事は、これは所謂「凶眼」と云ふ考へ方で、凡そタブ

ーであるところのものゝ眼に觸れることは災を被ることを意味すると昔からされてゐる。これも恐い人に睨まれると、身動きが出來なくなると云ふ平凡な日常の事實として、我々の眼前にいくらでも實例が提供されてゐる。かう云ふ風に考へて見ると、乘馬咎め的の事實は、必ずしも神社佛閣に就いてのみ見られる特殊の異例事ではなく、程度の差こそあれ、一般の神社佛閣にも見られるし、また神社佛閣に就いてのみならず、現在の活社會の中にそれと系統を同じくする事實が依然行はれてゐる事を觀取し得るのである。特殊の神佛に於いて特殊の乘馬咎めがなされたと云ふ事は、一面に於いて傳説に誇張せられた話であつたに相違ないと共に、他面に於いて、人々の素朴であつた時代に於いてさう云ふ信仰が今日よりも力強く行はれ、從つてさう云ふ實際事例も數多かつたに相違ないと云ふ事も考へられる。

從つてかゝる咎めは中山氏の結論せられる如く『馬にはさう云ふ習性が』なく、『乘つてゐる人の心の動き』のため、即ち心理作用であることが分るのである。實際中山氏の云はれる如く『社頭なり堂前なりを乘打すると落されるなどの潜在意識が活くので落馬するのである。更に反言すれば、乘馬咎めをするなと意識することなくして乘打ちした場合には、決して落馬するやうなことはないと云へるのである。』併し中山氏の論は何故にそのやうな潜在意識がその場合に強迫的に働くのであるかとの問題には觸れてゐない。これは民俗學的の任務の範圍を超えるからと云へば、成程さうである。こゝまで暗示して貰へば、我々は有難いのである。その後の問題は、こちらで引受けて研究せねばならない。

必ずしも社頭堂前でなくとも、自轉車などに乘つてゐる者がこの電柱に突當つてはならぬと思ふと、却つて打突かつたり、貴人の前でそそうがあつてはならぬと思ふと却つて固くなつて失敗をしたりするのと同じ心理的機制であるが、何故に、かゝる場合に、このやうに強迫的行動をなすのであらうか。中山氏はこれが潜在意識に因る強迫行爲であると云ふ點までを明かにせられたのであるから我々はその強迫神經症的行爲の起源を研究せねば

ならぬ。併し、精神分析に多少の知識ある人々ならば、私が右に論究して來た經程に依つて、その起因への示唆を明白に感知せられたであらう。即ちそれはエディポス・コムプレクスである。何となれば、神佛は元々父であつて、父は我々に割禮を施し、性行動（牛を馬に乘り換へるなど〻云ふ言葉その他に遺傳せられてゐる原意としての性行動）を禁制するものだからである。即ち、我々は父の前に於いて、父の禁ずることをしてゐるとの氣咎めからして、換言すれば、自分自身への禁止願望からして意識面の反抗に拘らず、か〻る失敗を演ずること〻なるのである。（完）

『人情の科學』は既に出づ！

朝日新聞の家庭欄の『女性のための批判』（ニウスから問題を拾つて）の中で、六月二十六日に羽仁もと子女史は『人目をひく犯罪や自殺や心中事件』が近頃の社會に多いのに、この『暗黑の人情界に救ひの光と輝くことが出來なくても、せめて科學の戰士となつて進まうとする人々が出來るやうに人情の科學、それは邉に開拓さるべき科學の新生面だと思ひます。』と云つてゐる。精神分析と云ふものがあるのに今ごろ何をお云ひです？

資料

夢の分析實例鈔

高水力太郎

一、高橋藏相の夢

昨年六月中、岡本一平が『對面し直す』の題下に、政界諸名家歷訪の記事を漫畫入りで朝日新聞に連載した事があつた。その時、高橋藏相の夢の話が出てゐた。

『さう〱、たしか去年のおひなさまの晩だつたよ。夢を見たんだよ。ほら穴に粗末な衣を着た坊さんが修業してゐたのだがね。大きな蛇が來て坊さんをのんでしまつたんだよ。その蛇が池の中へ飛込んでね、今度頭を出すとその坊さんを吐き出したのさ。そのとき坊さんの衣は立派な衣になつてゐたんだ。わしは翌朝考へたよ、これはい〻夢を見たとね。この夢はたぶんわしが慾から離れた證據なのだらうと思つてさ。』



それに對して岡本一平は『私の考へでは、巨人型の人は總ての分量が多いから、それを退治るとなると普通人よりも骨が折れるだらうと思ひますよ。』と答へてゐる。こゝに一つの夢があつて、それに對して二つの解釋――藏相の自己分析と一平の漫畫的解釋と――が與へられてゐる。私はそこで、更に分析學からの解釋をこれに加へて、漸次に二人の素人分析家の解釋への批評を試みて見よう。

　併し夢の分析には自由聯想が必要である。聯想をとら

ざる分析は探海具なくして海底を測るやうなものである憶測的にならざるを得ないが、併し夢が非常に典型的な象徵で出來上つてゐる場合には大體の判定を下すことが出來ないでもない。さて、この藏相の夢の如きが、その典型的なもの丶一つである。

　まづ、おひな樣の晩であつたことが注意される。かう云ふ祭りは非常に人心を幼兒的に退行せしめる機會となるのである。次に洞窟の中に坊さんがゐると云ふのは、明かに胎內空想である。そこへ蛇が來て呑んでしまつたと云ふのは、既に胎內に復歸してゐるものをまた別の形の胎內に入れたことを意味し、胎內空想の『過度決定』である。蛇に呑まれてその腹を切つてまた出て來ると云ふ傳說は隨分澤山にあることで、明かに再生の象徵である。蛇が『恐ろしき母』の象徵であることは、本誌前號（四六頁）の松居桃多郎氏の分析に依つても、知られる。『英雄は西方に於ける水魔に呑まれる。魔物は彼を東方へ連れて行く。……そこで彼は腹中から腹を切り開いて滑り出る』と、フロベニウスの方式と云ふを松居氏は紹

介してゐる。その通りである。この方式に於いて西方の水魔とは西方の海であ。る西方十萬億土の海は日毎に英雄(太陽)を呑み、それを『東方』に連れて行つて再生(日の出)せしめる。吞吐すると云ふ考へ方をする以上は、何か巨大な水魔、水中にゐる怪物、大蛇と云ふ觀念となつて發展して行つたものであらう。この民族傳統的な觀念が、そのまゝ藏相の夢に出てゐることは面白い。藏相の夢に於いて、蛇が坊さんを呑み込んでから水中へ飛込んだとなつてゐるが、蛇と水とは元々同じものが二つに別れてゐたのである。『今度、頭を出すと、その坊さんを吐き出した。』即ち再生したのである。そこで、前には粗末であつた坊さんの衣裳が今度は立派になつてゐる。再生して英雄になつたことを意味してゐる。英雄は常に生れ更ることに依つて出來するとは、世界の傳說に普遍的な特徵である。

そこで第一の素人夢判斷者は、これを吉夢と斷じた。『たぶんわしが慾を離れた證據』と解釋したのである。遺憾ながら、この判斷者は素人であるだけに、解釋の根據を提示することが出來ない。たゞさう直觀してゐるだけである。併しこの直觀は正しいか正しくないか。慾を離れたとは、分析術語を以てすれば、『自我が現實觀照の眼を無意識(エス)のために曇らされないこと』を意味するのであらうと思ふ。そのやうな透徹した觀照能力は、夢の主人公の僧形に於いて表現せられてゐる。この僧が太陽の如く西海に沒して、東海に再生したときは、優秀な英雄(聖僧)――『立派な衣』と云ふ影像に依つて表現されてゐる――となつてゐる。藏相は珍らしい夢を見たと思つてゐるだらうが、この夢は人々の昔ながらの夢に、民話に、傳說に、繪畫に、いくらでも用ゐてある象徵を採用しての典型的な夢である。さうして、藏相のこの自己分析は慥に或る程度まで正しいことを私もまたこゝに保證することが出來る。

ところで、第二の素人分析者の解釋はどうか。彼が、まづ夢の本人と夢の主人公とを同一人物と見立てゝ(畫に描いて)ゐるのは正しい。この夢中戲曲の主人公は、普通の舞台戲曲の主人公がさうであるやうに、作者その

人か、またはその分身である。彼は藝術家の直觀力を以てこれを正しく認識した。ところで、『巨人型の人（この場合、僧、即ち藏相）は、總ての分量（人格、財產、名譽）が多いから、それを退治る（呑むと云ふ形で現れてゐる）となると、普通人よりも骨が折れる（即ち呑まないで吐出した）』と。

この別の解釋を聽いた藏相は『なるほどさう云ふものかね』と云つてゐるが、この解釋が分つたのか、分らないのか、讀者には判然しない。この第二の素人分析者の判斷は、たしかに狡猾である。『貴方は偉い人だから、なか〳〵退治られませんよ』と云ふお世辭にも聽こえるし、また『さう云ふ夢を見て、自分を英雄に仕立てゝいゝ氣持になつてゐるとは、隨分自惚が強いですね』と云ふ反語にも解せられる。

ところで筆者は第三者として、この二種の解釋への公平なる判定を下さねばならない。筆者は第二の分析者よりも更に一層狡猾だと云はれるかも知れないが、これ等兩方の解釋が正しいと思ふ。藏相は慥にこの夢に於いて自己淨化を行つた。と同時に、これに依つて獨尊慾（ナルチスムス）を滿足させた。非常に傲慢な感情と、非常に謙虚な感情とを一つの夢で同時に滿足させてゐる。一鳥二石と云ふことは現實では稀有であるが、夢に於いては普通である。

二、嫉妬の夢

次の夢とその分析は、讀者某氏から、筆者の手許へ送つて來たものである。相當よく分析してあるから、そのまゝ載せて見る。

夢　某地方郵便局で椅子に掛けて、T君は辨當をたべながら自分と對話してゐる夢。

『T君の細君は寢てゐるの？　G工場から歸つてづつと？』『さうです。』――『女つてうまいもんやなア。』――『そんなら女に生れて來てやつたら良かつたのに。』――（昭和八年六月一日夢）

聯想　T君の細君は、G會社の敎婦として働く、職業婦人である。幾何かの給料をもらつてゐるが、彼女の給料は全部貯金するらしいといふことを聞いてゐる。彼女は朝早くから夕べまで一生懸命に働く婦人である。それに引きかへて小生の家内はいつも自分より早く寢るし、目のあくのもおそい。職業婦人ではない。小生は職業婦人になつてほしいと思ふ。それ

で只でもよいから辨當持ちで農家へ働らきに行けといふことがある。けれども働きには行かない。そんな事をするのなら小生の郷の百姓を手傳ひにかへるいふ。T君の細君の金をもうけることとゝ、小生の家内の悠々とした日常とは何れも、女といふものはうまいものだと常々自分に思はせてゐる。

分析――T君の細君は四月から會社を止めて家へかへると聞いてゐたので、小生は『もう止めて家に居るのですか』と訊いた。それに對して『いゝえ、まだやめてゐません』との答へであつたので、更に『まだ勤めておいでですか』と重ねて尋ねて、『さうです』との答へを得たのであつた。

T君の細君はまだ職業に就いて金もうけをしてゐる。早く止めて、小生の家内の樣に家に居れば、小生のと同樣に金もうけをしないから、彼は澤山の貯金もせず小生と同じ樣に貧しく暮して行けるのだが。早くやめさせたら、（との小生の心。）自分の家内とT君の細君と比較して、小生は彼女が金を儲けるのを嫉んでゐるのである。（小生の家内も彼女と同じであれば、この夢はないかも知れん。）

× × ×

別の聯想 數日前に今度G會社から米國の博覽會へ派遣される工女の記事が新聞に出てゐるのを讀んだ。デップリ肥つたよい体格の婦人である。出勤してT君に工手室で食事してゐる時にその話をした。そしたら『僕の家内と同期生でまだ獨身でゐる』といつた。なる程、新聞にも今度渡米するので、緣談が急に多くなつたとあつた。生れは岐阜縣だと云ふ。小生は岐阜縣の女と交際したことがある。その交際した女はあまり性質がよくないらしいので、この女も亦そんなには女らしくないなと想像する。（これは嫉妬心が手傳つてゐる。）『吾々が平常考へると、女の博士とか學者とかは家庭的にあまり良くない樣だ。』――『そか知らんけれども、今度渡米するのは品行、体格、技倆等に就いて十分銓衡してゐますからそんなに惡いものではない。』とT君は云ふ。T君には僕の言つてゐることがわからぬのかと小生は思つた。卽ち學術研究に沒頭してゐる婦人がどうして家庭に關することが十分出來樣か、と思つてゐる。貧乏人の家庭に生れたのだらうが、どうせ工女になる樣なものは金滿家の娘でも上流社會の家庭の女でもないのに……。『會社に入つてゐる御蔭で洋行出來るのだが、女つてうまいもんだな――』と小生。『そんなら女に生れて來てやつたらよかつたのに』とT君が言ふだらうかと思つてゐたが言はなかつた。（夢で言つてゐる。）

夢の前日の晩、寫眞館の前で大きく引きのばした、彼女の洋裝の姿をながめた。太いデップリ肥つた肉体、手袋をはめて帽子をかぶつて、細い目を流しめにしてゐるところは、どう

もいやしい、まだ垢がぬけ切らぬ様に思はれた。五人程一緒に寫してゐるのも奥の室の額にある。

分析――夢は小生の嫉妬心からである様に思はれる。職業婦人で金をもうけて呉れる体格の良い女がほしいと云ふ願望である。（O 生）

× × ×

何故、この嫉妬が、この夢の如き形態をとるに至つたかの註釋が足りないやうである。このやうな現實を、このやうな空想に變へ（T君の健康な妻君を夢の中で病人にして了つてゐること）てしまつてゐるところに、願望の充足を見ることが出來るやうである。

三、自己懲罰の夢

夢の本人は四十歳の關西出身の美術家。昨年十二月十三日夜の夢。

夢――自分と妻とは、すましのお汁の雜煮を喰べてゐた。自分達の前にゐる男（その何人なるかを知らず、併し自分等よりは身分の低いものであつたやうだ）は味噌汁の雜煮に花かつを少しふりかけて喰べてゐた。それが如何にも上品に美味らしく見えた。自分等は自分の趣味の低いことを、その男に對していさゝか恥づる心持がした。

聯想――寢る前に妻と餅搗の話をしてゐた。その時、妻は關西の餅は圓くなつてゐるので、神棚から下して來たものを喰つてゐるやうな感じがすると云つた。自分もさうだなアと相槌を打つた。さう云ふ自分の云ひ方に、關西的なものゝ一切に對する輕蔑が含まれてゐた。自分はそれに相槌を打つたことに一種の後悔と良心の咎めとを仄かに感じてゐた。自分はそれについて、近頃時々ラヂオで關西から講演や童話劇の中繼放送に關西辯を聞き、それを妻と一緒になつて嘲笑する自分の多少のうしろめたさを想起する。自分は十才の時上京しても一二年も關西辯で押通してゐたほど保守的な男である。

分析――この感情がこの夢を本人に見させた事までは、私にも確信出來るが、さてそれが彼の無意識にとつてどう云ふ意味になるか、十分に明かでないが、多分自己懲罰の意味であらうと思はれる。即ち、自分は下男よりも趣味の低い、道徳的感情の鈍い男であると云ふ。…（完）

雞血の滴る如し

――夢から出たまこと――

田内長太郎

三、四日以前の暑さのきびしい日の午後、探偵小說家田中早苗氏と碁を打つてゐた時のことである。どうしたはづみであつたか、私の頭に、「雞血の如し」といふ語句がふいとうかんで來た。全くそれはどうしたはづみであつたのか、今でも私にわからぬが、しかしその語句そのものは、當時たしかに私の頭のなかで、あらはれたり消えたりしてゐたものである。

「雞血の如し」とは、あかい色を形容した語句であつた私には、最近何かの記事の中で、支那人がさういふ形容句を吐いてゐるといふのを讀んだ記憶があつた。しかもその語句の妙味を私自身で實感してゐたばかりだつたのである。

これも暑い日の、午後であつた。不意に叫ばれたけたたましい雞の悲鳴に、私はうちを馳け出して行つてみると、隣の畑の横の道に、雞の羽毛が散亂して、そこにちよん切られた牝雞の首だけが、白い目をして轉がつてゐた。それの胴體は何處にも見えなかつた。しかし、その胴體は見えなくとも、またその首の相貌はすでに變りはてゝゐたとは言へ、それは私のうちに飼つてゐた、そして私のこの上もなく目をかけてゐた、卵を生み盛りのごまの牝雞にちがひなかつたのである。

それが犬の所業であるといふことは、私にもすぐわかつた、なほその犬が近所の或家の飼犬で、をりからたま〳〵雞舍からただ一羽まぐれ出して、そこの畑の中で餌をあさつてゐた私の愛雞へ、突然襲ひかゝつて、その咽喉笛へ嚙みついて、首をちよん切ると、胴體の方をくえて何處かへ運んで行つたといふことも、その出來事を目擊した人達から話された。だが、そんなことはこの際ど

うだつていゝ。

さうして、その牝雞のいたましい首のちよん切られ口から、どろりと黒い地面に流れ出してゐた血が、炎天の下で、鮮かな緋色に光つてゐるのを見て、私は、これはきれいだと思つた、なるほど、雞血の如し！ 支那人はうまいことを言ふなあと、その時ひどく感心したものである。

田中早苗氏と碁を打つてゐて、ふいと私の頭にうかんで來たのは、その「雞血の如し」であつた。ところが、さきにその語句の妙味に感心した場合には格別それが問題ともならなかつたやうだが、その語句を引用してあつた記事が私には思出せない。一體、それは何の記事の中に出てゐたものだつたか。確に最近讀んだものである。はて、何に出てゐたかしら？ 私の頭はそれを思出さうと、勝負最中に、しきりに操作しだした。が、どうしても思出せない。かうなると、私は性分として、いよ〱それを思出さなければ氣がすまないのだ。と言つて、いくら考へても考へてもそれが思出せない、それをまた強ひて思出さうとあせるので、かういふ場合の私の癖でこれは激しい焦慮の念が肉體に及ぼす變化と謂へようが、かう下腹部の筋肉がよぢれる感じがして、性器に一種の刺戟が與へられ——私の友人の中にはかういふ場合青年時代によく射精したといふ男があるが、私はそこまでは行かぬ——身體が宙に浮く、謂はば「身の置きどころない」思ひを身體全體が表現するといふ感じに、私は襲はれて來た。こりや、いかん、この狀態がつづいたら頭が變になる——と、私は一方その自分の記憶力の弱さに情けなさを覺えながらも、背に腹はかへられぬ氣持で、その頭の操作をひとまづうち切らうとした。「雞血の如し」が何の記事の中に出てゐたか、これはもう自然の想起を待たう。いや、こんなことを思出さうが、出すまいが、もと〱大したことぢやないぢやないか、何だ、くだらん！とも思ふ。が、さう思ふ下から、——しかしこれしきのことが思出せないなんて！いや、もう少しのところだ、我漫しろ、と、また頭が働きだす。……そんな言譯をせずにも、勝手に働き

だす……。

もはや私は碁どころではなく、ぢつと打手（うちて）を考へるやうな顔つきをよそほつては、さうした狀態の頭の始末に困つてゐた。たうとう堪へられなくなつて、全くつかんことを、しかし何氣ない風で、相手の田中氏に質問したのである――

「田中さん、あんたは學者だが、あかい色を形容した語句に、『雞血の如し』とかいふのがあるんですね、その出所を知りませんか。支那の書物に出てゐるさうですが。」

さう私が聞いたのは、せめてその語句の本來の出所でも知れば、それが問題の私の最近讀んだ或記事を思出すよすがにもならうかと考へたからでもあつたが、むしろさうしてその時の私の頭の惱みに多少なり觸れた問題をそこへ持出すことによつて、當面の私の氣持の轉換を計らうとしたといふのが、その主な理由のやうであつた。

それをもつと端的に言へば、その際私は頭の苦しさから逃れるべく、その原因となつてゐるものに關して何かしら言表せずにはゐられなかつたのだ。

その證據には、さうした私の頭の中の騷動などは夢にも知らない田中氏が、盤面にのみ氣をとられて、右の私の質問には、ただ、「さうね、そんな語句があつたね、何といふ書物に出てゐたかね――」と、うはの空の返答をするのへ、私は、しつこく、過日犬に首を嚙み切られた雞の話を引合に出して、その「雞血の如し」なる語句が、如何に實感にもとづいたものであるかをべら〳〵說明したものである。田中氏はそれを「ふん、ふん、」と聞いてくれた。だが、さすがに私も、「實は今その語句をふと思出したが、何の記事でそれを讀んだか忘れてしまつたので一生懸命で考へ中だ」とまでは言はなかつた。それは何よりも、自分のその頭の、どうもアブノーマルらしい働き具合を暴露するのが恐しかつたからである。「雞血の如し」に關する田中氏との話は、それきりになつた。

それからこの二三日間、私は、時々、「はて、『雞血の如し』は何處に出てゐた語句だつたかなあ、とにかく最近讀んで感心したものにちがひないから、それも最近讀

んだ書物はさうたんとはないんだから、その記事は憶えてゐなくちやならないはずだが、なあ――」と考へてみたけれども、何としても思出せない。しかしそれを餘り追窮すると、また頭の具合が變になるにきまつてゐたので、私はいゝ加減のところでその考を封じてゐた。

それが今日である、午睡の夢の中で、天の一方に一個の巨大な星が、實物の如何なる星よりも數等輝いて、まるで花火のマグネシュームをたいてゐるかのやうに、青白色の光をはなつてゐる樣を見て、私は、「あッ！『雞血の如し』はあれだ、あの『星の話』の中に出てゐたのだ！」と、不意に想起したのである。

（その『星の話』とは、果して私が最近讀んでゐたもので、雜誌『新青年』九月號所載の野尻抱影氏の『北極星も動く』と題する記事であつた、その記事の中に、或星の異常に紅いのを形容して、支那の天文書では『雞血の滴る如き星』と謂つてゐるといふ意味のことが述べられてあつたのだ、つまり私がそれまで『雞血の如し』と記憶してゐたのは、詳しく言へばその『雞血の滴る如き』だつたのである。）

私はその午睡の夢からさめて、奇異な感にうたれた。これこそ、もしも「夢中に悟る」といふ事實があるとすれば、正にそれに庶い現象だと思つた、全くそれは「夢の中で悟つた」のであつて、目ざめてから、その夢から思ひついた氣がしなかつたからである。もつとも、さうして、「あッ！『雞血の如し』はあれだ、あの『星の話』の中に出てゐたのだ！」と、それを想起するや否や、その夢はやぶれ、同時に自分が目ざめたのも事實のやうである。

最後に、これは蛇足かも知れぬが、自分がその午睡をする前に讀んでゐたのが、イギリスの或通俗小說で、それを讀みさして自分は眠りに陷ちたのであるが、この作品がまた或奇怪な夢を題材にとつたものだつたのだ。

（附記）右の『夢中に悟る』については、なほ後から、私はいろ〳〵考へてみた。とにかく、一件を相起した時に、それがまだ夢の中のことであつたか、あるひは、すでに醒覺後のことであつたか、私はしきりに、『これは夢の中で悟つたぞ！これは夢の中で悟つたぞ！』と、心の中で連呼したものである。しかし、その境の明確な回想は、誰にだつて、容易にできるものではないと思ふ。で、ひよつとしたら、私のその想起も、目ざめた瞬間に、その夢から思ひついたものではなか

つたかといふ一抹の疑念が殘る。それにしたところで、よしんば私のその想起が、覺醒後その夢から思ひついたものだつたと大割引するにしても、さうして夢の中の出來事（こゝでは輝いた星が出現したこと）から、現實世界への貴重なヒントを得るといふことは、さうざらにある事ではないと思ふ。その稀有な、多くの人が人からの話によつてのみ知つてゐるやうな現象を、さうして實地に經驗し得た自分はなか〳〵難有く思ふ者である。併し何故にこれがく忘却されてゐたかと云ふ問題がまだ殘つてゐるのだ。分析はそこから始まる。

——昭和五年八月十四日の手記による——

ヰリアム・モリスの『夢』

大槻憲二

『夢』"A Dream"は、英國の詩人ヰリアム・モリス William Morris（1834-1896）の初期（一八五六年）の作で、當時詩人は廿四歳。ヴィクトーリア朝期の諸大家の影響を未だ脫せず、如何にも若々しいロマンティックなものであるが、彼の一生の作品につきまとつてゐる死の恐怖、愛卽ち死の特異な思想は、既に歷然と表現せられてゐる。これを文藝作品として鑑賞する傍、これを心理過程として科學的硏究の對象とすることも、可能であると共に必要である。これを一つの顯在的な夢として見ると、第二次仕上げの完全に行屆いた、整然たる夢であるが、なほ轉位、凝縮などの夢の特徵はよく保存せられてゐる。詩人は"I dreamed once, that……"と云ふ書き出しで、これが夢であることを始めから斷つて書いてゐる。次の文は譯ではなく、詳しい筋書である。

寒風吹き荒ぶ或る冬の夜、とある家で四人の男が爐を圍んで話し合つてゐた。一番年かさの白髯のヒウ Hugh 老人が語り出した。

あの川の中に瀨つて瀧津瀨をなしてゐる大きな赤い砂岩は、元は懸崖のやうに河の上に突出てゐてその下に洞穴があつたが、その岩が自分の少年の時分に河の中に陷込んで、今日のやうになつてしまつた。その岩と洞穴に就いてはさま〴〵な不思議な物語が傳へられ、自分も父からそれを話して貰つたが、『それ等を私は一つも記憶してゐない。併しどうしてだか、自分の心の中に或る話

が育つて來た。で、それを話さう。併しそれは私が何人からも聞いた話ではないのだが、何時頃から知つてゐるのか自分にも分らぬ。さうぢや、その話を少ししよう。併し自分に出來るだけは話すが、多分すつかり話すわけには行くまい。』

お前さん方も知つてゐる、あの妙な家、菩提樹と一位の樹が門塔から玄關まで、前に二列に立並んでゐる家、何となく鬼氣迫るので今は何人も住まうとはせぬあの家に、昔、領主である一老人が住んでゐた。その家には老人の他に、その一人娘である美しいエルラ Ella と、遠緣に當る若い騎士ローレンス Lawrence とが住んでゐた。二人は定石通りに愛し合ひ、許婚の間柄にあつたが、或る時、戰爭が勃發して騎士は出征しなければならぬことゝなつた。ローレンスは美しい愛人を遺して戰爭に行かねばならぬと云ふので、いさゝか内心憂鬱であつたが、愛人の前では『御身も知る通り、私は死を恐るゝものではないが……』などゝ虚勢を張つて見せる。エルラは女の敏感さを以てローレンスの本心を直觀し、貴方は本當は少し臆病なやうだから、あの河邊の洞穴へ行つて今夜一晩寢てゐらつしやい。もし明日歸らなければ私が迎へに行くと云ふ。ローレンスは已むなく恐ろしい洞窟へ這入ることを誓ふと、今度はエルラの方が氣の毒になつていろ〳〵と慰める。やがてローレンスは武裝を整へ敢然として出掛けるが、明日になつても歸つては來ない。エルラは約束通り、その洞窟へと迎へに行くが、エルラも遂に歸つては來なかつた。彼等は互に愛し合つてゐたのだが、もうそれきり逢ふ機會はなかつた。

ヒウ老人がさう語り終ると、丁度眞向ふに座してゐたガイルズ Gilles が承知をしなかつた。いや、そんな筈はない。私は慥にそんな事ではなかつたと思ふ。みんな話してくれと叫ぶ。そこで老人はまたその續きを思ひ起して云ふ。或る十月の非常に霧の深い日の眞晝であつた。街にはペスト患者が充滿してゐたので、病院の寢臺から寢臺へと私は藥を持つて見舞つた。ところが、私と同じやうなことをしてゐる一聖女があつた。その顏色は蒼白で美女ではなかつたが、私は何となく見ずにはゐられな

かつた。何故ならば、その眼が美しかつたから。そのやうにして病院を歩いてゐる内に、私はとある寢臺の前に來た。そこに寢てゐる患者は疫病に倒れてゐるのではなく、盜賊のために劍で身體をつき刺され、も少しで死ぬところであつたのだ。と、そこへ先程のあまり美しからぬ看護の聖女が來たが、その女が忽ち驚くほどの美しい女と變り、全身に白衣を纏ひ金髮は長くその背後に垂れてゐる。何かと世話を始めると、その患者も既に頑丈な男ではなく、まだ初春の若々しい美青年となつてゐた。二人は物靜かに語り合つてゐた。「身も魂もまた一緒になつたね、エルラ。かうしてまだどれくらゐ居られるのだらう。」「長く居られます。併し時は過ぎ行くから、もう話さないで考へてだけ居りませう。私たちの身は愛を昔の愛よりはよいものに變へます。」それから百を數へるほどの間、二人は沈默してゐたが、やがて「末長く御機嫌よう」、「エルラ」、「御機嫌よう」と云ひ交した。その内太陽は沈んで、總ては元のやうであつた。

　私はなほも寢臺の裾のところに突立つて考へ込んでゐた。その内看護婦が來て、「先生只今はそんなに夢想してゐられる時では御座いません。患者たちが待ちかねてゐます。」と云ふ。自分は騎士の患者のところへ行つて慰め、夜遲くまで患者たちの世話をして後、海邊へ出て考へ事をしながら固い砂の上をあちこちと散歩した。と、海を超えて來る物音がするので、何事かと振返つて見ると、それは西風であつた。西風は波頭から波頭へと喜ばしげに跳び廻つてゐた。併し二人の愛人を見てから私の生活は一變した。が、それは隨分以前の事で何時であつたか判然覺えてゐない。

　老人はそのまゝ默つて了つたので、やがてガイルズが語を繼いだ。私はあの時、都の近くのある園で一人ぼつちで遊んでゐた。何故ならば、その日は我々の國を救ふた或る勇士に美しい女王が、國の姫が、花冠を戴かせ、腰に帶劍せしめると云ふ日であつたから…。私は楡の樹下に一人まどろんでゐたら、楡の梢に音がしたので振返つて見ると、百合の小徑の方から何者かゞ來る。私はそれを見て心臟の鼓動の止まる思ひがした。それは以前に

よく夢の中で見た人間であるが、今覺醒中に見たので心臓の冷える思ひがしたのだ。その一人は騎士らしく悲しげな面持をしてゐる。その傍には白衣の美少女が從つてゐるが、その兩腕は、彼女の速かに併し柔かに歩くにつれて風に吹き流されたやうに、ふわ〳〵としてゐる。彼等は悲しげであつたが、非常に落着いてゐた。

　彼等は私の側まで來ると、立止まつて「私たちは今度會つたのが最後で、これから總てが終りになるのですから、この人を證人に連れて行きませう」と云ふ。私は如何なる音樂も彼女のこの聲よりも美しいと思つたことはなかつた。「どうして最後なのか」と騎士は答へた。「まだ〳〵時は殘つてゐるではないか。老人が昨夜、象牙の家へ來て幸福な終りが來るまでに百年の時日があると云つた。」――「そんなに永く？ 併し言葉が何でありませう。これが最後であります。」――「象牙の家は寒くて殆ど泣きたくなるやうだ。エルラよ、象牙の家には白い象牙より外に何の色もないのだ。私をあそこへやつたのは、エルラよ、お前として上出來ではなかつたぞ。」――「そんなに寒いのですか？ それは知りませんでした。許して下さい。ところで證人の事ですが、是非一人要るのです。この人はどうでせう？」――「この人よりはヒウ老人の方がよくはないか。或はその父親のカスバートCuthbertでもよい。二人とも前に證人になつてくれた。」――「カスバートは廿年も前に死んでをります。」――「ぢやア、この人にしておかう。」さう云つて、彼等は動き出したので、私も彼等に跟いて行かざるを得なかつた。ところが、私は自分が何となく別物になつたやうな氣がした。何故ならば、太陽は高かつたが、自分の影は落ちなかつたから……。人々も、自分たちが河邊の山の方へ行くのを氣付かなかつた。

　山へ行つて見ると、女王が山上の玉座に坐つてをり、周圍には騎士が大勢立並んでゐる。その時、さきの二人が自分を離れるのを感じたが、それと共に自分の身體も元に復して人から見えるやうになつた。それでも何となく奇妙で、十分にこの地上の者でないやうな氣がしてゐた。その時、或る者が仲間の者に低聲で語るのが自分に

聞えた。「御覽、ガイルズがとう〳〵來たよ。併しあれほどよく戰つた彼がどうしてあちらの高貴な騎士たちと一緒に武裝して來なかつたであらう？」と。他の者がそれに答へた。「彼は兄弟を亡くして心亂れてゐるのだ。まアほうつておきなさい。それより御覽、そこへ我々の救主である高貴の見知らぬ騎士が來た。」と。その時、喇叭の音が響き亙つて、同時に一列に徒歩の騎士たちが山を、玉座に向つて進んで來た。他の騎士たちは立派な甲冑を着てゐたが、その騎士だけは戰ひのために甲はなく冑も破れはてゝゐた。玉座二十歩のところで他の騎士たちは立停り、件の騎士だけが玉座に近く進寄り跪いた。女王は跪くに及ばぬとそれを制し、黄金の把手ある劍を與へ、白百合の花冠を頭上に載せた。さうして彼を抱きかゝえたと思ふと、それは女王と見知らぬ騎士とではなくて、私が都の外の園の中で出會つたあの若い騎士と少女とであつた。群集の歡呼する中に低い歌聲が聽えた。「あゝ誠に誠に、わが最も高貴なる御身！　これより以後は百年も永からじ！」と。——靜かに、いとしいエルラよ、話をすれば時は過ぎ行く。たゞ思へ。」

彼等は互に抱き合つてゐたが、やがて手に手をとつて山を下るのを見ると、それはさきの見知らぬ騎士と女王とであつた。

「それは古い〳〵昔の事であつた」と、ガイルズは云つて口を噤むだ。と、若い二人の内の一人なるオスリックOsricは、これまで恐ろしさうに默つて聽いてゐたが、ガイルズの視線を避けるやうにして呟く如く尋ねた。「どれくらゐ前の事？」——「百年以上も前の事だ」とガイルズは答へた。

かくて彼等は暫く沈默の內に强烈な西南風が窓の戸をがた〳〵鳴らせるのを聽いてゐたが、その時急に家の戸をホト〳〵と叩く音が聞こえて來た。ヒウの相圖に若いオスリックが慄えながら立つて行つて見ると、風と共にさつと彼の顏を撫ぜたものがあつた。と見ると、そこに白衣の美女が立つてゐて、その頭上からは面紗が掛り、それが風に靡いてオスリックの顏を撫ぜたのであつた。旅の美女はかう嘆願した。「私に一時間ばかりこゝで休

ませて下さい。」彼女が這入つて來て一同に丁寧に會釋した時に、彼等四人は何となくぞつとした。美女は言葉を續けた。「近頃、磨いた鐵甲を被つた、暗碧の眼をした、額の廣い、若い、美しい人がこの邊へ參りませんでしたでせうか」と。四人が無言のまゝで頭を振つて見せると、彼女は如何にも絶望したらしい風で、かうつぶやいた。「では、私は直ぐにも出掛けなくちや。だが、今日はもう最終の夜だのに……。」と云つて立去らうとして家の主に會釋しようとした時、彼等は恐ろしいには恐しかつたが、でも彼女に立去られることは何となく物足りなかつた。

その時風は強さをいやましたが、忽ち風の間にかすかにまたホト〳〵と扉を叩く音を聽いた。美女はその時フト最年少のヘルマン Herman の顏を見たので、ヘルマンは戸口へと立つて行つた、そこに何者かゞ立つてゐて、こゝへ金髮白衣の女が訪れては來なかつたかと尋ねた。ヘルマンは無言のまゝに低頭してゐると、立派な冑を身につけた男が靜かに家の中へ這入つて來た。

美女と騎士とは暫く向き合つたまゝ立停つてゐた。あだかも百年の間、別れてゐて、突然の邂逅に互にやゝ面はゆつかの如くであつた。やがて騎士は一歩を踏出し、甲をとつて靜かに傍へに置き、兩腕を擴げると、美女はその腕の中に身を投げ入れ、その顏を男の肩に埋めた。四人は恐怖に打たれながらそれを打眺めてゐた。

その時、教會の鐘は鳴響いて、新年の夜明けを告げたが、彼等二人はなほ離れようとしなかつた。鐘は鳴り續いて、舊年は逝つた。やがて四人の目前で、二人の愛人たちは崩折れ消え失せて一團の灰と化して了つた。四人は脆座して禮拜し、翌日、僧の許に行つて一切の成行を告げた。人々はその灰をとり、教會の大理石の墓穴の中に埋め、その上に二人の像を刻み、その側面に赤い崖の下の洞穴の物語を刻みつけた。かくて私は夢の中に月光の墓石を照らすを見、やがて妙なる樂音の起り、深まり消え行くのを聽いて、程なく私は眼をさました。

思想の金鑛に底深く仄見ゆる
かくれたる鑛石をとり上ぐるに

如何なる記憶も遂にわが眠りにはしかず。
眠りこそは、耳に聽こえ眼に見ゆる
すべてを、細大ともに洩すことなし。

＊　＊

第一に、こゝには夢中夢がある。夢中の夢と夢中の現實とが互に交流し合つてゐる。第二に別々の人間の別々の夢に聯絡がある。これ夢を中の四人物が各々夢の本人（詩人）の分身であることを證明してゐる。第三に夢の超時間性が明白に出てゐる。ヒウが何時覺えたか分らないほど以前の事だと云つて話したことが、まだ若いガイルズの經驗中に出て來る。而もその時、百年の後を奮つた騎士と少女とは旣にガイルズの面前で邂逅してゐる。第四に、女王と騎士とエルラとローレンスと、などの相互凝縮や分裂が、盛んに現れてゐる。文藝作品として見ると、一種の無氣味な神秘的な美しさと、愛卽死の喜びと悲しさが描かれてゐる。愛卽死の思想は彼の全作品に行亘つてゐる。現に彼は詩劇『戀だにあらば』（三十七歲當時の作）の中で、女主人公アゼレイスをして『死と數ひにまで眼覺めさせるやうに接吻せよ』と云はせてゐる。頗る神秘的な言葉であるが、精神分析的に觀察すると、この言葉の意味は制然と了解される。最後に加へられてゐる詩は、夢が記憶よりも心の深みを傳へるものだとの結論を與へたもので、これは今日の科學的研究の結果と全く一致する見解である。（完）

精神分析語彙（二）

一、アバシア——步行不能
一、アブリア——意志薄弱
一、アブレアクチオン——無意識に定着してゐるものを分析法にて意識化し行動化することに依つて、解除し發散させること
一、アルゴラニア——苦痛を與へ（能動）、又は苦痛を受ける（受動）ことに依つて性的に亢奮を感ずる事
一、アムビヴレンツ——同一人に對して同時に愛憎二元の感情を持つこと。『相反併存感情』とでも譯すべきか。例へば幼兒の父親に對するエディポス關係の如きがそれである。
一、アムネシア——所謂度忘れ。平常は覺えてゐるのだが、或る期間又は事件の間それを忘れてゐる事
一、アフォニア——失語症
一、アフロニア——實行的判斷力喪失
一、アウティスティッシュ——これはブロイラーの造語でフロイドのナルチスティッシュと同じやうな槪念である。現實的、學問的な考へ方に對照し、全く自分の願望に支配された沒批判的な考へ方
一、洗ひ流し法——『カタルシス』に同じ
一、イディオガミ——或る型の女に對してのみ性交可能なること

講座

抑壓と無意識

長崎文治

精神分析學は本來科學であるから、その研究範圍と方法とに就いての最前提として一つの假説――心理決定論 Psychic detrminism と呼ばれる假説――を立てる。此れはつまり、因果の法則は、物質界を支配してゐると同樣に、精神界をも支配してゐると云ふ事である。

精神内の事柄に就いて、内省 Introspect して見ても適切な原因の發見されない場合には、そこに無意識的な心的要素が働いてゐるのだと假定される。此の假説こそは理論的に自由聯想法を是認するものであると共に、實驗的には、此の方法に依つて逐次證明されて來たものである。一體、此の自由聯想法とは、實は思想の系列が意識的に統制せられなくなつた場合には、無意識的要素が之れに代つて統制し、且つ意識的な觀念や感情となつて現れ出て來るとの信念に基いてゐるのである。

斯くして、精神の本質に就いての精神分析的概念の中最も一般的で、且つ根本的なものとして、無意識 Unconscious と云ふ概念を吾々は持つやうになる。勿論、之の概念は、精神分析學の唱導される以前から存在してゐて哲學者や心理學者の間にお馴染みのものであつた。併し乍ら、フロイドの用ひてゐる無意識と云ふ概念は、彼以前の其れ等學者の考へとは稍々趣きを異にして居り、殊にその細部の適用に至つては、フロイドの方が遙かに勝れてゐる。彼以前の諸學者は認識の研究からして無意識の概念に到達し、無意識を思想や知覺、殊に記憶作用の説明に不可缺のものと考へてゐた。これらの精神現象研究家達が、必要と感じてゐた此の無意識の概念は、十九世紀の後半に勃興して來た催眠術、並びに精神療法の研

究の結果、一層明瞭にして、當然なものとなつて來た。此の研究に依つて精神が二つ乃至それ以上の、相互に何等關係のない部分に分割する、所謂精神分裂の現象が病理學的な場合に屢々起る事が證明された。その精神分裂は、或場合には「人格分裂」Dissociated personalities となることもあるが、又他の場合には分裂する要素が二三の單獨な感覺や記憶に限られてゐることもある。このやうな精神分裂の動機をジャネー Janet（此の方面の研究を完成せしめ、フロイド以後に於ける、現代の精神病理學界の第一人者との定評ある人）は『緊張』Tension とか、或は統合力の不足とかに歸して說明した。即ち、精神の種々な部分の總てを統合せしめるに必要なエネルギーが減退したと云ふ風に說明したのである。併しフロイドは、此の分裂現象を、或る一般的な勢力の缺乏とは考へないで、寧ろ分裂した精神間の或る特殊な抵抗作用、或は對立と考へる。フロイドは精神の本質を動的なものに考へて居り、精神の實際の機能を努力とか意慾（一般的に受容されてゐる心理學的用語を用ふれば）に認める。そして精神內の撞着は、矛盾し反對する心內の二三の傾向或は『願望』Wishes 間の軋轢（コンフリクト）として最もよく說明出來ると考へる。斯くして、精神分析學の發達以前に一般的に說かれてゐた、主として知性的な概念は、動的な概念に變つたのである。此の點に於て（又其他の點に於て）フロイドは當時の心理學の先驅者の直接繼承者と云ふよりは、ショウペンハウエル Schopenhauer やハルトマン Hartmann のやうな偉大な悲觀論的（ペシミスティック）哲學者の科學的繼承者である。此處に特に科學的と云ふ點を强調する所以は此の三大思想家が哲學上で近似してゐる事は間違ひはないが、フロイドの研究範圍は（少くともその早期には）一層實驗的であつたと云ふ點に就いてゞある。

で、フロイド派の說に從へば、精神の軋轢こそは機能的神經障害、及びそれと屢々關聯して起つて來る精神分裂の主要原因であるのだ。併し斯う考へると當然、思想や記憶が無意識化するに就いて、外見上二つの異つた途をとるものであることを認めざるを得なくなる。人心の根本特徵の一つは、何等かの一定の瞬間に於ては意識は

極端に狹隘なものであると云ふことであつて、これは多くの心理學者が不思議に思ひつゝ論じてゐる所である。凡そ吾々が思索し、回想し、知覺し得る色々の事象の内たゞ微細な斷片事のみが、或る一時には意識され、他のものは外的事象か、聯想か、又は意識的慾求に依つて順次に意識面に上せられる迄待たなければならない。併し順番が來れば直ちに意識されるものではある。ところが分裂を來してゐる思想や記憶の場合はさうは行かぬ。さうして神經症の生じてゐる場合には正に此の分裂した思想や記憶が關係してゐるのである。かゝる場合には、如何に外的刺戟を加へても、自發的努力を試みても、それ等の思想や記憶を意識に上す事は出來ない。若し上されるとすれば、催眠術又は自由聯想法等の特殊の作用の助けに依つてのみ爲されるのである。宛も普通の記憶に對して見られない樣な、何等かの障碍か邪魔物が其れに近づき得ないやうにしてゐるかの如くである。第一種の一切の心的材料を、フロイドは前意識 Pre-Conscious と名づけ、第二種のものを無意識 Unconscious と呼んでゐる。

彼が心をこのやうに前とか後とかと空間的な意味で考へるのを局所的な考へ方と呼ぶのである。

無意識は、斯かる特殊な意味で（此の論に於いては、終始この意味で用ひる）精神障碍を作り出す事に於て、重要な役割を演じてゐるが、併し單にそれは斯かる病理學的な場合にのみ局限されるものではなくして、寧ろ總ての人間の精神の一つの根本的な組織であり、前に述べたやうに、心の軋轢の起る事に密接に關係してゐると思はれる。心のこの軋轢は心の健全、不健全を問はず總ての人々に共通な、いま一つの特徴である。事實、心の軋轢の結果の一つは、思考や意向が無意識の中に押しこめられて了ふ事である樣に思はれる。換言すれば、思考や意向が意識の領域に入るのを遮げられる事である樣に思はれる。この意識の領域から能動的に排除する心理過程を抑壓 Repression と云ふ。此れは心理學者や生理學者が禁止 Inhibition と云つてゐるもので、一種の統制作用である。こゝに注意すべきは、抑壓が無意識作用であり、故意の、意識的の押し出しでは無い事である。意識的の

『禁止』は、吾人にお馴染であるが、この無意識過程はそれに類似してはゐるが、同じではない。

此處で序ながら讀者に注意して置き度い事は、後年の著書の中でゞはあるが、アドラー Adler が、フロイド派心理學の根本を爲す所の無意識と抑壓との二概念を捨てたと云ふ事である。何故これを特に斷つて置くかと云ふに、それに依つて二者の特異點が明瞭になるからである。

併し、抑壓が心の軋轢の一つの重要な結果であるとしても、それを以て心の軋轢を解決する唯一の方法とする事は無理である。實際、一つの心的傾向が全的に、永久に、消失して了ふと云ふ意味に於ける完全なる抑壓と云ふものは、理論上から云つて、一つの限定的な場合であつて、實際上には僅かにそれに近い例を見るに過ぎぬ。あらゆる理由からして信ぜられることは、願望は抑壓に依つて完全に消滅させられてしまふものではなくして、機會さへあれば何時でも出て來やうとしてゐるとの意味で、存續してゐるのである。唯、絶えず抑壓力の監視に依つてのみ意識面に上る事を妨げられてゐるのである。

斯かる抑壓力（此れを總稱して檢閲 Censor とフロイドは云つてゐるが、この言葉は適當でないと云ふので、英國の心理學者から種々非難されてゐる）は睡眠中は働きが弱くなつてゐるから、抑壓されてゐる心的傾向（その多くは幼兒期から始まつてゐる）は夢の中に現はれて來る。夢がフロイドの所謂無意識への『大道』via regia となるのは、此の爲めである。併し、抑壓されてゐるものが、夢の中に現はれてゐるのを見ると、多くの場合、本來の願望そのまゝの形で現はれないで、歪曲されてゐる。夢が神經病の徵候に類似してゐるのはこの點に於てゞある。では、何處からこの歪曲は來るのかといふに、其れは恐らく檢閲の作用に依ると思はれる。此の檢閲はお役所の檢閲と同じで、色々の事實や意見が本當の姿の容易に分らぬ程に、適當な扮裝をこらして來るのでなければ、現はれ出ることを許さないのである。夢の內容（フロイドは潛在的な夢の思想から區別するために、顯在內容といふ名稱を用ひてゐるが）は、その時、神經病の徵候と同じ様に、葛藤する諸勢力（抑壓されるものと抑

壓するものとの軋轢）の結果として到達した相互の妥協として現はれる。

現在では、抑壓を起すものに就いてよりも、其の結果たる抑壓されたものに就いて、より多く知られてゐるが此れは精神分析學の進歩に就いての一つの予盾である。精神分析學も初期には、抑壓の起るのは抑壓されるものが、個人の道德的意識や、個性一般と調和しない爲めだと考へてゐた。そればかりでなく、檢閲と云ふものは、抑壓された願望とよりも、意識的な標準となる思想や行動と一致の態度を採るものと一般的に考へられてゐた。であるから、檢閲は抑壓された願望よりも、これを調べてみるに容易であると、人々は考へ勝ちであつた。併し乍ら、次第に研究が進むに從つて、此の考への適應出來る範圍が實に狹く、檢閲の道德は、實は殆ど無意識であつて、意識的な、倫理的な考へ方とは重大な諸點で違つてゐることが明らかになつた。其れに依つて、予盾の要素が取除かれたが、同時に此の無意識的道德の性質と起源とに就いて、新たに複雜多岐な問題が起つて來た。併しこれ等の問題に就いては、後に題を改めて論ずる事が便利である。それは夫れとしておいて、少々大膽で獨斷的ではあるが、この方面に於ける最近の研究の結果を豫想的に三つ擧げて置くことだけは必要である。

第一に、問題の無意識的道德に就いて新らしい考へ方が起きて來た。此の道德は、心内の確定的な實在と見られ、超自我 Super-ego と呼ばれる。檢閲が仕事をするのは、云はゞ超自我の命令に依るものである。

第二及第三に、超自我の道德は意識的自我 Conscious ego のそれと次の點に於て異る。即ち (a) 比較的古くから存在すること（即ち人間の幼年期に形成された印象に依存し、後年の經驗に依つてはあまり變化されない狀態で存續してゐること。）(b) 意識の上では正當であり、許され得べく思はれた事柄が、無意識に於ては許されぬと云ふ樣に嚴格であること。

フロイドが次の樣に云ふのは、この (b) の方の理由からである。「常態人は（抑壓されてゐるものについて云へば）、自分で思つてゐるよりも遙かに不道德的である許り

でなく、(超自我に就て云へば)、自分で思ひも寄らぬ程に道德的である。」

精神分析語彙(二)

一、イマゴー――無意識にある面影

一、云ひ損ひ――口すべり、無意識の意圖のために意識的の發言が亂されること

一、陰蔽記憶――或る記憶の中にそれ以前の記憶が陰蔽されて出て來ること

一、嬰兒症――成人に於ける幼兒心理の殘存。これは普通に人々の考へてゐる以上に多いことを知らねばならない

一、エス――一口に云へば『無意識』のことであるが、も少し超個人的に、非人稱的に考へられたものである。意識と無意識とが對立する如く、自我とエスとが對立するわけである

一、エディポス・コムプレクス――エディポス王のギリシヤ傳說から由來せし名稱。幼兒の兩親に對する性的感情關係を云ふ。卽ち概して云へば異性親を慕ひ、同性親を拒けむとするを云ふ。併し同性親に對するアムビヴレント的感情(憎惡の裏に尊敬を持つこと)をも意味することあり

一、エレクトラ・コムプレクス――女兒のエディポスなれども、これはエディポス・コムプレクスの內に包含せしめることが出來る。フロイドは特にこの語の必要を認めずと云ふ

一、エロス――ギリシヤ愛神の名より出で、精神分析學に於いては、廣く人間結合の契機と見なす。大體に於いてリビドーの概念と同じ

一、煙突掃除――アプレアクチオンの操作を例へて云へる言葉。患者が使つた言葉である

夏の行事二つ

盂蘭盆會

毎年の行事である盂蘭盆會の宵になれば私だちは家の門口に素燒の焙爐を持出し、その中で苧殼を燒く。而して女は子宮器一切の疾病を免かれると云ふので、その後此の焙爐を三遍跨ぐ。私の妹なぞも未に毎年母にこれを强要されて閉口して居るが、これが濟むと佛樣がお歸りになつたと云ふ。此の焙爐の中で苧殼を燒く事は、明らかに象徵的な受胎行爲を示すものである。これに據つて先祖代々の靈は象徵的に現世に再生する。處女がこれを跨いで下の病を免かれると云ふのも、これは寧ろ後になつて附會されたものであつて頭初に於いては祖先(父)との初夜權的性交又はそれからの受胎を意味したものと思考される。而して焙爐を三遍跨ぐと云ふ此の三なる數字や、それの行はれるのが家屋の門口であると云ふことなどに重大な意味がある。

此の期間が終ると佛前に飾られた供物の總ては川へ流される。これは明らかに羊水への還元卽ち死の象徵でありこれに據つて佛の、冥途復歸とタブーの忌避とが表示されて居る。

(東京。則近保良)

七夕祭り

『竹に短册たなばた祭り』と唄つては歩るくが、事實、北海道では竹は用ひずに柳の木に短册を下げる。アイヌの傳說によると、神は柳の木を以つて背骨となし、これを基礎にして人間を造つたとある。アイヌは人の生命は背骨に宿つてゐると信じてゐる。生命の根源性愛である。柳は小さな枝を切つて挿して置いても、多くは枯れずに根が生じる。七夕祭りは牽牛、織女の二星が天の河を渡つて相ひ會ふと云ふ傳說によるもので、その逢ふた夜にこそは『柳の枝に雪折れ無し』の精力が望ましい。

もう話しの種が無いと云ふ子供に、もつと長い話しをせよと云へば、決まつて『天から長がい〳〵褌が下りて來た』と語る。一メートルも二メートルもある長い短册はこの褌を象徵してゐる。褌は性器の所在を示すものでありまた性器そのもの丶象徵となる。

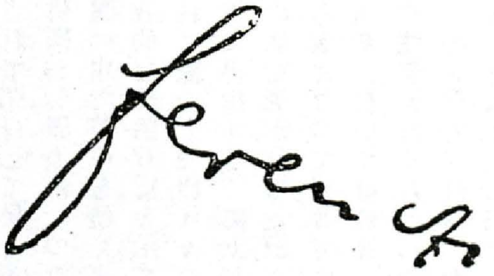
短册を下げると同時に、提灯をつけるが、ローソクは男性器を象徵することが屢々であるから、提灯は女性器を象徵したものであるかも知れない。これに燈をともすことは性交の象徵であるかも知れぬ。西鶴の物語の中に、結婚の夜に男女兩方の持寄つた灯を一つに合はせる習慣の話が書いてある。子供が『ローソク吳れ〳〵』と唄ひながら提灯をともして衝動的に街をねり歩るくのはなか〳〵印象的である。

翌朝川に持ち行き、あつさりと、これを『水に流がしてしまふ』のは、一夜の關係で責任を負ひたくないためかそれとも情死の象徵か。愛卽死、また愛後の死の象徵か。何れにせよ、タブーのものは一切水に葬られる。

(北海道。浪越春夫)

フェレンチー博士の死を悼む

フロイド博士の高弟にしてハンガリーの分析學者として斯學に貢獻するところ甚大であつたサンドル・フェレンチー博士 Dr. Sandor Ferenczi は久しく病臥中のところ五月二十二日遂に卒中にて長逝せらる。享年六十歳。博士の性格は善良にして好んでユウモアを弄し、明朗快活、才智縱横、空想豊富で、而も獨創の見解に於いて優れてゐたやうである。精神分析創業の元動の内にあつて、さきに長逝せるカール・アーブラハム博士を古典派と稱し得べくんば、フェレンチー博士は浪漫派と呼ぶことが出來る。



フェレンチー博士の署名

フロイド門下の人々の中でも師と最も關係の古い一人で、師が講演のために始めてアメリカに渡つた時には、ユングと共に師に隨行した有力な一人であつた。その時、博士は數名の日本人にして斯學に興味を持つた人々に會つたと云つてゐるが、それは何人であつたらうか。我々は知りたく思ふ。晩年は主として分析治療技法の改善に力を盡した。能動法、緩和法などは博士の創見とせられてゐる。

永く國際精神分析學會長として、『國際精神分析學雜誌』の編輯主任として、ブダペスト分析診療所長として活躍した傍、幾多の名篇好著を遺した。その主要なるものを次に紹介するであらう。現今分析學界に有力なるアレクザンダ、ローハイム、メラニエ・クラインの諸大家はみな博士の門下である。以てその遺德の廣大を察するに足るであらう。

一、『精神分析原論』„Bausteine zur Psychoanalyse,"（全二巻）

第一巻、理論篇——現實感の發展段階。不快肯定の問題。金錢慾の心理的起源。妄想症の起源に於ける同性愛の役割。アルコールと神經病。その他

第二巻、實踐篇——分析中の症候變化に就いて。聯想の自由性の誤用。强制せられたる空想。日曜神經症。幼兒時代に受ける去勢の心理的影響。裸体の恐怖。朝食嫌惡。性器象徵。その他

一、『精神分析應用論』„Populäre Vorträge über Psychoanalyse,"

内容——精神分析より見たる精神神經症。豫期せざる夢。暗示と精神分析。エディポス神話に於ける快不快原則の象徵的表現。分析者としてのアナトール・フランス。荒れ馬馴らし。信仰と不信と確信と。その他

一、『性慾研究』„Versuch einer Genitaltheorie,"

内容——射精行爲に於ける愛慾兩極性。兩極混合現象としての性交。愛慾的現實感の發展段階。性交時に於ける個々の行爲の解釋。個人的性機能。性交と蕃殖。性交と睡眠。その他

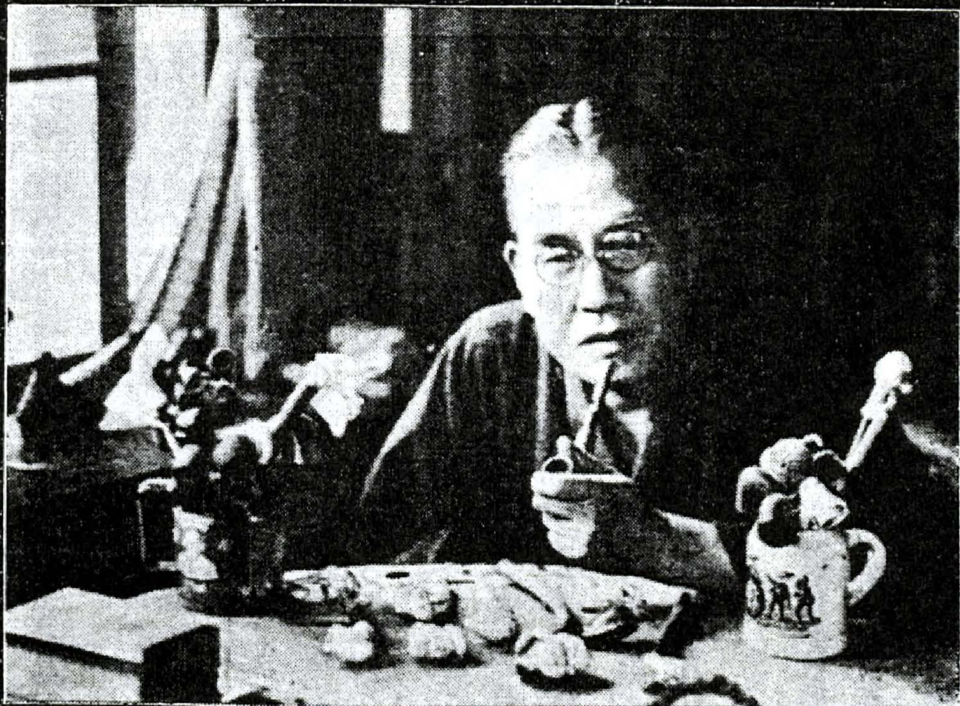
一、『ヒステリーと神經症』„Hysterie und Patho-neurosen,"

内容——神經症に就いて。ヒステリー分析技法の難點。或るヒステリー的ヒポコンドリー患者の分析。戰爭ヒステリーの二つの型に就いて

一、『性的習慣の精神分析』„Psychoanalyse der Sexualgewohnheiten,"

内容——尿道習慣。各個の性器習慣。習慣と症候。分析からの離乳的獨立。その他

（以上は何れもヸイン國際精神分析學會出版部の刊行にかゝる。）



松居松翁氏の死を弔す

わが劇壇の長老にして精神分析學に對して同情厚く、當研究所のためには創立以來、種々の意味で盡瘁せられた松翁松居眞玄氏は、既に各新聞紙の報導した如く、去る七月十四日午前三時十分、淀橋區下落合の自邸に於いて逝去せられた。我等こゝに謹んで氏の長逝を弔する。

氏が上演のために最後に創作せられたのは『岩倉具視』(五月中、歌舞伎座にて)であり、それが本誌本號に執筆せられてゐる岩倉具榮公の御祖父を主人公にとつたものであることも、また氏が最後に華々しく全力を擧げて當られたのが當研究所主催のフロイド喜壽祝祭劇であつたことも、總て我々には嬉しい因緣であり、なつかしい思ひ出である。氏が斯學への遺產的貢獻は、嗣子桃多郎氏や岩倉公の今後の活動となつて華さき實ることを信ずるが故に、かゝるよき種子を斯學の畑に残された氏に對して萬腔の敬意と感謝とを捧げるものである。

松翁自傳

明治三年二月十八日仙臺城下鹽釜町に生る、父眞房、母鶴子祖父榮藏眞則は上州大間々の産、伊達家財政窮乏の時、上書して經濟の道を講じ、擢でられて其財用方となる。藩公與うるに食祿を以てするも、之を食むを肯んぜず自ら市井の一私民と號し、城に登るに當つても佩ぐに兩刀を以てせず俳諧を嗜み、江戸の西馬を師とす。『合せもの離れものなり月と梅』『佛性のありとも見えぬなまこ哉』、『肌寒や二日つゞきし精進日』等の句は、故紅葉先生の激稱せらるところなり。氣字卓落頗る奇骨あり。死に瀕するや、恭しく身を起し、紙を展べて辭世の詠をとゞむ。その歌は卽ち在五中將が『いくつかゆく』の歌の一字かへしのみ。藩の財政に干與する事十餘年伊達家の財政頓に豐かなり。祖父歿するや、父眞房五歳の身を以て、上州高津戸より急興を鞭つて晝夜兼行、仙臺に至り松居家を襲ぐ、これより終に伊達家の士分に列す。眞房十九歳にして維新の變に會し、相馬中村の役官軍の爲めに包圍せられて負傷す、亂おさまりて後東京に遊學し、新錢座の慶應義塾に學ぶ、業を卒ずして横濱に英語の私塾を開き、後川路大警視の下に、警視廳に奉職す。諸所の警察署長として轉々せし後、支那貿易に着目し、事漸く緒に着きし時病んで歿す年わずかに三十三。子眞玄、孤兒として具に辛酸を嘗む。十一歳の春。仙臺中學校に入り、學ぶ事三年、病の爲に業を捨て、福島縣桑折なる角田林兵衛が許に、丁稚奉公をなす。居る事五年、志を立て東上し、專修學校に經濟を學び、國民英學會に英語を學ぶ。故博言學士イーストレーキ氏母子、特に松翁を愛し其家に寄寓して日夕語學に親しむ。仙臺の家、産を失ふに至りて、商人たらむとするの念を絶ち、坪內逍遙博士の門をたゝき、其敎を乞ふ。博士、『早稻田文學』を創刊せんの意あり、卽ち奥泰資と共にその門下に在りて、編輯に從事す。明治二十八年暮、中央新聞記者となり、後報知、萬朝報の二新聞に筆を執る。明治二十七年高田半峰氏の慫慂により、讀賣新聞に脚本『昇旭朝鮮太平記』五幕を連載す。之を脚本の處女作とす。明治三十二年、先代左團次の請により惡源太二幕五場を執筆し、爾來彼の死に至るまで數種の戯曲を提供す。劇界に出入してより二十餘年、譯著の脚本百四十餘種、上演せるもの九十餘種に及ぶ。外遊二回、倫敦劇術學校に演技法を學び、世界の名優と相知るところ多し。歸朝後、二タビ大患に罹り、所志を半途にして擲つを常とせしが爲め何等劇界に貢獻する所なく、碌々棲遲の間に老ゆ。大正三年ノム。ド。ブリユムを松翁と改む。たゞ此年より新たに佛蘭西語の學習を初め、羅甸、希臘の兩語を究めて後ひそかに創作する所あらんとす、知らず天は此愚庸の老翁に、特別の天壽を假し給ふやいかに。

内外彙報

フロイド書の焚刑

ドイツに於けるナチスの壓迫は遂に精神分析にも波及し、フロイドの著書もまた一部は差押へに、一部は焚刑の厄に會ふたと云ふことである。但しヸインなる國際精神分析學會出版部から、刊行せられる『分析運動』誌が『新聞紙の報導に依れば』と斷つてゐるところを見ると、直接ドイツの支部からの報道に基づいた報告ではないやうである。

フ博士祝祭劇の事

當研究所が主催せし『フロイド博士喜壽祝祭劇』に關する報告は『分析運動』誌上に掲載せられ、『エディポス劇』上演の事にも言及してゐる。但し同報告は、本誌六月號巻頭のドイツ文報告を彼等が見ざる以前、恐らく大槻氏がフロイド博士に寄せたる書翰に基き、なされたるものと察せられる。

精神病學者の分析學への感謝

ドイツの『神經病學及び精神病學雜誌』一四五巻（三、四號）誌上に於いて、ハーグの精神病學者シェルフェン氏 Th. van Schelven は『精神病學の發達』の題下に次の如く論じてゐる。

『精神分析學は無意識心理の分野を、獨特の純粹に心理學的な方法に依つて研究せんとした最初の試みである。今日の心理學は、既にフロイドの無意識的心理説を無視しては考へられないと云ふ事を承認するのは、學者として正直に他人の業績に感謝する所以であらう。精神病學の分野に於ける甚だ優れた論文にして、その思想の中核を無斷で精神分析から借りて來てゐるものも甚だ多い。フロイドは恐らく今更らしく感謝される事を期待するものでなく、自分の貢獻を意識して私かに慰めとすることであらう。』云々と。

イタリーの分析雜誌

『イタリー精神分析學協會』では、一年前から傳へられてゐた『イタリー精神分析評論』（隔月發行）"Rivista Italiana di Psycoanalysi"（Alberto Stock版）を發刊することゝなり、次いでまた次の出版社（ナポリのV. Idelson社）から『精神分析叢書』が刊行せられ、第一册はフロイドの『モーゼ論』であると。

精神分析の將來

アドリアン・トゥレル Adrian Turel は一九三三年第九號の『文學世界』誌上に於いて『精神分析の將來』の題下に、斯學が社會問題の解決に、殊に失業問題の解決に、重大な寄與をなすべきことを説いてゐる。現實に失敗せる多くの人々が必然的に幼兒性に退行するものである點から、その退行心理の研究と對策とを斯學に俟たねばならぬと云ふ。その他になほ斯學の重要性に就いて細論を試みてゐる。

『分析運動』五、六月内容

一『權利、暴力及びそれ等の本能的根元』（フロイド）

戰爭心理に關してアインシュタイン博士からフロイド博士に質問したるに應へたる答辯の一部。兩博士の問答の全文は最近當研究所に到着したから、多分本誌十一月、戰爭心理研究號誌上に伊東豊夫氏これを全譯するであらう。

一『醫學に對するフロイドの影響』（フェレンチー）同博士の絕筆

一『精神分析とは何ぞや』『無意識の力』ジョーンズ

ジョーンズ博士がラヂオ講演の全文。

一『宗教論』（F・キッテルス）

一『笑つてきまり惡き場合の心理』（T・ライク）

一『精神分析の根本原理』（シラギイ）

『イマゴー』誌六月號

一『詩歌と口唇滿足』（A・A・ブリル）

一『精神分析と生物學』（P.シルダ）

一『蛛蜘の性心理』（H. Peters）

一『プラトーン的愛』（Hans Kelsen）

一『火の神話に就いて再言』（Alb. Schäffer）

一『フロイドの「リビドーの型」に就いて』（Dorian Feigenbaum）

一『精神分析と本体論』――（Paul Kecskeméti）

一その他……

六、七月分析關係記事

一『歐米大陸遊記』（鶴見祐輔著、大日本雄辯會講談社刊行）

內に『伯林より維納へ』と云ふ章があり、その內に更に『フロイドの書齋』と云ふ節がある。

一『問題の子供』（ニイル原著、霜田志譯、刀江書院刊行）

精神分析的敎育の實際論。來月號本誌上にて細評の筈。

一『ジイド以後』（中村喜久夫著、金星堂刊行）の中に『分析小說』『フロイド主義』などの項あり。

一『マルセル・プルウストに於ける記憶』（三省堂刊行『歐羅巴文學研究』最近號中に於ける根津憲三稿。）

一『精神分析と英文學』（『英語英文學講座』第二冊、長谷川誠也稿。）

一『處女性と貞操』（『婦人公論』七月號、齋藤長利稿。）

一『マクベスの精神分析的鑑賞』――シエークスピアの象徵主義的技法（『藝術殿』七月號、大槻憲二稿。）――先月號の續編。

一『偶感』（『現代』七月號、同氏稿。）

一『スカトロジー說』（『新青年』七月號卷末『縮刷圖書館』）――本誌六月號の長崎文治稿『排泄物心醉』の要領を紹介せしもの。

一『フロイドとマルクスとの焚書刑』（『書物展望』圓地與志松稿）――題はからだが內容ではフロイドに觸れてゐない。

一本誌前號內容に就いては奧付上を參照のこと。

七月研究會例會

七月十一日午後五時半から例に依つて萬世橋驛前アメリカン・ベーカリーに於いて催す。出席者廿六名、頗る盛會であつた。食後、大槻憲二氏立つて來會者一同への挨拶を述べ、客員及び初出席の方々を紹介した。客員としては第一に、

東洋大學教授、兒童心理學者、高島平三郎氏が出席された。氏の高橋藏相を彷彿せしめる巨軀が會場に見れると、東洋大學出身の長崎文治氏は將軍の前に出た若き士官の如く、舊師を迎へて慇懃に挨拶したに對し、教授は『おゝ君も來てゐるのか』と云ふ慈父の如き應對ぶり。師弟の間の美しい情景をまづ點出して會場の空氣を和やかにした。教授はわが心理學界の長老であつて、かつてヰインにフロイド博士を訪れて共に兒童心理を談じた記憶を述べられた。その詳細は何れ本誌來月號で教授の自文に依つて披露するであらうから、今日は控へておく。

次に、客員としては警視廳に勤務して犯罪者の心理調査に從事してゐられる醫學士金子準二氏が出席された。氏はまづ左翼巨頭連の轉向事件を取上げ、彼等の性格が如何にヒステリッシュであり、如何に矛盾した行動をとるものであるかを數々の事實を擧げて說明し、次に街頭のエロ的犯罪に就いて種々の興味ある事實を擧げられた。

第三には米人にして永くスヰッルなるユング博士の分析を受けて來、斯學に非常に興味を寄せてゐるフラワー夫人 Mrs Flower が立つて挨拶を述べられたが、女史は非常に疲れて來たと云つて、只今日この集りに參加させて貰つたことを感謝すると云ふ意味を簡單に述べて辭去したが、座談の時には相當活潑に種々の話題に花を咲かせてゐた。

第四に、矢部八重吉氏立つて、金子氏の轉向心理論その他を批評した。轉向派の人々の心理は欝憂躁狂的と云ふべきだと說きその他の問題にも言及した。併し轉向問題は何度までが意識心理過程であり、何度からが無意識心理過程であるかを決定することが、先決問題だとの意見も個人的の話の中に出た。

その他、初出席の方々には

東洋古典醫學校長……南　拜山氏
府立東京商工獎勵館長…小野　俊一氏
醫家……………………竹內　芳衛氏
探偵小說家、犯罪心理研究家…森下　森村氏
帝國人造絹糸株式會社員（田內長太郎氏令弟）………田內　貞喜氏
目白女子大英文學科在學…瀧川華子氏
日本大學心理學科………下山　善高氏
心理文學研究家…………則近　保良氏

などがあつた。古顏としては、右言及以前に、荒川龍彥、小林五郎、伊東豐夫、田內長太郎、時平さきを、江戸川亂步、小松德、小野田幸雄、松田俊武、大槻岐美、佐藤基、井原錄郎の諸氏があつた。

矢部氏の後になほ話題が殘つてゐたが、九時半頃散會となつた。

『養父』再上演

大槻憲二氏作『養父』はフロイド喜壽祝祭劇の際に初上演せられたが、本月十四日、午後六時から、日本大學醫學科學友會の演劇部に依つて、麴町區有樂町蠶糸會館ホールに於いて再演された。

編輯後記

『夢の研究第一特輯號』を漸く世に送ることが出來た。第一と斷つてあるのは、夢はなか〳〵一回位の特輯で論じ盡せないので二回、三回を豫想するからだ。今度のは主として對象を西洋の夢の研究に專らにした。豫告にあつた日本の夢に關する諸研究は、從つて第二特輯の方に廻すことにした。高木氏の『聖書の夢の研究』は岩倉氏譯ステーケル博士文中にそれへの言及があつて重複するから控へることにした。夢の分析實例は、いくらも面白いのがあるが、なにしろ事個人の秘事に亘るので、種々の事情で公にしにくいものが多いのを遺憾とする。讀者これを諒せられよ。

來月號は『兒童心理研究號』とします詳細は豫告欄を御覽下さい。これもなか〳〵一回ぐらゐの特輯では論じ盡せるものでない。なにしろ、精神分析が抑々兒童心理學だと云つても甚だしい過言でない位のものだから……。今後は、なるべく、各號一定の題目を捉へて編輯したいと思ふ。

×

執筆者中の新顏を紹介いたします。

岩倉具榮氏は岩倉公爵家の當主である事は申すまでもない。明治三十七年生れ一高を經て東京帝國大學政治科を昭和二年に卒業。後、内務省及び宮内省に勤務し、今日は閑地に就き文藝研究に從事すその譯せられた、象徵論はステーケルの名著『夢の言葉』の卷頭論文であります

×

木村廉吉氏は大正十一年京都帝大經濟學部卒業、大正十五年東北帝大醫學部卒業、爾來引きつゞぎ同大學精神病學教室にあつて研究せられる同大學助教授。他方、同教室から隨時刊行せられる『精神分析學論叢』の編輯主任としても活動せらる。

×

大槻氏の譯されたフロイドの『夢の新說』は、第二號の、彙報欄に紹介してある『入門續篇』"Neue Folge der Vorlesungen" 中の卷頭論である。同書の他の論文は、逐次に同氏に依つて本誌上で紹介せられるであらう。

『夢は願望充實』と云つて語弊があると云ふなら、『願望充實への試み』と云つたらよからうか、なか〳〵頑張つたものである。ステーケルは自己警告の夢の論は結局願望充實論に還元されるのでなからうか。

×

大槻氏の『救助願望論』の前號所載分中に『琵琶歌』の女主人公を『星野』としてあるのは『里野』の誤りであるから訂正しておく。これは誤植ではなく、筆者の思ひ違ひである。その動機は大槻氏旣に自己分析して興味ある抑壓過程を發見したが、紙上で公にするわけに行かないさうである。なるほど里野であればこそ、彼女は作者にとつて『母』であるのだ。古里だから……。主人公貞次は作者の分身であることは勿論。

×

故フェレンチー博士著書の英譯書目(小柳津邦太氏調)を紹介しておきます。

1. Contributions to Psycho-Analysis (tr. by E. Jones.)
2. Further Contributions to the Theory and Technique of Ps-A.

3. Psycho Analysis and the War Neuroses
4. Theory and Technique of Ps-A.
5. *S. Ferenczi and O. Rank*: Development of Ps-A.

×

彙報欄に紹介しておいた通り、イタリーにも分析雜誌が出來た。日本の方が一足お先に失禮したのは少々愉快である。これで文明國と云ふ文明國で、分析雜誌のない國は一つもないことゝなつた。滿天下の讀者よ、日本の文化の名譽のために、乞ふ本誌を支持せよ、と云つたらエゴイステイックに聽こえるかな？、そんな筈はないと思ふのだが……。

×

毎年の例に從ひ、八月は研究會を休みます。海に山に行かれた諸氏がさまざまな分析觀察の資料を我等に豐富に提供せられむことを希ふてやみません。では、皆さん御機嫌よろしく。また涼しい秋にお目にかゝりませう。

前月號內容

定價金五十錢

昭和八年七月二十日印刷
昭和八年八月一日發行
定價五十錢（郵稅二錢）
第四號

東京市本鄕區駒込動坂町三二七
編輯者 大槻憲二
東京市日本橋區通三丁目七番地
印刷兼發行者 依田初男
東京市日本橋區通三丁目七番地
印刷所 不二印刷出版社

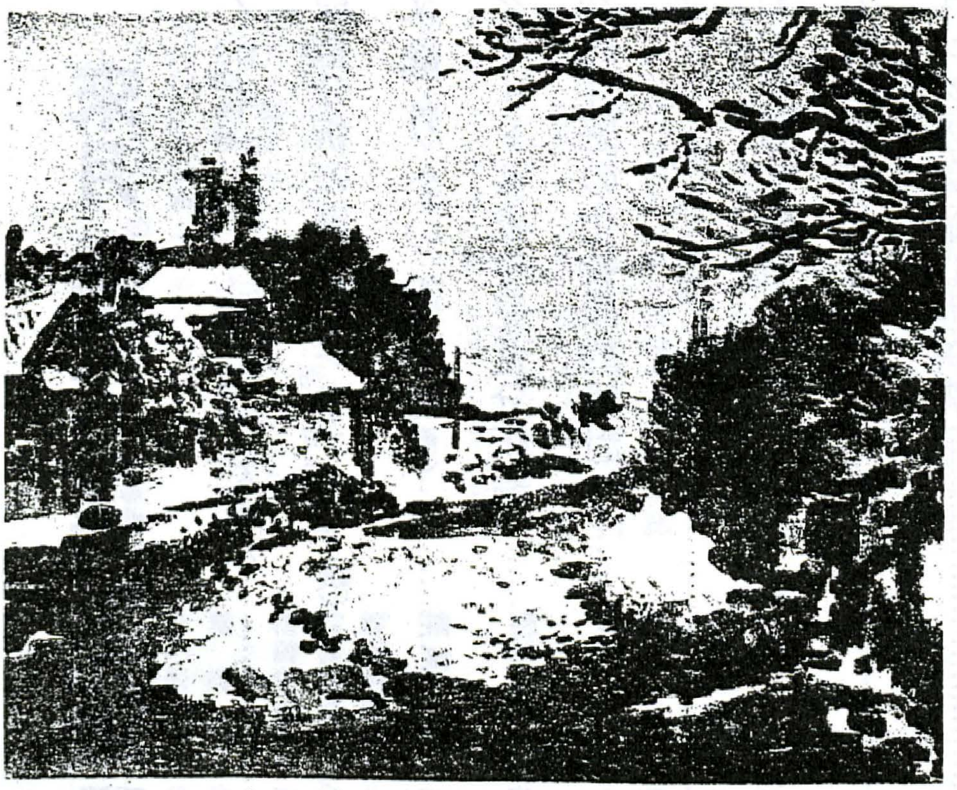
定價一部 五拾錢 郵稅二錢
半年分 參圓 送料共
一年分 六圓 送料共

御注文規定

●本誌の御注文は一切前金に御願ひ致します。
●御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京三八六九〇番へ御拂込み下さい。
●郵券代用の場合は一割增に願ひます。
●本誌廣告に關しては、御照會次第社員を伺はせます。

東京市日本橋區通三丁目七番地
發行所 不二出版社
電話日本橋(24)四三四七番
振替口座東京三八六九〇番

草光信成氏寄贈作品頒布會



精神分析學に關する内外の文献は只今では獨立の一圖書館が出來てもよいほどまでに多數に上つてをります。當研究所では全力を擧げて各國文献の蒐集にも努力してをりますが、何分にも資力に乏しきを嘆じてをりましたところ、この度、帝展の無鑑査推薦作家として、特色ある畫風を讃へられてゐる草光信成氏がその自信ある水彩畫約十餘點をその資にとて御寄贈下さいました。草光氏の水彩畫の優秀なる事は、二科會員曾宮一念氏が『現今水彩畫筆をとつて草光氏の右に出づるものはないと確信する』と云ひ、本研究所の大槻憲二氏が『その風格の高雅に於いて雪舟を偲ばせる』と云つてゐるに徵しても分ると思ひます。點數に限りがありますから御希望の方はなるべく早く御申込みを願ひます。

額縁大きさ……一尺六寸七分—一尺四寸

價　格……各二十圓（送料不要）

御拂込みの方は振替
（東京三八六六九〇番）にて願ひます

東京精神分析學研究所

藝術殿

坪內逍遙博士會號執筆

八月號（第三卷第八號）

要目

一部 定價五十錢（送料一錢五厘）

編輯 財團法人國劇向上會 東京市淀橋區戸塚一丁目 振替(東京二〇二九〇番)

發行 梓(あづさ)書房 東京市神田區駿河臺町一ノ八 振替(東京七八六四四番)

荒川龍彦著

（近刊・豫告）
内容見本拝呈

T・S・エリオット

四六判特漉上質紙約三百頁
コロタイプ寫眞二葉
舶來クロス金字装幀函入
豫定價壹圓八拾錢・稅十四錢

四百部限定出版（内百二十部非賣）

豫約申御込受附開始（豫約金不要）

現代の英文學に一つの主流を形成する主知的古典的文學の精神を理念にまで高め且つ詩に於ての實踐に到つてその價値をかのリリカル・バラッヅに比せらるゝところのT・S・エリオット、何人もその耀やかしい存在を認めるであらう。又彼の存在は啻に英吉利のみに限らず、今やヨーロッパのエスプリとしてヴァレリやジイドと並行して問題的である。その批評家としての地位もアアノルド以來の一人者といはれる。併し乍らエリオットの批評は同時に彼の思考の表示であり世界觀の態度を明かにしてゐるが故に、彼の詩に於けると等しく難解であるはいふまでもない。著者は主として批評家としてのエリオットをその代表的な論文を通じて隈なく、且つ体系的に解釋し、攷究せんとする。而してその意圖に當つて著者は自ら客觀的態度を持して遍くエリオットの價値を究明し、尙、それらが現代に於ける世界觀の如何に關聯するかを生ける具体的な問題として論じ、それへのサイドライトとして、併せてT・E・ヒュウムその他の人々をも顧り見てゐる。惟ふにこの書は啻にエリオット批評の紹介たるに止まらず、眞に彼への本質的批評研究であり、且つ、二十世紀英吉利評壇の一動向を窺知するに最も適したるものとして、敢て江湖に薦むることを躊躇しないであらう。

東京日本橋通り三の七
不二出版社
電話日本橋(24)四三四七番
振替東京三八六九〇番

早稲田大學教授 日夏耿之介著

（近刊・豫告）內容見本拜呈

英文學史に於ける浪漫象徵詩派攷

菊判特漉上質紙約六百頁
コロタイプ寫眞數葉
舶來クロス裝幀背金字函入
豫定價參圓五拾錢・税貳拾貳錢

五百部限定出版（內百三十部非賣 申込殺到・殘部僅少）

豫約御申込受附開始（豫約金不要）

日夏氏が詩人としてのみならず文學史家としても又卓れたる所以のものは、孜々として倦むなき博捜の熱意と調整の綿密、考證の精嚴と批評の尖鋭なるところにありと稱せらる。既に詩史及び襍考に於て遍くその價値を吾々は等しく認めるところ。いま本書は日夏氏の専攻である英文學の領域に亘つて、多年の成果を纏めて世に問はんとする。惟ふに著者も本書を以て最初の英文學研究論集であるといへる如く、英文學史に於けるこれら詩派の代表詩研究であるとともに、その流派の沿革等を極盡素描したるものにして、著者の特色は茲に遺憾なく發揮されたといへよう。T・S エリオットはアアサア・シモンズの『文學に於ける象徵派運動』を評して、吾が生涯の行路に多大なる影響を與へたる書であるといへる意味に於て、本書も當にシモンズの該書と比肩し得ることは信じて疑はざるところ。敢てこれを江湖に薦む。

內容目次

英吉利浪漫主義の文學
マンフリッドに於けるファウスト
『西風賦』の詩想技巧及その位相
エドガァ・アラン・ポオ
大鴉緣起攷
大鴉攷余説
信天翁と大鴉と鳩と
『閃光』に於ける輪廻思想に就て
詩人ワイルドの戯曲解題二種
「天上獵狗」の思想及技巧
英吉利象徵主義の文學
「病める薔薇」に就いて
キルヤム・バトラ・イエエツ
偶成と推敲と及びその錯綜詩と
デ・マアルの浪漫沿革論

東京日本橋通り三の七 不二出版社

電話日本橋(24)四三四七番
振替東京三八六九〇番

昭和八年七月七日第三種郵便物認可
昭和八年七月二十日印刷納本
昭和八年八月一日發行
毎月一回一日發行

精神分析 第四號

I. Jahrgang, Heft 4, August 1933. Erscheint monatlich.

ZEITSCHRIFT FÜR PSYCHOANALYSE

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse."

(Sonderheft für Traumstudien)

Inhalt

Preis des Einzelheftes 50 Sen.

Fuji-Shuppansha Verlag.
Nihonbashi, Tohri 3 chome, 7.
Tokio Japan.

定價 金五拾錢 郵稅二錢